
青の旋律

一宮 集

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青の旋律

【Nコード】

N4936H

【作者名】

一宮 集

【あらすじ】

老舗のライブハウス”Riot”を任されている元ベースリスト・郁崎銘。ある夜、ふらりと店に現れた美女と、残された青い絵の具をきっかけに、彼は、予想もしなかった事態に巻き込まれていくのだが・・・

第一話

その日のG i gも、無事に終わった。

客の入りは上々、ノリも上々。

熱狂の余韻を残したステージでは、メンバーが黙々と機材の撤収を始めている。

「随分、調子良さそうじゃないか？」

銘は、にこやかに話し掛けた。

「まあね。リハビリがきいたかな」

グランド・ピアノの蓋を慎重に閉めながら、明が答える。
はにかんだ笑顔は、好調の証だ。

「珍しく、リクエストに応えたりして。まるで、明じゃないみたいだ」

「僕だって、たまにはそういう気分のあるさ」

「照れることないよ。大人になったなと思って」

「少しはサービスしないと。一応、ここの看板だからね」

そう答える美貌のピアニストの横顔を、彼は感慨深く見詰めた。

18歳で日本に帰ってきて以来、彼女は様々な不遇を経験してきた。傍で見ていてはらはらするくらいに。

しかし。

明は何とかそれを克服し、この世界で新たな基盤を作り始めていた。ようやくその実力が認められてきたのである。

カウンターに残されたグラスを集めながら。

彼はおよそこの場所に似つかわしくないものが、ぽつんと残されていることに気付いた。

「あれ？」

「どうしたの」

「絵の具だよね、これ」

「見せて」

明はつと立ち上がると、彼の指からそれを引っ手繰る。

「アクリル絵の具だよ。セルリアン・ブルーか」

「へえ。じゃあ、絵を描く人なのかな」

「何の話？」

「カウンターの。ほら、”Blue In Green”をリクエ
ストした」

「ああ。なるほどね。だからあの曲だったのか」

彼女は妙に納得して、その絵の具をカウンターに戻した。

「まだ20代前半かな。なかなかの美人だったよ」

「ふうん。意外と、銘さんの好みなんじゃない？」

「いや、そういう訳じゃないけど」

「新しいの、作っちゃえば？ 修子さん、しばらく帰って来ないんでしょう？」

「そうはいかないよ」

「ほんとと、融通がきかないって言うか。真面目なんだよね」

氷とグラスを受け取りながら、彼女は、からか揶揄うように笑った。

昔から、明は自分のことを”僕”と呼ぶ。
音楽の世界にあつて、女扱いされることが許せないかららしい。
彼女には他にもいろいろな拘りこだわがあるのだ。

洗い物を済ませた頃、ステージ前の丸テーブルでは打ち上げが始まっていた。

4人は乾杯し、大いに気炎を上げている。

今日は、サックス奏者の内藤圭介ないとうけいすけを交えたカルテット。
ベースに松尾葵まつおあおいを迎えた若手ばかりのバンドだが、ここ最近人気が
出て来ている。

カウンターの内側から彼等を優しく見守っている銘自身も、優れた

ベーストだ。

病気がちのオーナーに代わり、この店を取り仕切るようになってから、ステージへ上がる回数はめっきり減った。

しかし、まだ現役を退いたつもりはなかった。他のベーストが穴を開けた時は、彼がその代役を務めることになっていったから。

明が言うように。

彼の恋人は、ここから遙か遠い場所にいた。

去年北海道大学に入学することが決まった彼女は、東京から札幌へ引越したのだ。

別々に暮らすようになって、すでに、1年と5ヶ月が過ぎた。

その間。

彼は決して、彼女を忘れた訳ではない。

しかし、離れている間に、嫌でも記憶は薄れていく。

そんな自分を、彼は何処か不如意に感じていた。

その落ち着かなさを取り払うようにして、煙草に火を点ける。

弱りかけた心臓に悪いことは知っていたが、どうしても止められないのだ。

その時。

店の電話が鳴った。

反射的にBGMのヴォリュームを落とし、煙草を揉み消しつつ。

彼は、受話器を取る。

「はい、R i o tです」

「…あの」

「はい？」

「先程、そちらに…」

相手は若い女性のようにだった。

しかし、その声は小さくてよく聞き取れない。

彼は子機を耳に当てたまま、バック・ルームへ移動する。

「すみません。ちょっとお電話遠いんですが」

「あの、わたし…忘れ物をしてしまったみたいで」

その言葉で。

ようやく思い出した。

「ああ、絵の具ですよね？」

「ありましたか？」

「はい。こちらでお預かりしています」

「良かった。明日、取りに伺ってもいいですか？」

「ええ。いつでもいいですよ」

「お店は何時からですか？」

「平日は、午後１時から開けています。でも、俺はいつでもいますので」

「じゃあ、明日の午後伺います。失礼ですけど…」

「あ、郁崎^{いくさき}です」

「郁崎さん…わたし、アヤです」

「アヤさんですね。じゃあ、明日、お待ちしておりますね」

話し終わって、電話を切ったあと。

彼の中には不思議な感触が残されていた。

以前にも聞いたような声、その話し方。

何かが記憶とシンクロしつつあった。

しかし。

それが何かを思い出すのには、時間がかかりそうだった。

彼はカウンターに戻り、絵の具を手にする。

それからメモを取り、ちよつと迷ってからこう書き記す。

絵を描く人に相応しい字を、彼は無意識に選んでいた。

> 8 / 30、彩さん<

それをチューブに貼り付けたあと。

彼はその絵の具を見ながら、失われた記憶を何とか取り戻そうとしていた。

「銘さん！」

不意に、明が叫んだ。

彼ははっとして、振り返る。

「音楽。忘れてるよ」

「あ、すまない」

慌てて音量を元に戻すと、JBLのスピーカーが再び息を吹き返す。

その圧倒的な音の洪水を浴びながら。

彼はようやく思い出した。

3年前。

彼女と、この店で一度会っていたことを。

第二話

3年前の冬。

明が、ニューヨークから帰ってきたばかりの頃だ。

その日は1ステージ目から満席で。

狭い店内には人が溢れ返り、立ち見も出た程だった。

この店のオーナー、山崎馨やまざきかおると共に、彼は忙しく働いていた。
演奏など聴いている暇もない。

オーダーを取りつつ、バイトの学生に指示を飛ばす。

そんな時。

「すみません」

カウンターの客に、声をかけられた。
振り返ると、風采の上がない男が一人、遠慮がちにメモを差し出してきた。

「リクエスト、お願いしたいんですが」

銘は愛想良く微笑んで、その紙を手取る。

曲は、”My One And Only Love”。

スタンダードのラブ・ソングだ。

まずいな、と、彼は思った。

明の嫌いな曲だからだ。

ふと見ると。

その客の隣には、綺麗な女性が一人。

真っ青なカーディガンに、白いブラウス。

伏目がちに、彼を見詰めている。

どうやら。

カウンターの下で、手を繋いでいるようだ。

「近々、結婚するもので」

言い訳しながら、男は顔を赤らめた。

「そういうことでしたか」

銘は、納得した。

頷いてのち、控え室へ向かう。

丁度、10分間の休憩に入っていたのだ。

「リクエスト？」

案の定。

明は、眉を顰^{ひそ}めた。

「うちは受けないって言ってたでしょう。しかも、よりによってこの曲だなんて」

「そう言つと思ったよ。でも、悪いけど、何とかしてくれないか」

「訳ありなの？」

「まあね。お客さんに、いい思い出を作ってあげるのも、ミュージシャンの使命だと思うけど」

その紙片を睨みながら、明はしばし黙考した。それから、大きく溜息をつく。

「…仕方ないな。銘さんの頼みなら」

「やってくれるかい？」

「その代わり、チャージバック弾んでよ」

「判った。馨さんに言っておくから」

彼は、カウンターへ戻ると、その旨を二人に伝えた。

2部の半ばに、明は約束通り、その曲を演奏した。

嫌いと言う割には、きちんと情感の籠もったピアノを弾く。

我儘で気難しいけれど、彼女はあくまでプロなのだ。

カウンターの二人は、仲良く寄り添って、その曲を聴いていた。

彼女は途中、涙ぐんでしまう。

その細い肩を、彼はそっと、抱いてやる。

そんな二人の姿を、銘は、カウンターの内側から見守っていた。

天然パーマの中年男と、若い美女。

不思議な組み合わせに思えたものの。

そんな姿は、なかなか微笑ましかった。

アンコールの拍手を、ようやく諦めて。
客は続々と、席を立ていった。

今日のG i g も、無事に終わったようだ。

後片付けに追われる銘を、男は引きとめた。

「これ、バンドさんに」

そう言つて、一万円札を握らせてくる。
さすがに、銘も不安になる。

「こんなに、いいんですか？」

「ええ。お陰で、素敵な夜になりましたから」

「判りました。こちらから、お渡ししておきますね」

帰る二人を、階段の上まで見送ったあと。
ステージでファンと話しているメンバーに、その金を渡そうとした
彼は、

その札に青い絵の具がついていることに気付いた。

「これ、チップ。リクエストくれたお客さんから」

「うん。ありがとう」

明は躊躇^{ためら}わず、それを手に取る。

圭介と、ベーシストの葵^{あおい}が、それを覗きこむ。

「C万か。豪気だな」と、圭介。

「いいお客じゃないですか」

「そんなに貰えるんだったら、あと何曲かやるんだったな」

ドラムの徹とほがおどけてそう言つと。

一同、思わず顔を見合わる。

不意に。

明は、その青い塗料に気付いたようだ。

「何、これ？」

「絵の具みたいだね」と、銘。

「絵描きか何かなの？」

「見た目は、そんな感じだったな」

「へえ」

「何だか、変わった雰囲気の人だったから。案外、そうかもね」

「まあいいや。ありがたく貰っておくよ」

やや首を傾げながらも。

彼女はその札を、ジーンズの尻ポケットに突っ込んだ。

それからすぐに、恒例の打ち上げが始まって。

彼等はいつものように、アフター・アワーズを始めた。

お客とは関係なく、ミュージシャンが自らの楽しみのためにする演奏には、

金を貰うためのG i gとはまた違った面白さがある。

酒を酌み交わし、散々盛り上がったお陰で。

彼は、その札のことも、奇妙なカップルのことも、すっかり忘れてしまっていたのだ。

第三話

いつの間にか。

彼は、広大な砂浜にいた。

肌を焼き尽くそうとする、強烈な日差しの中。

目を細め、思わず手を翳すと。

真っ白な砂の向こうに、何かがはためいているのが見えた。
その彼方には。

恐ろしく深い青色を湛えた、穏やかな海が広がっている。

足を取られながら、海へ向かって歩いていくと。

そこには、無数の杭が打たれている。

彼の背丈を超える高さの、その杭と杭との間に張られたロープには
それぞれ、

白い大きな布がかけられている。

銘は、恐る恐るそれに触れてみる。

薄く艶やかなその感触は、絹のように思えた。
ふと、指先を見ると。

その布は、見る間に色を変えていく。

眩いまでの純白から、滴るような青へ。

彼は驚いて、得体の知れない布から離れた。

砂に埋まる足元を見ると、そこもすでに、白から群青へと変わりつつある。

彼には、自分が何故こんな場所にいるのかが判らなかった。

そして今、自分に何が起きているのか、想像もつかなかった。

(どうということだろう、これは)

訝りつつ、顔を上げた時。

翻る大量の白布の向こうに、明らかな人影を見た。
咄嗟に。

彼は、走り出す。

相手は慣れた様子で、砂を蹴って走っていく。

その白い服の裾を、彼の目は辛うじて捉えている。

「ちよつと、待って…」

深い砂に惑わされ、縛^{もつ}れる足に苛立ちながらも、彼は追^{すが}い縛^{もつ}る。
その体に、指先に触れるごとに、その布はじわりと変色していく。

しかし、彼は構わず、白布を掻い潜り、砂を蹴上げて、ひたすらに
影を追った。

その相手が、何かを知っているような気がしたからだ。

何とか、彼女と話をしなければ。

ここから抜け出す方法を、訊かなければ。

そう思ってから。

彼は、はっとした。

—— 彼女だつて？

どうしてあれが、女性だと判るんだ？

その時。

黒い人影は、不意に立ち止まる。

薄絹の向こうに、細い手首が見えた。

ついに彼は、追いついた。

息を弾ませながら、相手を捕らえようとする。

迷わず彼は、彼女を抱き締めた。

その、目に痛いほどの純白の布越しに。

しかし。

そこに、彼女の姿はなかった。

白い布は見る間に、鮮やかな赤に染まっていく。

まるで、血飛沫を浴びたかのように。

次の瞬間。

彼は、跳ね起きていた。

自分のベッドの上で。

肩で息をしながら、額の汗を拭う。

今しがたの夢は、まだ生々しく、その身を貫いている。

気を取り直して、シャワーを浴びている間も。

恐怖のような、安堵のような。

これまで感じたことのない、不可思議な感触があった。

（あんな妙な夢を見るなんて）

彼は、自分の手をじっと見詰める。
そこには当然ながら、どんな色も残されてはいなかった。
体を洗い終え、蛇口を捻りながら、彼は考えた。
多分。

あの、青い絵の具のせいだろうと。

真新しいシャツに袖を通したあと、銘は店へと向かった。
地下にある自室からそこまでは、僅かな距離だ。
昨夜の淀んだ空気を追い払うように、排気口を開け、換気扇を回す。
どうしてもこの時期は、湿気が溜まりやすくなる。

湯を沸かしながら、彼は、カウンターの上の絵の具を手にとった。
翻る白い布が、青に染まっていく時の光景が、嫌でも蘇ってくる。
思わず溜息をつき、煙草に火を点けた時。
店の電話が鳴った。

やや緊張した気分で、銘は、その電話を取った。

「はい、R i o tです」

「あ、早くにすみません。わたし、昨日の…」

「ああ、彩さんですね。今、開けますから」

彼は手短に言うと、電話を切って階段を上がる。
古びたシャッターを押し開けると、目の前に、携帯を手にした彼女の姿があった。
薄いピンクのカットソーに、細身のジーンズ。

華奢な肩には、真っ赤なショルダー・バッグ。
日の当たる場所で見ると彼女の姿は、銘が想像していたより、ずっと若かった。

「まだ、開店前ですよね？」

申し訳なさそうに、彼女は言う。
澄み切った瞳が、無心に彼を見上げている。

「あ、いえ。大丈夫です」

「すみません。もっと遅い時間に来るつもりだったんですが、予定が入っちゃって……」

座っていた時は判らなかったのだが、彼女はかなり小柄だった。
長身の彼と向かい合うと。

可愛らしい肢体は、その腕の中に簡単に収まってしまいそうだった。

彼女と初めて視線を合わせた時。

彼は、自分がいつになく動揺していることに気付いていた。
しかし。

その心の揺れを振りきるように、彼は何とか笑顔を返した。

「いえ、構いませんよ。どうぞ」

彼のあとに続いて、彼女は階段を下りてくる。
カウンターの椅子を勧めてから。
彼はあらためて、彼女に絵の具を手渡した。

「え？」

付けられたメモを見て、彼女は驚いたようだった。

「どうして、わたしの名前をご存知なんですか？」

「絵を描く人みたいだから。多分そうじゃないかなと思って。当たりましたか？」

「ええ。びっくりしました」

彩はそう言って、にっこり笑った。

「良かった。違ったらどうしようかと」

その前にコーヒークップを置きながら、彼は肩を竦めた。軽く会釈して、彼女はそれに口を付けた。

明かり取りに穿たれた窓から差し込む光の中に、白い湯気が立ち昇る。

それを眺めつつ。

彼は、今朝方の不思議な夢を思い出していた。

「…あの、彩さん」

「はい」

「ひょっとして、シルクスクリーンですか？ 得意なのは」

彼女は驚いて、顔を上げた。

「ええ。でも、どうしてそれを？」

彼は余程、今朝の夢のことを説明しようかと思った。

あの、原色に彩られた不思議な渚のことを。

しかし。

結局、彼は諦めた。

初対面同様の彼女に、変な奴だと思われなくなかったからだ。

「いや、何となくです」

「勘が鋭いんですね」

「いえ、別にそういう訳じゃ……」

「ここ数年は、そればかりですね。油彩や水彩ばかり描いてた時期もあつたんですが」

そう言つと。

彼女は視線を外し、顔の前で指を組む。

それから、遠くを見詰めるように微笑んだ。

薄い茶色を湛えた髪が、細い肩にさらりと落ちかかる。

その姿は。

彼の胸に、微かな波紋を広げていた。

言葉が途切れたあとに、奇妙な沈黙が横たわる。

通りの雑踏と、タクシーのクラクションを除けば。

彼はその静寂に堪えかねて、オーディオのスイッチを入れる。
たまたま入っていたのは、ジョン・コルトレーンの”Ballad

s”。

少しだけ、緊張が薄れたような気がした。

珈琲を飲み終わると、彼女はバッグを開け、財布を取り出した。

「お幾らですか？」

「あ、いいですよ。まだ、営業時間前だし」

「でも…」

「良かつたらまた、ライブに来て下さい。連中も喜びますから」

「いいんですか？」

「勿論。それに、明は、滅多にリクエストを受けないんです」

「え、そうなんですか？」

「ええ、なのでほんとに、お断りしてるんです。たまたま、あなたの時だけは機嫌が良くて」

「知りませんでした。前も、お願いしたことがあったから」

「3年前ですよ？ 確か、婚約者の方といらしてた時」

何気なく、そう言った途端。

彼女の表情が、俄かに曇った。

その変化を読み取った時。

銘は自分が、彼女の中に潜む、何らかの記憶を呼び起こしてしまったことに気付いた。

「あ、すみません。多分、違う方だと…」

「…覚えてらしたんですか」

彼は、言葉に詰まった。

それから、仕方なく頷いた。

「リクエストにお応えしたのも、チップを戴いたのも俺ですから」

「そう。そうですね。覚えてらっしゃいますよね。あの人、いつも強引だから」

彼女は、財布をバッグにしまいながら、早口で答えた。

「わたしはいいって言うのに、確か、無理にお願いしたんですよね」

「いや、そんな。無理だなんて…」

「いつもそうなんです。自分で決めて、自分で行動して。わたしなんか、いなくても一緒…」

無理に笑顔を作りながら、彩はスツールから下りた。

「今、彼、パリにいます。もう、帰ってくることはないんじゃないかな」

「…彩さん？」

思わず、彼女の名を口にした。
それから慌てて、カウンターの外へ出る。

「すみません、俺、何か余計なことを…」

「いえ、郁崎さんのせいじゃありませんから」

「でも…」

「気にしないで下さい。ほんとに」

彼女は束の間微笑みつつも、すぐに身を翻した。
それから、ドアの向こうに早足で去っていく。
まるで、夢の中の黒い影のように。

その後姿を見送りながら。
彼は、深い溜息をついた。

「ああ、やっちゃった…」

そう呟きながら、カップを下げ。
勢いよく湯を使いながら、その縁に残された赤い口紅を落とす。

そう思いつつも。

何かが、引っ掛かっていた。
彼女が言いかけた何かが。
言わなかった何かが。

手を拭き、スツールに一人腰を下ろしてから。
彼はしばらく、そのことについて考えていた。
いつものように明が、店のドアを押し開ける時間まで。

第四話

「…何だか、らしくないなあ」

明に言われて。

彼は、思わず顔を上げる。

「え？」

「さっきから、溜息ばかりついて」

「そうかな」

「そうだよ。ここのとこ、何を言っても上の空じゃない」

チーズ・トーストを齧^{かじ}りながら、彼女はぼやいた。

「そんなことないよ」

「ふうん。そうは思えないけど」

指先についた粉を払いつつ、明も溜息をついた。

そんな仕草が、可愛らしくて。

彼はつい、微笑んでしまう。

「なあ、明」

「ん？」

「随分ゆっくりしてるけど、大丈夫なのか？」

「何が？」

「レコーディング。あるんだろう？」

「ああ。大丈夫。渋谷だから、ここからすぐ行ける。スタジオ入ったら長丁場だし」

「なら、いいけど」

空になった皿とカップを下げながら。
彼はまた無意識に、溜息をついた。

「ほら、また！」

明が、鋭く言う。

「もう、どうしたのさ？　ほんと、おかしいよ。ひょっとして、例の人と何かあったの？」

「まさか。彼女はただの客だよ。何かなんて…」

そう、言いかけて。

彼はふと、口をつぐんだ。

「あつたと言えば、あつたかもしれないけど…」

「…やっぱり！」

「いや、別にそういうんじゃないよ。俺、彼女を怒らせたみたいだったから」

「はぁ？ 何でまた？」

「それが、良く判らないんだけど…」

そう前置きしてから。

彼は明に、ことのいきさつを話した。

空になったグラスを押しやって、彼女は腕を組む。

「何それ。意味判んない」

「だろ？ だから俺も、どうしていいのか…」

「まあ、気にすることないんじゃない？ 気が向いたらまた来るよ。多分ね」

「だといけど」

「ねえ。お湯。もう、沸いてる」

明が、コンロを指差した。

見ると、ポットが白い蒸気を吹き出している。

彼は慌てて火を止めた。

「銘さん、やっぱおかしいよ。ひょっとして、懸想けそつしちゃってんじゃないの？」

「懸想？」

「例の人とき。近頃、修子さんとも上手くいつてないんだって？」

「アメリカ帰りの癖に、随分、雅^{みやび}な言葉を知ってるんだな」

彼は、笑顔を向けながら、ペーパーフィルターを取った。

「彼女のことはよく知らないし、修子と上手くいつてない訳じゃない。ただ単に……」

「連絡が取れないだけ？」

「まあ、そうだね。でも、もう長い付き合いだし、特に心配してないけど」

「へえ。そういうものかな」

慎重に湯を注ぎ、粉が充分に膨らむのを確認しながら。
銘は、先週来た電話のことを思い出していた。

着信は、2時過ぎだった。

枕元の子機を取り、耳に当てると。

送話口の向こうから、強烈な音の洪水が流れてきた。

「もしもし？」

「あ、銘さん？」

辛うじて、その声が聴き取れた。

「どうしたの？」

「ごめん。今、ちょっと訊かれて…」

「何の話？」

「銘さんが参加したレコーディングで、ダリル・ジョーダンが入ってた奴、何だっけ？」

「…スコット・トレバーのカルテットかい？」

「そう。確か、それだと思った」

「Live at Kenton House」

「何年？」

「確か、1995年だったかな」

「判った。ありがとう」

「でも、どうしてそんなこと…」

「わたしが銘さんと付き合ってるって言っても、誰も信用しないの。だから…」

「ああ、証拠つてこと」

「ごめんね、夜遅く」

「いいよ。ところで、修——」

「ごめんなさい。またかけるから」

そう言つと。

彼女はすぐに、電話を切つた。

さよならも、おやすみの言葉もなしで。

銘は、微かな苛立ちを堪えながら、子機を戻した。

彼女は、19歳。

ついこの前まで、都立高校の制服を着ていた。

念願の大学に合格し、ジャズ研に入部して。

講義やバイト、サークル活動をこなしながら、毎日慌しく過ごしている。

まだまだ、遊びたい盛りなのだ。

幾ら婚約者とはいえ、そんな彼女を、無闇に束縛したくはなかった。

再び静まり返つた部屋の中で。

彼は、しばらく考える。

修子と出会つたのが、3年前。

彼女と二人の姉は、航空機事故で両親を亡くし、親戚に引き取られた。

その養父に乱暴されそうになった彼女は、咄嗟に家を飛び出し、偶

然、この店に逃げ込んできた。

銘は彼女を匿い、店でバイトをさせながら、高校へ通わせた。

やがて彼女は、店に集うミュージシャン達のアイドル的存在になっていく。

その拳句。

新進気鋭のピアニスト、ほんだとしあき本多俊明と恋に落ちてしまう。

それでも。

純粹で世間知らずな修子から、彼は、目を離すことが出来なかったのだ。

結局。

本多は離婚したものの、修子を選びはしなかった。

それどころか。

大手レベルに移籍するために、単身、ヨーロッパへ渡ってしまう。

事情を知る者達の中に、一人残された修子を、彼は放っておくことなど出来なかった。

だから、彼女の全てを、引き受けることにしたのだ。

この年。

彼はもう、29になっていた。

修子との年齢差は、丁度10歳。

初めから無理があつたのかもしれないと、銘は思った。

自分は結局、本多から彼女を略奪したかっただけなのかもしれないと。

この日も結局、修子からの電話はなかった。
彼は、半ば、諦めていた。
こんなことは、珍しくないからだ。

閉店の、30分前。

彼はふと気が向いて、いつもより早い時間にウッド・ベースを手にした。

黒で統一されたステージに、一箇所だけ、スポットを当てる。
高いスツールを持ち出し、そこに腰を下ろした彼は、淡々とスケール練習を始めた。

弦の唸りに耳を傾け、自分のビートを確かめながら、音に意識を集中させる。

この時ばかりは、何もかも忘れることが出来た。
第一線を退いたことへの焦燥も、修子のことも。
自分を取り巻く様々な雑音から、解放されていくのが判る。
だから。

誰かが階段を降りてきたことにも、全く気付かなかったのだ。

第五話

「…こんばんは」

ドア越しに、呼びかけてくる声に。

彼は、はっとした。

慌てて、楽器を立てかける。

「まだ、いいですか」

「ええ。こちらこそすみません。気付かなくて…」

そう言つてドアを開けた時。

彼は思わず、息を呑んだ。

彩が、そこに立っていたからだ。

彼女は真つ直ぐに、銘を見据えてくる。

「この前は、すみませんでした…」

そう言つと彼女は、丁重に頭を下げた。

「わたし、ずっと気になっていて。どうしても、謝りたくて…」

「あ、いえ。気にしないで下さい。俺も迂闊なことを言つたみたいだし」

「そんな。郁崎さんのせいじゃ」

「いや、いいんです。ほんとに。正直な話、忘れてたぐらいですから」

そこで。

言葉は、ふっと途絶えた。

たちまち湧き上がる、緊張感。

しんとした空間で。

二人はしばらく、瞳を合わせていた。
そうしながら。

銘は彼女に、何もかも見透かされてしまいそうな気がしていた。

やがて。

彼の動揺を察したかのように、彩は言った。

「…珈琲、戴けますか？」

彼はようやく、我に返った。

「あ、はい」

頷きながら、カウンターへ戻る。

ふと気付いて、アンプのボリュームを上げると。

スピーカーからは、"Evans at the Montreux Jazz Festival" が流れ出す。

彼女はちよつと微笑んで、前と同じスツールに腰を下ろした。

今日の彩は、カジュアルな格好だった。

殴り書きのようなオレンジ色を散らした黒地のキャミソールに、色褪せたジーンズ地のスカート。リゾート調のサンダルを履き、ペディキュアは、同色のオレンジに銀。

その華奢な肩、胸元の白さから、彼は、どうしても目を逸らすことが出来ない。

「…練習、されてたんですか？」

「ええ、まあ。今日は暇だったもので」

「お邪魔しちゃったみたいで」

「まさか。まだ、営業中ですから」

「良かった」

彼女は、くすくす笑った。

それから、思い掛けないことを言う。

「今日はどうしても、お会いしたかったから」

その言葉を耳にして。

胸の奥が、ぴくりと音を立てた。

これまで誰にも感じたことのない疼き。

この時。

彼は、彩に会ったびに、心を掻き乱されている自分に気付いた。こんなことは、初めてだった。

いつもの手順で珈琲を淹れ、彼女に差し出す。
小さく会釈してから、彩はカップを手に取った。

「この前淹れて戴いたのが、凄く美味しかったから。癖になっちゃいました」

「それは良かった。実は、あんまり自信ないんですよ」

銘はほっとして、笑顔を返す。

彼女はそれを一口啜ると、店の中を見渡した。

「珍しいですね。こういうお店で、こんな時間に珈琲が飲めるなんて」

「本当は、午後6時までなんですよ」

「え？」

「でも、いいんです。どうせ他に、お客さんもいないから」

「すみません。いつも、甘えてばかりで」

そう言う彼女は、一枚の葉書を取り出した。

「そうでした。これを、届けに来たんです」

彼は、その葉書を受け取った。

光沢のある表面には、美しい萌黄色を基調としたランドスケープ。裏には、銀座の画廊の名前が印刷されている。

「久し振りに個展を開くので。是非、郁崎さんにも来て戴きたくて」

「え、いいんですか？」

「はい。いつでも、ご都合のいい時に」

「判りました。ありがとうございます」

それから。

10分ほど話をしたのちに、彼女は席を立った。

「じゃ、お支払いを…」

「あ、いいです」

「でも、この前もそうだったじゃないですか」

「誘って戴いたお礼ということで」

彼女はしばらく迷っていたが、根負けして、財布をバッグに収めた。

「いつも、すみません」

「いえ」

彼は、彩と共に、狭い階段を上がった。

深夜1時を過ぎ、大通りは、タクシーと酔客で溢れ返っている。

「じゃ、お待ちしています」

そう言つて立ち去ろうとする彼女の背後に。
彼は咄嗟に、声をかけていた。

「彩さん！」

彼女は、はっとしたように振り返る。

シャツターをロックして、銘は、彼女に走り寄る。
愛らしい瞳が、こちらを見上げている。

「送りますよ、ご自宅まで」

「え？」

「こんな時間だし。万が一何かあつたら…」

「あ、大丈夫です。タクシーで帰りますから」

「どちらなんですか？お住まいは」

「芝浦です。だから、ここからすぐですし」

「いや、すぐつて距離でもないでしょう。送らせて下さい」

彼女は悩んだ末に、ようやく首を縦に振った。

近くの駐車場まで、二人は、並んで歩いていく。
銘のランドクルーザーが、公道に出るまでの間。

彼女は黙って、歩道に佇んでいた。
再び起こる、奇妙な既視感。
しかし。

彼はそれを、敢えて黙殺した。

「どうぞ」

「すみません」

会釈しつつ、彼女は乗り込もうとする。

彼は特に意識せず、手を差し出した。

車高があるので、小柄な彩には乗り辛いと思ったのだ。
彩も素直に、その手を取った。

その時だった。

繋いだ手から、何かが伝わってきたのは。

感情の渦のような何かが、もの凄い勢いで、自分の中に流れ込んでくる。

刹那。

脳裏には、例の夢が蘇る。

あの、奇妙な渚の記憶が。

鮮血の感触が。

突然のことに。

彼は反射的に、手を振り解いてしまう。

彼女は、驚いたようだった。

「…何か？」

「あ、いえ。すみません」

必死に動揺を堪えつつ、もう一度手を差し伸べる。
小さく、柔らかい感触。
今度は何もなかった。

ややほつとしつつ、彼は、ギアをローに入れ。
それから、海岸通りを真っ直ぐに進んだ。

途中。

埠頭の近くで、彩は、車を止めさせた。

「ここから、すぐですから」

「こんなところで？」

彼は、驚いた。

その周囲にはとても、人家などあるようには見えなかった。

「大丈夫ですか？ もっと近くまで、行ってもいいんですよ？」

「はい。大丈夫です。ほんとに、ありがとうございました」

そう言つて、車を降りたあと。

彼女は、真っ暗な埠頭目掛けて歩いていく。
気にはなったが、彩が固辞している以上、無理強いする訳にもい
かない。

彼は一度、溜息をついてから、ハンドルを切る。
それからあらためて、煙草に火を点けた。

（さっきの、あの感触は、一体何だったのだろう）

軽い痺れのようなものは、まだ、彼の手に残されていた。

（彼女と俺との間には、何か、繋がりでもあるのだろうか）

どれだけ考えても、彼には判らなかった。

それが、一体何なのか。

しかし。

彼は、予感していた。

再び彩と会う時、彼女と自分との間に、何か避けられない事態が起
こることを。

否。

それは既に予感ではなく、間違いのない現実として、彼の前に立ち
はだかっている。

銘はそのことを、認めたくないだけなのだ。

煙草を消すと、あとには、薄暗い空白が残されているような気がし
た。

彼女の不在は、束の間、彼を惑わせた。

「考え過ぎだよな。また、明に怒られちまう」

彼は首を振り、窓を開け放した。

湿気をたつぷりと含んだ、都市の生暖かい空気が流れ込んでくる。
その風に身を任せながら。

銘は、何とかそれを振り払おうとした。

思いがけない運命に、知らず、巻き込まれていくような予感を。

第六話

一週間後。

銘は、新橋へ赴いた。

晴れ渡る空の下、銀座まで足を進める。

銀座柳通りに面した場所に、その小さな画廊はあった。

青銅製のアンティークな看板に目をやったのち、彼は、ドアを押す。

目についたのは、天井から吊るされた十数枚の長い布。

手染めなのか、全て、微妙に色が違っている。

手前は、鮮やかな萌黄色。

奥に進むにしたがつて、明度と彩度が落ちていく。

その壁の右側から奥に向かって、ずらりとシルクスクリーンが並ぶ。風景画や抽象画を含め、どれもこれも、見事な作品だった。

ゆつくりと足を運び、また止めながら、銘はその絵を眺めていった。荒々しい表現と、思いがけない迫力が、そこにはあった。

たおやかな彩の外見からは、およそ想像もつかない世界が。

時に艶かしく、時に淡々と、また、時に強い主張を繰り返して。

緑や黒、赤やオレンジ、黄や青を多用した、濃厚な原色と単純な描線。

一目見ただけで、その色彩や構図に、巧みな技法に、心を奪われてしまう。

彼は思わず、溜息をついた。

（これが、才能って奴なのか）

夢中になってそれを見ていると。
不意に、背後から声をかけられた。

「いらっしゃいませ」

驚いて振り返ると、ヘリンボーンのスーツを着こなした老人が、入り口の椅子に座っていた。

人品卑しからぬ風貌からすると、この画廊の店主のようだ。
彼は慌てて、その位置まで戻る。

「あ、すみません。勝手に入ってしまった」

「いえ、宜しいですよ。招待状はお持ちですか？」

「ええ」

銘は、シャツの胸ポケットから、例の葉書を出した。

店主と思しき男は、それを確認し、笑顔と共に彼に渡した。

「では、ごゆっくりご覧下さい」

「あの、彩さんは……」

「そろそろ来ます」

彼がそう言った時。

タイミングよく、入り口のドアが開いた。

大きな花束を手にした彩は、後ろ手にドアを閉めた。
彼女が纏っているのは、床まで届きそうな長いワンピース。

薄い絹地を彩る、黄色と緑のグラデーションが美しい。
垂らしたままの髪は、彼女の動きに合わせて、ふんわりと揺れている。

銘の姿を認めた彼女は、にっこりと微笑んだ。

「郁崎さん」

両手に抱えた大輪の薔薇を、彼女は店主に手渡した。
それからあらためて、銘に向き直る。

「来て下さったんですね」

「ええ。でも、ちょっと早過ぎましたね」

「開店直後ですから、逆に、ゆっくり見られますよ。どうぞ」

彩は、彼の背に右手を当てた。

それから、視線を合わせて微笑んでくる。

彼女に触れられ、澄んだ瞳に捉えられるたびに。

微かな心の揺らぎを、銘は感じていた。

大きなガラス窓から差し込む日差しは、多くの薄布に遮られ、適度な影を落としている。

作者の目の前で絵を鑑賞するのは、これが初めてだった。

銘はやはり、あの時と同じ緊張を覚えていた。

不意に。

店主が、声をかけてきた。

「あ。彩ちゃん」

「はい」

「わたし、ちょっと出掛けてきますから」

「はい、判りました」

「あと、宜しく。何かあったら、携帯呼んでくれれば」

「はあい。行つてらっしゃい」

ドアが閉まる音を、背後に聞きながら。

彼は何故か、鼓動が早まるのを感じていた。

彩の、微かな温もりが、すぐ傍にある。

手を伸ばせば、すぐに届きそうな位置に。

懸想してんじゃない？という明の言葉が、脳裏に浮かんでくる。
まさか。

冗談じゃないぞ。

彼は必死に、その考えを打ち消した。

今日を入れても、まだ5回しか会っていない女性に、恋をするなんて。

しかも。

相手は、人妻だというのに。

自分には、婚約者がいるというのに。

順路に従っていくうちに、彼女の描く緑は次第に濃くなっていく。

まるで、森の奥に歩みを進めているように。
彩は特に、何も言わなかった。

感想を求める訳でも、解説をするでもなく。
ただ、彼の傍に寄り添っている。

そのことがむしろ、更なる緊張を招いていた。

薄布を掻き分けながら、最後の作品に辿り着いた時。

銘は思わず、目を見張った。

等身大のガラスの上に描かれた、果てしない青の世界。

勢いある筆は自由自在に表面を駆け巡り、さらに、フリーハンドによる黒の描線が、その繊細なマチエールの上を、確固たる意思を持って横切っている。

透明な空間は、淡い水色から夕暮れのような紺まで、思いつく限りの青で埋め尽くされていた。

海のような、空のような世界が、そこに広がっている。

その鮮烈な色彩と、存在感に魅せられて。
彼はしばし、その前に立ち尽くしていた。

「…気に入って、戴きましたか？」

彩は、遠慮がちに訊いてくる。

「ええ。これは、何と言うか…圧倒されますね」

「あの、アクリル絵の具を使ってみたんです」

彼女は、その表面にそつと指先を触れた。

「郁崎さんにお会いしたあと、急に、こういうの描いてみたくなつて。何だか久し振りに、夢中になって。だから、お店に伺うのが遅くなつてしまつて」

「そうだったんですか」

「"melodia blue"です。これは、郁崎さんからインスピレーションを貰いました」

「俺から？」

「はい。あなたと、あなたの音楽から。この黒は、音なんです。郁崎さんの奏でる音」

「そんな… たつた、あれだけの音からこれが？」

「あれだけで、充分です。それに…」

彩はつと、彼の前に立った。

それから。

じつと、彼を見上げてくる。

天井からの空調が、吊り下げられた布を静かに揺らしている。

彼女の髪も、微かに靡いていた。

彼は言葉を失つて、その瞳を見詰め返す。

その時。

一切の音が、消えたような気がした。

彼女の言葉は、宙に浮かんだままだ。

鼓動は、嫌でも早まってくる。

彼は不意に、息苦しさを感じた。

それが、いつもの頻脈なのか、彼女のせいなのか、判らなかった。

彩は、ふつと視線を外した。

それから指先で、彼の胸に触れてくる。

まるで、何かを確かめているみたいに。

「…銘さん」

彼女は、目を伏せたまま、彼の名を呼んだ。

「まだ…判らないんですか？」

そう呟くと。

彩は、彼の胸にその身を預けた。

突然のことに驚いて、身を引こうとする彼の背を、彼女は強く抱き締める。

柔らかな髪が、腕に落ちかかる。

ワンピース越しに、彼女の体温が伝わってくる。

華奢な体の感触と、うっとりするような匂いの中で。

彼はその誘惑を撥ね退けられずにいた。

何故なら。

彼は、ようやく思い出したのだ。

昔。

自分を、ひたむきに追いかけてくる少女がいたことを。

第七話

銘が、12歳の誕生日を迎えた秋。

冷たいリノリウムの床の上に、彼は、横たわっていた。

胸を締め付けられるような苦しさと共に、意識が朦朧としていくのが判る。

一人で出歩いてはいけないと言われた理由を、この時銘は、ようやく悟った。

ナース・コールも出来ず、助けも呼べず。

眩い夕日が差し込む、人気のない廊下で息絶えていくのかと、彼は半ば諦め、半ば恐怖を感じていた。

次第に動きを遅めていく心音が、自分の耳にもはっきりと聞き取れた。

まだ、たった12年しか生きていないのにと、彼は思った。

あの制服に袖を通すことも、もうないのだろう。

母は、泣いてくれるだろうか。

父親は、ほっとするかもしれない。

僕が存在をあいっは、最初から認めたくなかったのだから。

絶望して目を閉じた彼の耳に、スリッパの足音が聞こえてきた。その早い歩みは、彼の足元で、ぴたりと止まった。

誰かが、覗きこんでいる気配。

「...どうしたの？」

やや、舌足らずな少女の声。

返事をしたかったが、彼は、呻くのが精一杯だった。

「具合、悪いの？」

「……」

「看護婦さん、呼んできてあげようか？」

銘は、何とか頷いた。

少女はすぐに、ぱたぱたと音を鳴らして、廊下を駆けていく。

助かった、と、彼は胸を撫で下ろしていた。

もし処置が間に合わなかったとしても、誰かが自分を見つけてくれるだろうと。

そうすれば、少なくとも、ここで一人で死ななくて済む。

そんなことを考えているうちに。

彼の意識は、遠のいていった。

数日後。

外科病棟の個室に、彼は寝かされていた。

胸の中央に、鋭い痛みがあった。

体には、複数のチューブが差し込まれている。

部屋は、ホテル並だった。

エアコンとクローゼット、バス・ルームとキッチンまでついている。多分。

父親が、金を出したのだろう。

ぼんやり目を開けると、目の前に、母の姿があった。
彼女は優しく、彼の頬を撫でている。

「大手術だったのよ。よく、頑張ってくれたわね」

「…検査入院って話じゃなかったの」

「調べてみたら、心臓の他にも、いろいろな病気があったのよ。でも、心配要らないわ」

その笑顔を眺めながら。
かれは不意に、思い出した。
あの、少女のことを。

「…お母さん」

「うん？」

「誰か、僕を助けてくれた？廊下で倒れてた時」

「ああ、そう。あなたの命の恩人がいるわよ。今日も来るかしらね」

その時。

ドアを、ノックする音。

「ほら、噂をすれば」

母は、悪戯っぽく笑って、ドアを開けに行く。
起き上がる気力はなかったが、彼は何とか、その方向に目を向けよ

うとした。

「こんにちはあ」

舌足らずの、甘い声。

あの子に間違いない。

ベッドまで来ると、彼女は伸び上がって、彼の額に触れた。

思いがけず、それは、可憐な少女だった。

白いブラウスに、真っ赤なスカート。

やや薄い色の髪は、肩までの長さがあった。

「あーちゃんが見つ付けてくれなかったら、あなた、今頃お墓の中ね」

「そうだと思うよ」

彼は、頷いた。

「あの時はさすがに、覚悟したもの。ありがとう」

彼女を見詰めて、彼は何とか微笑んだ。

少女もまた、微笑みを返す。

その日以降も、彼女は毎日のように、彼の病室を訪れた。

午前中の回診が終わると、二つ向こうの小児科病棟から、少女は駆けってくる。

スケッチブックとクレヨンを片手に。

銘にとって、彼女と会うことは、退屈な入院生活の中で唯一の楽し

みだった。

少女は、恐ろしく絵が上手かった。

子供とは思えない感性があると、彼の母も褒めていたぐらいだ。特に、色彩のバランスが抜群に良かった。

彼女の手にかかる、一枚の紙が、たちまち息を吹き返す。

カレンダーの裏も、チラシの余白でさえも。

彼自身も多少、絵を習ったことはあったのだが、とても少女のように描けなかった。

「あーちゃん、絵描きさんになればいいのに」

感服しながら、彼は思わずそう言った。

「絵じゃ食べられないって、お父さんが言ってた」

「そうかもしれないけど、でも、勿体ないよ。こんなに上手いのに」

「そうかなあ」

「そうだよ。だから、絶対に続けなよ。退院してからも」

彼が熱心にそう言う。

彼女は、はにかみながら頷いた。

3ヵ月後。

銘は、彼女より先に退院した。

少女は、お別れに、一枚の絵をくれた。
明るいオレンジで彩られた、海の絵だった。

「オレンジの海なんて、あーちゃんらしいな」

彼がそう言つと、彼女はまた、照れたように笑つた。
看護婦や医師、少女に見送られながら、母親とタクシーに乗り込んだ時。

彼は、彼女の名前すら知らなかったことに気付いた。

「あの子、ほんとは何て名前なの？」

「言われてみれば、お母さんも知らなかったわ。皆、あーちゃんと呼んでたから」

「しまった、訊いておくんだつたよ」

「まあ、でも何れ会つこともあるんじゃない？」

「そうかな」

「そうよ。あの子きつと、有名な画家になれるわよ」

母は、そう言つて笑つたのだが。

彼の胸には、微かな後悔が残つた。

復学してのち。

毎日の忙しさにかまけて、彼は、そのことをすっかり忘れていた。
16年後の今、この場所で、この絵を見るまでは。
彼女を、この腕に抱き締めるまでは。

「…思い出したよ」

彼の言葉から、敬語が消えていた。
記憶が、現実と繋がった証拠だった。

「どうして、最初から言ってくれなかったの？」

「……」

「そうしたら、もっと早く……」

その言葉を遮るように、彼女は口を開いた。

「銘さんは、もう、手の届かない人だと思って…」

「え？」

「わたしのことなんか、もう、忘れてたでしょう？」

「いや、そんな…」

「じゃあどうして、もっと早く気付いてくれなかったの？」

彼は、観念して頷いた。

「ごめん。彩さんの言う通りだよ。もっと早く気付くべきだった」

「ねえ、責めてる訳じゃないの。今はもう、思い出してくれたんでしょ？」

「そう、完璧にね。君は、俺の命の恩人だもの」

彼はあらためて、その背に腕を回した。

やや力を込めて抱き締めると、彼女は微かな溜息を漏らした。

苦しさは薄れたが、彼の鼓動はまだ、早まったままだ。

「…いつから、知ってたの？俺のこと」

「あの店には、昔からよく行ってたの。あの人、ジャズが好きだから。その時、スケジュールボードに銘さんの名前を見つけて。凄く、びっくりした」

彼の胸に顔を埋めたまま、彩は話を続けた。

「変わった名前だから、ずっと覚えてた。それから雑誌なんかで、あなたのこと調べて。あの銘さんが、現役のプロ・ミュージシャンだなんて。何だか、信じられなかった」

「今はもう、プロじゃないけどね」

彼は、溜息をついた。

「病気が再発して、諦めざるを得なくなっただ。ツアーなんでもっての他だって。親父に怒られたよ。俺が医者にならなかったってことだけでも、かなり怒ってたから」

「…そうなの？」

「うん。でも、ああいう仕事は嫌いじゃないし、どんな形でも、音楽は楽しめるからね。一線は退いたけど、後悔はしてない。やろうと思えばいつでもやれるって自負があるから」

彩は、俯いたまま、その言葉を聞いていた。
彼の心音に、耳を傾けながら。

「銘さん。…また、お店に行ってもいい？」

「勿論。いつでもどうぞ」

「良かった。迷惑だったらどうしようかと」

「まさか。俺も、期間中は毎日ここへ来るよ」

「ほんとに？」

「絵を見るのは好きだし、昼までどうせ暇だし。迷惑かな？」

「まさか。すっごい嬉しい」

彼女は微笑むと、彼から自然に体を離れた。

背中に回されていた腕は、ゆっくりと下りてきて、彼の両手をそつと握る。

ひんやりした指先を通して、彼女の温もりが伝わってくる。

「わたし、ほんとに、青って苦手な色だったの。だから、あんまり使ったことなく。でも、銘さんのイメージはずっと、青だったか

ら。それでやっと、あれが描けたの」

「オレンジの海も、嫌いじゃないけどね」

「やだ。覚えてたの？」

「思い出したって言っただろう。まだ取ってあるよ」

「あれを？嘘でしょう？」

「将来。価値が上がるかなと思って。正解だったみたいだね」

「信じられない。でも、銘さんらしいな」

その時。

入り口のドアが開く音がした。

二人は慌てて、手を離す。

向こうから、男の声がした。

「彩さん、瀬川です。やっと来れましたよ」

「はあい、いらっしやいませ」

彩は、薄布を掻き分けて、受付へ戻る。

彼の手には、彼女の温もりが、まだ残されていた。

「いやあ。ご無沙汰でした。久々の個展ですよね」

「ええ、お陰さまで」

「単独では初めてじゃないですか？」

「いえ、毎年やってますよ」

「それは失礼。で、旦那さんは？」

「まだ、パリです。今年は帰る気ないみたい」

「へえ。それじゃ、お寂しいでしょう」

「いつものことです。もう、いい加減慣れてますし。それに……」

相手は、恰幅のいい中年男性。

着ているスーツからして、如何にも金持ちといった感じだ。彩にしてみれば、いい顧客なのだろう。

銘は、二人の邪魔をしないように、会釈して店を出ようとした。どうせまた、明日も会えるからと。

しかし。

彼の背に向かって。

彩は、はっきりとこう言った。

顧客である男に向かって、話している振りをして。

「…今は、恋してますから」

彼は、耳を疑った。

思わず、振り返る。

彩と、すぐに目が合った。

彼女は真っ直ぐに、彼を見詰めてくる。

刹那。

胸を貫く、痛みを感じた。

ほんの一瞬だったが。

秘めた思いを、見抜かれたような気がした。

不意に。

男の声が蘇る。

「…またまた、彩さんは。すぐそいうことを仰る」

「いえ、ほんとですから」

彼女は再び目を伏せて、名簿を確かめている。

男はしたり顔で、こう付け加えた。

「まあ、芸術家はそうじゃなきゃいけないですね。レンブラント然り、ダリ然り…」

そんな会話を背中であきながら、店を出たあとも。

彼は、激しく動揺していた。

自惚れたくはなかったが。

その言葉は確かに、自分に向けて発せられていたように思えた。

押し殺しかけていた思いが、再び湧き上がってくる。

彼女のことを思い出したことで、ひよっとしたら、

仲のいい友人になれるのではないかと。

そんな期待があった。

出来るなら。

彼は、そうしたかった。

しかし。

その一言で、生身の彩と触れ合うことで。

嫌でも、彼女への思いを確信させられた。

その体の感触も、温もりも、まだ生々しく残っていた。

触れた指先も、コロンの匂いも、彼の脳裏から離れてはいかなかった。

この日。

彩に惹かれている自分を、彼はようやく認めることが出来た。

そして。

彼女もまた、彼を愛し始めていたのだ。

第八話

土曜の夜。

ソナーから叩き出される強烈なビートが、空間を埋め尽くす。
アラン・ローゼンバーグのドラム・ソロだった。

銘は、思わず顔を上げ、ステージを眺めた。

グランド・ピアノの前に座る本多が、悠然と煙草に火を点ける姿が見えた。

立ち上る青い紫煙は、ゆるやかな弧を描きながら、スポットライトを掠めていく。

銘はすぐに、ステージから目を逸らした。
それから、洗いかけのグラスを手にする。

「…悪いな、銘」

不意に。

馨が、耳元に囁いてきた。

人の良い丸顔には、戸惑いの色がある。

「何のことです?」

「あいつ、俺の甥っ子だから。どうしても断れなくてさ」

「いえ、構いませんよ。俺も、本多さんの演奏、久々に聴きたかったから」

困惑気味の譬に向かい、微笑んでのち。
彼は手を拭き、それから再び、ステージに向かって腕組みをする。
凄まじい緊張感に、観客は釘付けだ。

フランスへ渡ってからの本多のピアノは、別人のようなスタイルになっていた。
日本人離れたタイム感覚、ペトルチャーニにも似た硬質なタッチ。
高度なテクニクと歌うようなフレーズには、一層磨きがかかったようだった。

その非の打ち所のない演奏を前にして。
複雑な気持ちを押し殺すように、彼は煙草に火を点けた。
以前。

彼のバンドのベーシストを務めていた自分が、今は、ステージ下からそれを眺めている。
落ちぶれたとは思わないが、何だかもどかしい。

それに。

あのピアニストに会いたくない理由は、もう一つあった。
とても40近いとは思えない、本多の端正な容姿を目にするたびに。
かつて。

自分の恋人がその腕に抱かれていたことを、どうしても想像してしまふ。

あの鍛え抜かれた体の下で、彼女は、切ない声を上げていたのだろうか。

物憂げなキスを、何度も繰り返していたのだろうか。

自分に抱かれている時と、同じように…

「――銘さん！」

叫ばれて、はっとする。

視線をカウンターに戻すと、明に睨まれた。

「さっきから呼んでるのに。もう、何考えてんの？」

「あ、すまない。つい聴き惚れて」

「まあ、気持ちは判るけど。…ビール頂戴」

「了解。でも、飲み過ぎじゃないのか？」

「ふふん。今日は、珍しく気分がいいんだよ」

新しいピルスナーを取り、サーバーからビールを注ぎつつ。

彼は、明の美しい横顔を盗み見ていた。

プライドの高いミュージシャンが多い中、彼女はまず、他人の演奏に嫉妬しない。

自分に、揺るぎのない自信があるからだろう。

優れたミュージシャンの演奏を、きちんと聴く耳と余裕を持っている。

そんな明の態度が、彼は羨ましかった。

音楽は、実力の世界だ。

口癖のように、明は言う。

音楽をやる場合、年齢や性別は大した問題ではない。

何処にいたか、誰に学んだかではない。

今、何をしているかが重要なのだと。

そんな話をする明は、いつも以上に大人びて見えた。
そのたびに、銘は感心させられる。

如何に年下とはいえ。

彼女の言葉から学ぶ機会は、多々あったのだ。

最高潮に盛り上がったまま、G i gは終了。

アンコールは、3曲に渡った。

額の汗を拭いつつ、本多は、カウンターに近付いてくる。

「銘！」

「お久し振ります」

二人はしっかりと、握手を交わした。

「お久し振りって程でもないだろう。相変わらず、いい男だな」

「いえ。本多さんこそ」

「何、叔父貴から訊いたけど、お前、音楽の仕事、殆ど取ってないんだって？」

「ええ」

「嘘だろう？勿体ない。ここだって、無理矢理手伝わされてんじや

ないのか？」

「いえ、馨さんは何も。俺が無理言って、任せて貰ってるんです」

「銘。冗談だろう。お前ほどの奴が、こんなちっぽけなハコのマスターで一生終わる気か？」

「いいんです。俺、元々、客商売好きですし。ベースにも触れるし。性に合ってますから」

「ふうん。そういうもんかな。何だか俺は、腑に落ちないね」

そう言つて本多は、縁のない眼鏡を外した。
服の裾でレンズを拭きながら、何気なくこう言ってくる。

「…修子ちゃん、どうしてる？」

銘は思わず、彼を凝視した。

本多は俯いたまま、視線を合わせようとはしない。
束の間、沈黙が続いた。

「…元気ですよ。今、大学に通ってます」

「そうか」

本多は再び、眼鏡をかけた。

それから、銘と視線を合わせる。

「そうだ。婚約したんだってな。おめでとつ」

「ありがとうございます」

「お前の方が、彼女には合ってる。俺なんかよりずっと……」

銘は、返事をしなかった。

それが、本心からの言葉でないことに、気付いていたからだ。

察したのか、本多はすぐに、話題を変えた。

「彼女、まだ、ピアノは弾いてるのか？」

「ええ。ジャズ研に入っただみたくで」

「良かった。止めないでいてくれたか」

「止められる訳ないでしょう。彼女は、今でも……あなたのことを」

思わず。

そんな言葉が、口をついて出た。

しかし。

目の前にいるピアニストの顔には、何の感情も現れてはいない。

彼の表面には、傷一つ付いていない。

小さな湖面のように、穏やかだった。

その態度に。

銘は、微かな苛立ちを感じていた。

そのポーカー・フェイスが、いつになく癪に障ったのだ。

再び訪れた沈黙の中で。

彼は、本多から目を離せなかった。

「…終わったことだよ、もう」

そう言うと、彼は微笑んだ。

「それにさ。俺があの子を選べなかったのは…お前のせいなんだぞ」

「…どういう意味です？」

「知らなかったとも思ってるのか？」

「何のことです？」

「ああ、銘。お前は本当に素直じゃない。全然、変わってないよ」

本多は、はぐらかすように笑うと、さっと身を翻した。

これ以上話したくないという時、彼がよく取るポーズだった。

「ちょっと、待って下さいよ」

さすがに気色ばみ、そのあとを追おうとした銘の腕を、馨が掴んだ。

「馨さん」

「すまん、銘。俺に免じて、我慢してやってくれ」

「でも」

「ほんと、すまん。俺が悪かった。やっぱり、お前と会わすんじや

なかつたよ」

結局。

銘は、馨に言われて、打ち上げが済むまで店を離れることにした。とは言え、何処に行く当てもなかった。

ふと。

彼は思い付いて、銀座へ車を向ける。

深夜0時に、彩がそこにいるとは思えなかったが、他に行く場所がなかったからだ。

あれから毎日。

彼は、彩の元を訪れていた。

ポットに作った珈琲を差し入れしながら。

午前中、まだ顧客が集まらないうちに、いろいろな話をした。絵のこと、音楽のこと。

互いの家族や、これまでの経歴を。

しかし。

一つだけ、触れないことがあった。

彩は絶対に、自分の連れ合いの話をしなかった。銘もまた、修子の話を持ち出すことはなかった。それはある種、暗黙の了解のような感じだった。

そんな触れ合いの中に。

自分を見詰める、彼女の瞳の中に。

銘はいつしか、安らぎを見出していた。

そして、薄々察していた。

彩の方も、同じ気持ちでいることを。

それなのに。

彼にはまだ躊躇いがあった。

日本を代表する洋画家、まきむらえい 槇村英の妻である彩と、安易に関係を持つ
ことに対して。

それと。

心こそ離れかけているけれど、いまだ彼の恋人である、修子を裏切
ることに對して。

あれ以来。

彩とは、抱擁を交わすどころか、手すら握らない付き合いを続けて
いる。

手を伸ばせば、すぐに触れ合える距離にいて。

内なる炎は、身を焼き尽くさんばかりだった。

焦燥はすぐにでも、彼女を抱き寄せようとする。

こんなことは、生まれて初めてだった。

そんな衝動を抑えながら、足を運んでいた彼の目に、例の画廊が見
えてきた。

何故か。

煌々と、明かりが点いている。

彼は、目を疑った。

(…嘘だろう?)

あそこに、彩がいる。

そう思った途端。

思いは、堰を切ったように溢れていく。

気付くと、彼は走り出していた。

雨上がりの歩道の暗い水を跳ね上げて。

何もかも忘れていた。

音楽のこと、自分の病のこと。

本多や、修子のことさえも。

彼にはもう、彩のことしか、考えられなかった。

彼女のことしか、頭になかった。

許されるものなら。

今すぐにでも、思いを伝えたいと思った。

あの可憐な人を、この腕に抱き締めて。

彼女の鼓動を、この胸に感じながら。

第九話

明かりのついた画廊の前で、彼は一度立ち止まった。さすがに、息が切れた。

乱れた心音は、耳元で大きく鳴っている。

ドアノブに手をかけてみるが、嚴重に施錠されているらしく、びくともしない。

何か、作業でもしているのだろうか。

彼は諦めず、肩で息をしながら、ドアをノックしてみた。応答はない。

「彩さん？」

彼は、呼びかけてみる。

その言葉に。

一縷の望みを託しながら。

暗がりの中、彼は目を閉じた。

それから、ゆっくりと深呼吸する。

しつとりと重い夜の空気が、肺に満ちてくる。

その静けさの中で。

彼はやや、冷静さを取り戻しつつあった。

（一体、俺はどうしてしまったんだろう）

自分の取っている行動に、半ば呆れつつ。彼は、そこを立ち去らなくてはと思った。

彩に会う前に。

歯止めが、利かなくなる前に。

その時。

ドアの鍵が、外される音がした。
次いで。

優しく、誰何する声。

「…どなたですか？」

「彩さん。…俺」

「まさか。銘さんなの？」

彼女は驚いて、ドアを開け放す。

それから彼の手を引き、椅子に座らせる。

動悸はかなり治まっていたものの、息はまだ荒かった。

「ごめん。こんな時間に」

「それはいいけど…何かあったの？」

心配そうに言いながら、彼女は、ドアの鍵をかけた。

その、乾いた金属音を聞きながら。

彼はもう、引き返せないと思った。

「急に、顔が見たくなって。明かりがついてたから、我慢出来なくて。つい走ったんだ」

「走ったの？嘘でしょう？」

「…彩さんに、会いたくて。自分でも、どうしようもなかった」

彼女ははつとして、口をつぐんだ。
その緊張が、銘にも伝わってくる。

「…ごめん」

彼はようやく、椅子から立ち上がった。
何とか、平静を装って。

「何言ってるんだろっ、俺…」

彩は、答えなかった。

美しい横顔を見せながら、戸惑ったように、視線を外してしまう。

たちまち。

激しい後悔が、彼を襲い始める。

自分は何か、勘違いをしていたのではないかと。

知らず、大きな過ちを犯してしまったのではないかと。

しかし。

息詰まるような沈黙を破ったのは、彩の方だった。

「…丁度、レイアウトを変更してて」

彼女は、店の奥を指差した。

「気付いたら、こんな時間になってて。わたし、夢中になると、止められなくて」

「…邪魔しちゃったかな」

「ううん。まさか。丁度、帰ろうと思ってたから」

「送るよ。ところで、食事は？もう済ませた？」

「ただけど…」

「俺も、まだなんだ。だから…何処か、寄っていいんか？」

「いいの？」

「勿論」

「でも、疲れてない？具合はどう？」

「もう、大丈夫。かなり落ち着いたら。それに、夜、彩さんと歩けるなんて滅多にないし」

彼女の表情に、ようやく笑顔が戻ってきた。

「ありがと。嬉しい、ほんとに。いつも、一人でご飯食べてたから
そう言っと。」

彼女はすぐに、片付けを始めた。

銘も、床に敷かれた布を巻く作業を手伝う。

「毎回変えるのは、大変じゃない？」

「多分、思ってるほどじゃないかな。服を着替えるのと一緒だから」

「へえ、そんな感覚なんだ」

「毎日、服を着替えるの、そんなに苦にならないでしょう？」

くすくす笑いながら、彼女は言う。

そう言う彼女の服装は、薄いグリーン地に、小花を散らしたタンクトップ。

同色のサンダルと、長いジーンズ生地巻きスカート。

長い髪は、アンティーク調のダッカルでルーズに纏めてある。

屈んだ拍子に覗く、その細い首筋に。

彼は何度も、どきつとさせられる。

ある程度、作業を終えたあと。

彼女は嚴重に鍵をかけ、シャッターを下ろした。

銘は、表通りの喧騒を避け、裏通りを選んで歩く。

彼女の歩調に合わせながら。

途中。

いつの間にか彩は、彼の袖にそっと掴まっている。

その慎ましやかさが、やけに愛おしくて。

意識的に、遠回りをしてしまったほどだ。

車に彩を乗せ、運転席に乗り込んでから。

彼は、六本木に車を向けた。

交差点近くの駐車場に車を止め、一軒のイタリア料理店へ。

「ライブのあと、よくここへ来たんだ」

そう言うと、彼は、古びた煉瓦作りの階段まで、彼女を案内した。
一歩先に彼女を行かせ、その背にそつと手を添える。

そんな気の利いたエスコートが、自分に出来るとは思っていなかった。

店は混んでいたので、二人はカウンターに並んで座った。

「六本木なんて、滅多に来ることないから。何もかも珍しいと思っちゃう」

彩は、煉瓦の壁に残る落書きに触れながら言った。

「これ、面白そう。わたしならもうちょっと削って、赤い瓶を埋め込んじゃうな」

「どうしてまた、赤い瓶なの？」

「これが赤だから。補色で緑を使うっていう手もあるけど。どっちがいいかなあ」

そう言つて彼女は、カウンターに敷かれた赤いチェックのクロスを指差した。

「なるほど。いつも、そんな風に観察してるんだね」

「ごめんね。半分、職業病みたいなものだから。気にしないで」

とは言つものの。

絵の話をする時の彼女は、いつも以上に魅力的だった。

ピザをつまみ、カルボナーラを半分ずつ分けながら、彼女のお喋りに耳を傾ける。

彼女は、ここのサラダに使われているホワイト・アスパラが、いたく気に入ったようだ。

「こんなの、初めて！すっごい美味しい。どちらかって言えば、苦手だったんだけど」

「でしょ？俺も、ここのは大丈夫なんだ」

「きりつと冷やしてあるからかな。それとも、ドレッシングの相性？」

彼女はしばらく、真剣に悩んでいるようだった。そんな姿は、彼を温かな気持ちにさせてくれた。

その時。

さっきまでの衝動が、嘘のように収まっていることに、彼は気付いていた。

”伊豆の踊り子”の薫ではないが、それを彷彿とさせるほど、彩は無邪気だった。

世間の汚泥から隔離されたような、純粹さやひたむきさがあつた。

その明るさは、鮮やかな色彩は、彼の目を時折眩ませた。

海底から水面を見上げた時の、明るく差し込むような光を、彼女は感じさせてくれる。

その幸せに。

彼は、溺れてしまいそうだった。

第十話

食事を済ませたあと。

その周辺を、二人で歩いてみる。

不夜城のような六本木ヒルズ。

オープン・エアのチャイニーズ・レストラン。

子供の頃から彼は、夜の雑踏が好きだった。

銘にとってこの街は、故郷そのものであるからだ。

彼の母は、神楽坂の芸者だった。

生物学的な父親は、京都で幾つかの病院を経営しており。

東京での学会がある時だけ、彼等に会いに来る。

後日正式に認知されたとはいえ、彼はあくまで妾腹だった。

それでも父親は二人に目をかけて、何不自由のない生活をさせてきた。

正妻には、男児が一人も授からなかったからだ。

しかし。

親に言われるまま東京大学に進学した彼は、敷かれたレールの上を歩くことを敢えて拒否することになる。

それが、傲慢な父と、その言いなりになっている母に対する、唯一の抵抗だった。

その後。

銘は、たった半年在籍しただけで大学を中退し、単身アメリカへ渡

った。

中学の頃から始めたギターをベースに持ち替えてから、四年が経っていた。

バイトをしながらマンハッタンの音楽学校に通い、在学中にプロとしてデビューした。

彼が21歳の時だ。

仕事は、滅茶苦茶面白かった。

学校とスタジオ、ライブハウスを行き来しているうちに、どんどん声がかかるようになり。

マネージャーを雇い、様々なアーティストに同行し、アメリカやヨーロッパへ渡った。

CDのクレジットに、自分の名前が刻み込まれていく。

ダウントアウンのボロ・アパートから、高層マンションへ引っ越した。朝から晩まで、好きな音楽に没頭し、それで飯が食えた。

まるで、夢のような生活だった。

けれど。

その夢は、長くは続かなかった。

本多からの熱烈なラブ・コールに応え、一時帰国していた彼は、ツアーの途中で突然意識を失った。

病名は、心房中隔欠損症。

東京女子医大の救命救急センターに運ばれた時、既に呼吸は止まっていた。

大量の血液が、肺の中に溢れていたからだ。

再手術の末、命は取り留めたものの。

ミュージシャンである彼には、致命的な結果となった。

業界は、シビアだった。

演奏者は、体が資本なのだ。

いつ倒れるか判らない人間を、使うクライアントなどいない。
だから。

プロとして活動することを、銘は断念せざるを得なかった。
彼が、24歳の時だ。

「…どうしたの？」

彩が、心配そうに訊ねる。

彼はようやく、過去の記憶から解放された。

「いや、何でもないよ」

「口癖みたい」

「え？」

「昔から、そう言ってたよ」

「そうかな。特に意識したことないけど」

銘は、そう言つて微笑んだ。

首を傾げながら、彼女は、彼を見上げてくる。

そこは、六本木通りから一本裏に入った、閑静な住宅地。
真っ直ぐな道路沿いに並ぶ、街灯が美しかった。

その、薄黄の明かりの向こうには、雨雲を通して星が見えていた。
六本木の喧騒とは程遠い、ひんやりとした静けさが、二人を包んでいる。

「ほら、銘さん。あそこ」

彩が、空を指差した。

薄暗い雲は、街のネオンを映して、くすんだ赤色を湛えている。

「綺麗ね。ああいう色出すの、すごーい難しいの。アンバーみたいな、チャコールみたいな…」

銘は思わず、くすくす笑い出す。
彼女ははっとして、彼を見た。
それから、ばつの悪そうな顔をする。

「何を見ても、そういう風に思っちゃうんだね」

「あ…ごめんなさい。つい…」

「いや、謝らないで。俺、彩さんの、そういうところが好きだよ」

そう言ってから。

彼は、自分が発した言葉の意味に気付いた。

たちまち湧き上がる緊張の中で。
彼は、彩を見詰めていた。

彼女もまた、信じられないという顔をして、彼を見詰めている。

再び彼は、息苦しさを感じた。

鼓動が早まっているせいだ。

理性は、彼女から目を逸らせと言っている。

さもないと。

お前は、とんでもないことをしでかすぞ、と。

内なる声に、頷きながらも。

彼は、自分の心の枷が外される音をはっきりと聞いていた。
その音は、極彩色の飛沫となって、彼の足元へ散っていく。

しんとした、住宅街の坂道で。

躊躇いも惑いも、まだ彼のうちにあった。
しかし。

もう、抑えは利かなかった。

彼は咄嗟に、彩を抱き寄せた。

彼女は驚いて、身を引こうとする。

その腕を、彼は掴んだ。

彩の身に漲る緊張が、恐怖が、我がことのように感じられた。

「…やめて」

彼女は、小声で呟いた。

息を乱しながら。

その目を捉えて、彼は囁く。

「…怖がらないで」

彼もまた、必死だった。

この手を離せば、彩はまた、自分とは無縁の存在に戻ってしまう。
彼女との絆は、再び、永久に閉ざされてしまう。
そんな気がした。

「怖がらないで、彩さん。俺は…」

思わず、声が掠れた。

乱れた呼吸を整えながら、彼は、どうにか気持ちを落ち着けようとした。

しかし。

言葉を発するより先に、体が動いていた。

銘は咄嗟に彩を抱き締め、その可憐な唇を求めた。

彼女は初め、拒むように首を振ったが、彼は離そうとはしなかった。
小柄な彼女を、包み込むように抱き締める。

それから、あらためて繰り返す。

そっと触れ合わせるだけの、優しいキスを。

柔らかな唇を、何度も求め続けているうちに。

彩の体から、次第に力が抜けていくのが判った。

華奢な背中を抱き、頬を撫でながら、愛しさばかりが溢れていく。

これまで誰にも感じたことのない感情に、彼は満たされていた。

彩がぎこちなく口付けに応え始めると、その気持ちは、さらに高まっていく。

彼女の髪は、街灯の光を浴びて、金色に輝いている。

その後れ毛の一本一本まで、愛おしくて仕方がなかった。

互いの息遣いと、唇が触れ合う音。
時折漏れる、彩の溜息。

銘には、それ以外何も聞こえなくなっていた。

未来への不安も、将来への恐れも全て忘れて、二人は、ただひたすらに唇を重ねた。

長年の不在を、埋めるかのように。

これまでの寂しさを、拭い去るように。

第十一話

駐車場に戻るまで。

彩は、一言も口をきかなかった。

それでも。

自分の腕をそつと掴んでいる指先の温もりを、彼は感じていた。

車を出し、芝浦へ向けて走らせる途中。

彼は、ふと不安になった。

自分はひよつとして、無理強いしてしまったのではないかと。
あんなことは、彼女の本意ではなかったのではないかと。

信号が、赤に変わった時。

彼は、緩やかにブレーキをかけた。

エンジン音が、やや低くなる。

そんな、沈黙の中。

銘は、意を決して口を開いた。

「…彩さん」

彼女は、ほんの少しだけ、顔を向けた。

「…ごめん。迷惑だったよね。あんなことして」

さすがに、彩の表情を窺うことは出来なかった。

彼は、前方を見詰めたまま、言葉を繋いだ。

「…銘さんには」

彼女の声は、微かに震えていた。

「あなたには多分…わたしを受け止められないと思う…」

「どうして？」

「わたし、銘さんが思ってるような人間じゃないの。もっとずっと、暗くて深い…」

彼女は、窓の外に顔を向けている。

彼の場所からは、その表情を窺い知ることは出来ない。

「あなたは、きっと後悔する。わたしなんかと関わったこと。だから…」

「ねえ、彩さん」

「…何」

「それは、俺が決めることでしょう」

「……」

「後悔するかどうかなんて、まだ判らないよ。確かに、俺は彩さんのこと、何も知らないけど」

「……」

「…知らないけど、今、どうしようもなく惹かれてる。その気持ちに、偽りはないよ」

彼女は黙って、外を見たままだ。

信号が青に変わったのに気付いた彼は、殊更ゆっくりと車を出す。

海岸通りをしばらく走っていくと、彼女は、ここでいいと言う。
前回、彼女を降ろした場所だ。

ハザードを点け、ギアをニュートラルに入れる。
しかし。

彩は、彼を見ようとしめない。

エンジンのアイドリング音だけが、低く響いている。

「…どうしたの？」

彼は、意を決して声を掛けてみた。

ドアに手をかけながら、彼女はまだ、迷っているようだった。

「…銘さん」

「うん」

「…どうして、わたしなんか」

「判らないよ。俺は、理屈で人を好きになったりしない。ただ…」

彼は、思わず溜息をつく。

余計なことを言わないように、心を配りながら。

「彩さんが、好きだよ。…こんなこと、初めてなんだ」

彼女は初めて、顔を上げて彼を見た。

潤んだ瞳は、真っ直ぐに自分を見詰めてくる。

不意に。

胸が鋭く疼いた。

街灯の明かりの下、薄らと浮かび上がる細い肩、美しい首筋。ほつれた細い髪が、その胸元に落ちかかっている。

華奢な手首と、指輪のない細い指先。

目の前にいる可憐な女性から、彼はどうしても目を離すことが出来ない。

微かに開かれた唇の感触を、彼は、無意識に思い出していた。

彼女を抱き締めて、自分のものにしたい。

そんな衝動に、彼は駆られた。

しかし。

そんなことが、出来る筈はない。

これ以上、彼女を怯えさせることだけは、避けなければいけない。

そう、自分に言い聞かせつつ。

彼は必死に、自分の欲望を押し殺していたのだ。

やがて。

銘の中の葛藤を見透かしたかのように。

彼女は、冷ややかに言う。

「ありがとう、銘さん」

「いえ、こちらこそ。付き合わせてしまつて」

「また、明日」

「じゃあ、また明日」

他人行儀なやり取りのあと。

彩は黙つて、車から降りた。

振り返りもせず。

名残惜しさすら、見せることはなかった。

その、遠ざかる小さな背中を見送つたあと。

車を駐車場に入れ、店まで歩いて戻る途中。

まだ微かに残る水溜りを踏み締めながら、彼は、溜息をついた。

どうして、あんなことをしてしまったのかが、判らなかった。

最初、彼女は嫌がるような素振りまでしていたというのに。

その抵抗を押さえつけ、無理強いするような真似をして。

彼女の唇の感触は、まだ生々しく残っていた。

しかし。

彩はあれ以来、彼を牽制するような言葉ばかりを口にするようになった。

それを、思い出すたびに。

彼は、気が塞いでくるのだった。

重たい足を引きずりながら、店のシャッターを開ける。
中から、ピアノの音が聴こえてくる。
まだ誰か、残っているのだろうか。
訝しみつつ階段を降り、ドアを開けた。
たちまち。

彼は、”Rhapsody in Blue”に包まれる。

スポットの当たったステージの上で、明はピアノを弾いていた。
目を閉じて天を振り仰ぎ、遠く心を遊ばせながら。
長い髪は、彼女の呼吸に合わせて揺れている。

端正なタッチと、巧みなアーティキュレーション。
彼女らしい、クールな演奏。

そして激しい。

明の波立つ感情が、素肌を通して染み渡ってくる。

明のピアノを聴くたびに。

その細い体の何処に、そんなパワーが潜んでいるのだろうと思つ。
銘はそつと、カウンターに近付いた。

片付けは、あらかた終わっている。

馨が、やっていてくれたのだろう。

最後の一音が、宙に消えたあと。

ようやく彼女は、銘に気付いた。

さつと鍵盤を拭き、蓋を閉めると、真顔で彼に歩み寄る。
湯を沸かしつつ、彼は椅子を勧めた。

「そんな曲弾くの、初めて聴いたよ」

「何でも弾くさ。じゃないと、向こうじゃ食っていけないもの」

明は悪びれずにそう言つと、手を差し出した。

「何？」

「バイト代。今日、馨さんと一緒に打ち上げの手伝いして、片付け
までしたんだから」

「後日」

「また。いつもそう言つて忘れる癖に」

そう言つて、明はくすくす笑つた。
しかし。

銘は、そのいつにないテンションの高さに、違和感を覚えていた。

「なあ、明」

「うん」

「本多さんと…何かあつたのか？」

「え？」

「あんな弾き方するなんて。明らかにもない」

彼女は黙つて、ステージを見詰めた。

それから、つと下りて、スポットを消しに行く。

「何もないよ。何も言われなかった。一言もね。だから、癪に障ったんだ」

両手を揉み解しながら、彼女は再びスツールに座る。

「僕は所詮外様だから。向こうだって、気に食わないんじゃないの」「そんなことはないだろう」

「でも、僕はあの人が何だか気に食わなかった。何でだろう？」

「昔からあの人は、好かれるタイプじゃないよ。良くも悪くも孤高の人だから」

銘が、慣れた手つきで珈琲をカップに注ぐのを、明は黙って見詰めていた。

その視線が、やけに鋭く感じられる。

出されたカップに口をつけつつ、明が言う。

「…ねえ」

「うん？」

「今まで、何処に行ってたの？」

彼は、さすがに言い澁む。

「いや、何処っていう訳じゃ…」

「随分、遅かったじゃない。何してたのさ」

「あのな、明。俺の女じゃあるまいし、どうしてそういう言い方…」

「何回も電話来てたよ。修子さんから。何時でもいいから電話くれ
って」

彼は、はっとした。

それから、明を見た。

彼女は冷淡に、メモを突き出した。

修子からかかってきた電話の時間を記した紙を。
まるで、彩とのかを知っているかのように。

その推測を裏付けけるかのように、明は口を開いた。

「例の人と、会ってたんでしょ？」

「例の人って？」

「あの、画家とか何とか言う人」

しばしの沈黙。

その中に。

道路を行く車のタイヤが、水を滑らかに弾く音が聞こえる。
また、雨が降り出したようだった。

銘は、ついに観念した。

明の勘の良さに、今更敵う筈がない。
諦めて、メモを受け取る。

それを胸ポケットにしまったあと。

煙草に火を点けながら、彼は溜息をついた。

「…だとしたら？」

「別に。とやかく言うつもりはないよ。それこそ、銘さんの女でもないしね。銘さんがそれでいいって言うなら、僕からは何も言えないさ。ただ…」

話しながら、明は、彼の煙草を引ったくる。

それから、深々と吸い込んで、ゆっくりと吐き出す。

明のそんな姿を見るのは、これが初めてだった。

彼女の細い指先から立ち昇る紫煙が、天井から降り注ぐライトの光に透けていく。

明は長い時間、それを目で追っていた。

再び、沈黙が訪れる。

「…ただ、何？」

銘は、微かな苛立ちを見せながら言う。

明は微笑んで、煙草を彼に返した。

「筋は、通した方がいいと思ってさ。おせっかいかもしれないけど」

スツールから軽い身のこなしで降りると、明は、ショルダーバッグを手にした。

「修子さん、銘さんの気持ちが変われること、薄々気付いてるみたいだったから」

「…余計なこと、言ったんじゃないだろうな?」

「まさか。僕は、どちらの味方でもないよ。悪いけど。そういうのはうんざり」

くすくす笑いながら、明は、ドアに手をかけた。

「まあ、電話して。もう3時過ぎだけど。彼女、待ってると思うよ」

彼が電話を取るのを確認してから、明はドアを閉めた。

あとには。

救い難い沈黙が訪れる。

銘はしばらく、明の消えたドアの先を見詰めていた。

彼女が発した言葉の意味を、何度も反芻しながら。

それから。

意を決したように、ダイアルする。

011から始まる市外局番を。

修子の自宅へ、繋がる番号を。

第十二話

明の言う通り。

修子はすぐに、電話を取った。

「…銘さん？」

「ごめん。遅くなって。何かあったの？」

「ううん。特にないけど。声が聞きたくて」

「珍しいな。修がそんなこと言うなんて」

「いけなかった？」

「いや、いいよ」

「今、帰って来たの？」

「そう」

「遅かったね」

「ちょっと、出てたから」

「明さんは？」

「もう帰ったよ」

「馨さん、元気？他の人達は？」

「皆、相変わらずだよ。修が、夏休み帰って来なかったから、寂しかったけど」

「ごめんね。バイトもサークルも、抜けられなくて…」

「判ってる。いいよ、謝らなくても」

彼は店の照明を全て落とし、子機を持って自室に移動した。ベッドの上に横になりながら、彼女の声に耳を傾ける。

離れて久しい、恋人の声に。

彼女が話すのは、主に、大学のことだった。何を専攻しているか、どんな友人がいるか。サークルではどういった活動をしているか。

しかし。

どんな話を話していても、修子の声には、拭い去れない緊張があった。

そのことを、彼はすぐに感じ取っていた。

ひとしきり、近況を話し終わると。

彼女は、声のトーンを幾分落とした。

「…ねえ、銘さん」

「うん」

「ひょっとして、後悔してる？」

「何を？」

「わたしと、婚約したこと…」

修子から発せられた、思わぬ言葉に。

彼は、反射的に息を呑んだ。

胸掻き乱す動揺が、たちまち湧き上がる。

「…どうして急に、そんなこと訊くの？」

「何でだろう。ここ最近、凄く不安になって。何だか、銘さんが離れていくみたいな…」

彼は、答えなかった。

彼女に隠れて、他の女性と逢いながら。

その相手に惹かれ始めている今。

自分の気持ちに、嘘をつきたくなかったのだ。

そんな空気を。

彼女はすぐに察した。

「…銘さん？」

彼は、答えられなかった。

今にも、言ってしまいそうだったからだ。
彩のことを。

彼女に惹かれていることを。

「…どうして、否定しないの？何も言ってくれないの？」

修子の声に、悲痛な色加わる。
しかし。

彼はその問いに、答えられる筈もない。
凍てつくような沈黙が、再び訪れる。

話題を変えるように、彼は、口を開いた。

「修」

「なに？」

「東京へ、戻ってくる気はないの？」

「…え？」

「ずっと、そこにいるつもり？」

無茶を言っていることを、彼は承知だった。

自分が、ある種の誘導尋問をしようとしていると。

銘は、最初から自覚していた。
しかし。

もう、自分の意思では、止めることが出来なくなっていたのだ。

「…どういう意味？」

「言っただ通りだよ」

「え、ねえ、何言ってるの？出来る訳ないでしょう？大学だって、
あと2年あるのに…」

彼女は、うるたえた。

無理もない。

彼からそんな言葉を聞くと、夢にも思っていなかったのだ。

「わたしに、大学辞めろって言うの？それで、東京に戻って？」

「判ってるよ、修。そんなこと、出来る筈ないだろう？」

「そう……」

「だったら、俺の結論は、一つしかないよ」

彼は、自分の言葉の冷たさに気付いていた。

それが、卑怯な駆け引きであることも。

「修。…一度、離れてみよう。君が、大学を卒業するまで。ここへ帰ってくるまで」

受話器の向こうで。

彼女の言葉が、凍りつくのが判った。

沈黙は、雄弁だった。

彼女の戸惑いも、躊躇いも、全てそこに含まれていた。

「…嘘でしょう？ねえ、嘘だね？どうして急に、そんな酷いこと

——」

「ここ数ヶ月、君とはろくに話も出来なくて。会うことすら叶わなくて。君は知らないかもしれないけど、俺が一体、どんな気持ちでいたと思う？」

「ごめんなさい。でもね、それは…」

「その間、ずっと考えてたんだ。このまま、こうして続けていった方がいいのかって」

「……」

「俺には無理だよ。待ち続けることなんて。元々、心が通じていた訳でもないのに」

「……」

「修は、本多さんにまだ気持ちを残してる。それを俺が無理矢理、自分のものにして。迷惑だったろうね。10も年上の、しかも、こんな壊れた体抱えた奴なんかさ」

「……」

「君には、もつといい男が現れるよ。俺なんかよりずっと若くて、ずっとましな奴が」

「……」

「修は……俺の何を求めてた？過去の栄光かい？」

「そんな…」

「彼は、今週末には札幌へ行くよ。遠慮なく会えばいい。本多さん、君に凄く会いたがっていたから。それに…」

「銘さん…」

彼女の声は、震えていた。

「…本気で、そんなこと言ってるの？」

「本気って？」

「本多さんに会えとか、わたしが…銘さんの名前目当てでとか…」

「……」

「わたし、ずっと寂しかったけど、辛かったけど、誰でもいいって訳じゃなかった。銘さんはいつも近くにいて、相談に乗ってくれて何をしても許してくれて。それが、嬉しかった。だから、わたしは、銘さんのこと、好きになったのに…」

「……」

「ずっと、そんな風に思われてたなんて…」

「……」

「ねえ。銘さんは…銘さんには、わたしはもう必要ないってこと？」

「……」

「……そういうことでしょう？」

「…ごめん」

彼は、深い溜息をつく。

彼女の声が、次第に嗚咽に変わっていくのを耳にしながら。

「修。ほんとにごめん。でも、俺…もう、一人になりたいんだ」

「……」

「しばらく、考えさせて。だから、もう、君も自由になれるよ。俺に気兼ねすることなく」

「…本当にいいの？それで、銘さんは満足なの？」

「……」

「もう、やり直せないの？わたしが何を言っても、銘さんの耳には届かないの？」

「…ごめん」

「ねえ、銘さん。お願い。わたしの何がいけなかったか言って。じゃないと…」

「ごめん、修。もう、無理なんだ」

「謝ることも、出来ないの？話し合うことも？そんな…酷いよ…」

「修は、悪くない。俺の我儘だから。俺は君に、責任を押し付けようとしてるだけなんだ」

「…どういこと？」

「今は、言えないよ」

「どうして？ねえ、銘さん。一体、何があったの？」

「……」

「どうして何も教えてくれないの？何も言ってくれないの？」

彼は、どうしても答えられなかった。

それを察したかのように、修子も口を閉ざす。

嫌な沈黙が続く中。

回線の向こう側から、彼女の囁きだけが聞こえてくる。

その声を耳にしながら。

彼は、身を引き裂かれんばかりの痛みを味わっていた。

半ば引き裂かれた制服のまま、彼の腕の中に飛び込んできた可憐な少女を、

いつしか彼は、愛するようになっていた。
だからこそ。

本多に捨てられた彼女を、放っておけなかったのだ。

この4年間、彼が愛した少女の温もりは、まだ、自分の内にあった。
しかし。

銘は敢えて、それを封印しようとしていた。
新たな想いのために。
或いは、修子への戒めのために。

第十三話

気付くと。

彼は、深い森の中にいた。

天を突く針葉樹の頂からは、僅かに、真つ青な空が覗いている。

湿った腐葉土、澱んだ水、苔や樹木が発散する深緑の匂い。

濃密な森の息吹に包まれて、時にむせ返りそうになりながら、彼は足を進める。

小枝を踏みしめるたび、ぱきぱきと乾いた音が響く。

奥に進むにつれ、緑は一層深くなる。

それでも彼は、歩みを止めることはなかった。

その先に、求める何かがあるような気がしていたからだ。

やがて。

銘は、足を止めた。

目の前には、巨大な胡桃くるみの古木が聳そびえ立つ。

幹の直径だけで、15mほどもあるだろうか。

天を覆い尽くさんばかりの勢いで、四方に太い枝を伸ばしている。

振り仰ぐと、鬱蒼とした葉を透かして、木漏れ日がきらきらと降りて来るのが見えた。

それにも関わらず。

地面はじつとりと濡れていて、とても歩けそうにない。

暗さに目が慣れた頃。

彼は、その木の根元に、誰かがいることに気付いた。

はつとして、近付こうとしたのだが。
何故か、足は動かない。

気は逸るものの、体は動かず、声すら出せなかった。

その時。

遙か上空から、一粒の実が落ちてきた。

彼が反射的に身をかわすと、それは肩を掠めて視界から消える。
しかし。

辺りには、物音一つしない。

聴覚が麻痺するほどの静寂の中。

緑の実は、飲み込まれるかのように、苔むした大地に消えていく。

思わず息を呑み、身動きを止めた彼の周囲に。

胡桃の実は、一つ、また一つと降ってくる。

そして。

その実は全て、丸い穴を穿ちつつ、地面に落ちていく。

何の抵抗もなく、すうっと吸い込まれていくのだ。

まるで、底なし沼に消えていくように。

恐る恐る、銘は、穿たれた穴の一つを覗きこんでみた。

それは、彼の想像を絶する深さのようだった。

不意に。

本能的な恐怖が、足元から湧き上がってくる。

その光景に慄然としながらも。

彼は、胡桃の大木に寄り添っている人影に目をやった。

時折こぼれる木漏れ日の中で、栗色の髪がきらりと光る。

彼は、呼びたかった。

彼女の名を。

しかし、声が出ない。

彼女は彼を、ちらりと一瞥する。

それから。

白い服の裾を残して、さつと身をひるがえ翻してしまふ。

（まずい）

彼は、焦りを感じた。

そのため。

ようやく恐怖を振り切って、足を踏み出そうとした。

その時。

足元が、大きく揺らいだ気がした。

そのまま、漆黒の闇に吸い込まれる。

冷たく深い地の底に、何処までも真っ直ぐに落ちていく感覚。

はっとして目を覚ました時。

全身に、びっしょりと汗をかいていた。

あの、海の夢を見た朝と同じように。

肩で息をしながら、彼は考えた。

あそこにいた女性是谁なのか。

彩なのか、修子なのか。

それすらも。

彼には、判らなかつた。

ベッドを抜け出して、シャワーを浴びていても、夢の感触は消えなかつた。

滴る熱い湯に身を任せながら、銘は俯いて、溜息をつく。

（あの夢はきつと、罰なのだろう。俺が、修子にしたことへの）

昨夜。

別れを切り出したことを、彼は、後悔してはいなかつた。

ただ。

あまりにも急で、一方的過ぎた。

彼女の涙は、深い悲しみは、彼の胸に鋭い痛みを残していた。しかし。

もう、後戻りは出来なかつたのだ。

店の照明を点け、湯を沸かしている間に、新聞を取りに階段を上がる。

シャッターを開けると、空は、今にも降り出しそうに暗い。

憂鬱な気分のまま、ドアを閉め、階段を下りる。

新聞に目を通しながら珈琲を淹れていると、電話が鳴った。

手に取ってディスプレイを見る。

修子からだった。

しばらく、躊躇したもの。
彼は、その着信を黙殺した。
無意識に、リングの回数を数えながら。

ポットに熱い珈琲を注ぎ終わった頃。
ようやく電話は鳴り止んだ。

後ろめたさを押し殺しつつ、銘は、出掛ける準備を始めた。
洗い晒しのダンガリー・シャツに腕を通し、カーキのチノ・パンツ
を履く。

他には、車のキーと財布のみ。
以前から、携帯は持たない主義だ。
だから。

一旦店を離れてしまうと、もう、誰からも束縛されない。

銀座までは、車ですぐだった。
画廊の店主の好意で、傍にある駐車場を使わせて貰う。
まだ、朝の9時。
通勤客に逆行して、彼は道を急いだ。

彩はすでに、そこにいた。
ノックするまでもなく、ドアを開けてくれる。

「おはよう、銘さん…」

彼女は、小声で呟く。
何処となく、はにかんだ笑顔を浮かべて。

それを見て彼も、ようやくほっとする。

彼女はまだ自分に、好意を持ってくれているみたいだと。

「クロワッサンを買っておいたの。一緒にどうかなと思って」

ドアの鍵をかけ、カーテンを引いてから、彼女は言う。

「気を遣わなくて良かったのに」と、銘。

「いつも、美味しい珈琲を戴いてるから……」

そう言う彼女の服装は、淡い緑地に、鮮やかな黄色が散りばめられた、薄い絹のワンピース。

肩を隠すように、その上から、くすんだ紫のシヨールを羽織っている。

亜麻色の長い髪は、銀のかんざしでルーズに纏められ、数束の後れ毛が、艶やかな頬にはらりと落ちている。

彼は長い間、その横顔に見とれていた。

そして。

彼女の傍にただで、心が満たされていくのを感じていた。

パーティーションの奥に置かれたテーブルの上を、彩はさっと片付ける。

オーブンは１１時からなので、時間に余裕はある。

銘はいつものように、入り口に背を向けて座った。

その隣に、彩もまた腰を下ろす。

彼の持ってきた珈琲と、彼女が用意したクロワッサンで、ささやかな朝食が始まる。

彩は、言葉少ないながら、世界中の画家の話を聞かせてくれる。クリムトやゴッホ、ルノワールやピカソの話を。

「彩さんは、誰が一番好きなの？」

彼は、思い付いて訊いてみた。

長い間、宙を睨みながら、彼女は考えているようだった。

「…一番好きなのは、クレーかな。ゴーギャンやマチスも好きだけど」

「なるほど。判る気がする」

「そう？」

「俺もそんなに絵は詳しくないけど。彩さんの絵は、クレーみたいに、何処か冷たく突き放した部分と、温かい部分とが共存しているから」

「ほんと？」

彼女は珍しく、晴れやかな笑顔を見せた。

「嬉しい。そう言って貰えると」

「いや、見当違いだったらごめん。でも、前からそう感じてたんだ」

微かな日差しと、パーテーションの作る陰影の中で。

彼女は、そつと右手を伸ばしてくる。

ごく自然に、銘は、その手を取っていた。

「…銘さんののは、音楽家の指ね」

「音楽家つて訳じゃないけど、今は」

「でも、音を奏でる指でしょう？」

「まあ、そうかな」

「わたしのは、酷いでしょう。荒れてて、ちつとも綺麗じゃない」

「そんなことはないよ」

「絵を描くのに一生懸命で、こういうこと、すっかりおろそかになつて」

そう言つて目を伏せる彼女を。

彼は、心から愛おしいと思つた。
思わず。

その小さな手を取つて、両手でそつと押し包む。

短く切り揃えた爪を、微かに残る傷を、確かめるように撫でながら。
彼はしばらく、その手を離そうとはしなかった。

「…銘さん」

「うん」

「わたし、本当はね、全然自信なんかなくて」

「何に対して？」

「絵を描くことに。別に、芸大出てる訳でもないし、こうやって個展開けるのも、槇村のバックアップがあるからで。わたしの実力なんかじゃないもの……」

彼は、その言葉を聞きながら、長い間、彼女を見詰めていた。そして。

その指先を、自分の口元へ持っていく。

「俺は、芸術のことは良く判らないけど……」

そう、前置きしてから。

彩の人差し指に、彼はそつと口付ける。

「少なくとも、俺はあなたの絵から、いろいろなものを感じることが出来る。それに、何かを表現するのには、何処を出たかが問題じゃないと思う。今、何をしているか、何を伝えられるかが大事なんだ。音楽と一緒にだよ。それに……」

彼は目を閉じて、その指の一本一本に、唇を当てていく。

丁度、彼女の惑いを封印していくかのように。

指輪のない小さな手を、愛おしく思いながら。

右手の指全てに口付けを終えると。

彼は、彼女の左手を求めた。

彩は黙って手を預け、その様子を見ている。

その視線の中で。

微かな胸の疼きを、彼は感じていた。

「あなたの手は、苦勞してきた手だ。日向も日陰も歩いてきた、その証を感じるよ。だから、あなたの絵は、現実離れしていない。額面だけの美しさで終わってない」

「…銘さんも、そう。あなたの音は、他の誰にも奏でられないもの」

彼女は、封印が終わった指を、じっと眺めていた。

それから、彼の手を取り、同じように、唇を当てていく。

その柔らかな感触に。

彼は、今にも負けてしまいそうになる。

「俺はもう、終わった人間だよ。あとは、自分の楽しみで弾くしかないんだ」

「ねえ、そんなこと言わないで…また、わたしに聞かせて。あなたの音楽を」

「…俺に、出来るだろうか」

「出来るよ。わたしが、蘇らせてあげる。あなたが閉じ込めているものを」

そう言うつと。

彩は椅子を引き、彼に向き直った。

「ねえ、銘さん、知ってる？物事には皆、落ち着くべき場所があるつて」

青みがかった瞳が、彼を捕らえている。

「例えば、こんな風に。ね、指先は、指先に…」

見詰め合ったまま。

彼女は、銘の両手を取り、指を絡めてきた。
それから。

ゆっくりと、彼を引き寄せる。

心臓の高鳴りが聞こえてしまいそうな位置に、彼女の瞳があった。

「唇は、唇に…」

目を閉じる暇もなく。

彼女の唇が、そつと重なってきた。
ふわりとした柔らかさと、心震わせる温もりが伝わってくる。

長い時間。

彩の、初々しい口付けを受けながら。
痺れるような感覚を、彼は覚えていた。

唇を離すと。

彩は、彼の首に抱き付いて、肩に顔を埋めた。

「…ごめんなさい」

腕の中で、彼女は弱々しく首を振る。

「でも、わたし…銘さんが好き…」

堪え切れず。

その細い体を、彼は抱き締める。

彼女の言葉の意味を、半ば、信じられないまま。

それから。

閉ざされた、狭い空間の中で。

二人は何度も、唇を重ねた。

求め合い、きつく抱き合いながら。

これまでの空白を埋め、互いの孤独を拭い去るように。

そんな熱狂の中にあって。

彼は、修子のことを思い出していた。

2年前。

彼女とこんな風に、口付けを交わした日のことを。

しかし。

後ろめたさは、束の間だった。

「銘さん……」

自分の名を呼ぶ、彩の声に。

思いは、収斂されていった。

愛らしい呼びかけに応えつつ、彼は、ただひたすらに唇を求めた。

開店時間である、11時ぎりぎりまで。

彩が、堪え切れずに、微かな声を漏らし始めるまで。

第十四話

正午から。

予定通り、リハーサルが始まっていた。

慌ただしく走り回るスタッフの只中で、本多は譜面を手にしつつ、神経質そうに煙草をくゆらせている。

「コーダからケツまでストレート。リピートはなし。リフだけ通す」

ベーゼンドルファーのフルコンに向かった本多が、上にある灰皿で煙草を揉み消すと。

間髪を入れず、アランのカウントが飛ぶ。
うねるようなリズムの中、本番さながらの、気迫溢れる演奏が始まる。

スタッフの多くも手を止めて、ステージの上を注視するほどだった。

言葉通り、リフだけを浚うと。

本多はピアノから立ち上がり、両手を振って演奏を中断させた。

「OK、OK。そんな感じでいい。アラン、今のタイミングを忘れるな」

マッチョなドラマーは、親指を突き出して笑顔を見せる。

「松村、ダブル・バーの次のシンコペ、どうしても遅れるぞ。気を付ける」

「はい、すみません」

そこへ、マネージャーの河野が駆けつける。

「お疲れさまです。そろそろ、最後の調律が入りますので」

「そうか。じゃあもういいな。さて、まだ時間があるけど。飯でも食いに行くか」

珍しく晴れやかな笑顔を見せながら、彼は煙草を胸ポケットに入れ、ジャケットを羽織る。

その背中に。

河野がおずおずと声をかけてきた。

「本多さん、お疲れのところ、すみません」

「どうした？」

「あの、お会いしたいという方が…」

その言葉に。

本多は、不愉快そうに眉を顰めた。

「どうせ、例の何とか言う企画屋だろう。そんな暇あるか」

「いや、違うんですよ」

額の汗を拭いつつ、河野は後ろをちらつと振り返る。その視線の先に目をやった彼は、思わず息を呑んだ。

「…驚いたな。まさか君と、こんなところで会えるなんて」

修子は、ちょっとだけ微笑むと、深々と頭を下げた。

「ご無沙汰しました、本多さん」

「変わらないな。相変わらず…可愛いよ」

彼は嬉しそうに、修子を抱き締めた。

それから、河野に向かってつつけんどんに言う。

「先に行つてろ。すぐ行くから」

「あ、あの、本多さん」

「30分だけ時間をくれ。連中には言うなよ」

戸惑いつつも、河野は一礼し、通路を去っていく。

その30分の意味を、修子は咄嗟に理解した。

途端に、緊張が走る。

「元気だったかい？ 何、銘に聞いたけど、大学行ってるんだって？」

「はい」

「ひょっとして、北大かい？」

「そうです」

「へえ。凄いな。君は昔から、頭のいい子だったからな」

そんな話をしながら。

彼は当然のように修子の肩を抱き、控え室の扉を開ける。そして。

ドアが閉まると同時に、鍵がかけられる音を、彼女は確かに聞いた。

奥にあるソファーに、本多は彼女を座らせた。

それから愛おしそうに、彼女の髪を撫でる。

覚悟はしていたものの。

心臓は、嫌でも高鳴ってくる。

「…銘とは、上手くいつてるのか？」

彼女は、答えなかった。

本多の瞳から、黙って目を逸らす。

「そうか。でなければ、俺に会いに来る訳ないもんな」

「…会えって、言われたんです」

「え？」

「本多さんに会えって。銘さんに」

「冗談だろう？ あいつがそんなことを？」

「振られちゃったんです、わたし。もう…一人にして欲しいって」

彼女は笑ってみせたが、彼は真っ直ぐに、修子を見詰めている。

その視線に、彼女は戸惑って、再び目を伏せてしまう。
あとには、息詰まるような沈黙だけが残された。

やがて。

彼の指先が、頬に触れてくるのが判った。

「修子ちゃんは、寂しがり屋だからな。何でもそつやって、一人で背負い込んで…」

「……」

「それにしても。救い難い馬鹿だよ、あいつは。君の気持ちも考えないで。別れて正解だ」

「いえ、そんなことは…」

「それで、どうする？　いつそ、俺と縊^よりを戻すか？」

「…え？」

彼女は、耳を疑った。

しかし。

いつになく真剣な彼の眼差しに、その言葉が嘘ではないことを察していた。

「そのつもりで来たんだろう？　最初から」

「まさか。わたし、そんなつもりじゃ…」

「なあ、修子ちゃん」彼は、子供を諭すような言い方をする。「俺

ね、叱られるかもしれないけど」

「はい」

「あれから、色んな女と付き合ってたんだ。君を忘れようとして」

「……」

「でも、忘れられなかった。それで判った。君よりいい女なんていないってことが」

「そんな…わたしなんて…」

「ほら、またそれを言う。止めなよ。もっと、自信を持つんだ」

「……」

「俺は一度も、君を忘れたことなんかない。可愛くて、ひたむきで俺には勿体ないくらいの子だからな」

彼女は、答えられなかった。
しかし。

その優しい言葉に、涙を堪え切れなくなっていた。

不意にこぼれた涙を、彼は、見逃さなかった。
逞しい腕が、背中を強く抱いてくる。

彼の口付けを、その愛情を、今更拒むことなど出来ない。

40分後。

修子は、メンバーやスタッフと共に、すすきのの繁華街を歩いていた。

「4年前に来た時は、丁度冬で。もう、寒くて大変でしたよ」

ベースストの松村が、溜息をつく。

本多が、それに答えて言う。

「馬鹿言え。俺の時なんか、観測史上初の大雪で、死ぬかと思っただぞ」

「それって、戦前の話でしょう?」

「お前がまだ女も知らない頃だよ」

「また。すぐそういう言い方をする」

二人は、他愛のない会話をしながら、げらげら笑っている。

現地のコーディネーターと数人の音楽関係者は、ひたすら愛想笑い。河野は黙って、スケジュール帳を睨んでいる。

彼等から少し離れて歩いていた修子は、その後ろ姿を、複雑な思いで見詰めていた。

レイバンのサングラスをかけ、レザーのジャケットを粋に着こなす本多は、如何にもミュージシャンという雰囲気です。

185cmの長身と端正な容貌のせいもあってか、雑踏の中でも一際目立った。

相変わらず陽気で、よく喋る。

さっきまで、あれほど情熱的にこの体を抱いていたにも関わらず、今はもう、何事もなかったかのように自分の世界にいる。

修子にはいつも、それが不思議だった。

恐らく、スタッフは皆知っているのだろう。

彼の性癖を。

そう思うと、気が塞いだ。

16歳の冬。

本多に惹かれ、請われるままに身を捧げていた頃。

彼の妻に対する優越感に、恍惚としていたこともあった。
しかし。

後日、彼女は知ることになる。

本多の愛人など、無数にいることを。

自分も、その中の一人に過ぎないことを。

それでもいいと、修子は思っていた。

彼と一緒にいられるなら、それだけでいいと。

本多もまた、彼女の一途さと純粹さに打たれ、やがて、結婚さえ口にするようになる。

20年近く連れ添った妻を捨てた結果。

彼が選んだのは、修子ではなく、音楽だった。

そして、数々の実績と栄光を引き連れて、ヨーロッパに渡ってしまった。
った。

身も心も傷付いた彼女を癒してくれたのは、他でもない、銘の存在

だった。

彼は、双方の事情を全て知りながら、何一つ口出ししなかった。出会ってから、3年間。

彼女を見守ってくれたのは、彼だけだったのだ。

（わたしはもう、汚れてしまったな…）

通りすがりの女子高生を眺めつつ、修子は思った。試験や部活、バイト、友達とのお喋りや、淡い恋。そういった楽しみとは、まるで無縁の3年間。

銘の元で暮らすようになった頃のことを、彼女は思い出していた。自分のために早起きし、朝食を作ってくれた彼。

毎朝、この髪にブラシを入れ、丁寧に結ってくれたこと。

数学や英語を教え、制服にアイロンをかけ、笑顔で送り出してくれたこと。

恐ろしい夢に魘された夜、嫌な顔一つせず、抱き締めてくれたこと。ジャズや音楽理論を一から教え、ステージに送り出してくれたこと。父のように、兄のように、いつも傍にいてくれた彼のことを。今更、忘れられる筈がない。

あの日に帰りたいと、修子はあらためて思った。

失ってみて初めて、彼の優しさが身に沁みていた。

これまでは、当たり前のように思っていた彼の愛情を、受ける権利などないと知りながら。

彼に、詫びたかった。

自分は何て馬鹿だったのだろうと。

そして、告げたかった。

今でも、あなたを愛していると…

「修子ちゃん？」

本多の声に、はっと顔を上げると。

彼は微笑みつつ、肩を抱いてくる。

大きなホールでのコンサートを控えているせいか、いつになく上機嫌だ。

そして、耳にこう囁いてくる。

「その服、いいね。凄く似合ってる」

「ありがとうございます」

「さっきは、素敵だったよ。やっぱり、君じゃなきゃ駄目だな、俺は」

彼女は、何と答えていいか判らなかった。

束の間の情事を思い出して、耳まで血が昇ってくる。

それでいて。

彼の好みや誘い方を、いまだに熟知している自分が嫌だった。

肩にかけた手を離すと、本多はあらためて言った。

「今日は、最後までいてくれるんだろう？」

「え、はい…」

「打ち上げもあるから、ずっといればいい。遠慮することないよ」

「あ、でも…お邪魔じゃないですか？」

「まさか。もし良ければ、客席で聴いてればいい。最前列を用意させるよ」

「いえ、そこまでして戴く訳には」

「俺がいいって言ってるんだから。な、河野？」

「はい、もう手配してありますので」

若いマネージャーは、緊張した面持ちで言う。

その、真面目そうな横顔を眺めながら。

修子は、前のマネージャーのことを懐かしく思い出していた。

不器用でおつちよこちよいな酒井は、本多の学生時代からの友人でもあった。

彼がレーベルを移籍する際に、自から希望して職を辞した。

血気盛んな頃から彼を支えてきた人間だけに、長年の心労が祟ったのだろう。

修子は、そんな酒井が好きだった。

怒鳴られても殴られても、本多の音楽を愛し、身も心も捧げてきた男。

しかし。

酒井が修子に勧めたのは、本多ではなかった。

「修子ちゃん、いい子だから、こんな風に傷付いていくの、俺、見
てられなくてさ。銘は、いい奴だよ。俊明としあきなんかよりずっと。修子
ちゃんのこと、大事にしてくれるよ」

そう言っ

酒井は、前歯の欠けた口で、豪快に笑ってみせた。
それが。

つい、昨日の出来事のように感じられる。

本多と肩を並べて歩きながら、修子は時々、携帯を開いてみる。
着信はなかった。

あの夜から一度も、銘は、彼女と話そうとはしない。

何度かけても、電話に出ることすらなかった。

そのことが、彼の不在が、一層寂しさを募らせる。

暮れかけていく札幌の空の下。

かつて、自分を捨てた恋人に肩を抱かれ。

自分は一体、何処に行くのだろうと、修子は思っていた。

絶望と自棄とがないまぜになった状態で。

忘れ得ぬ人の面影を、胸に押し込めたまま。

第十五話

正午。

シャッターを押し開けると、中から、ピアノの音がした。
明だな、と彼は思った。

現在。

この店の合鍵を持っているのは3人。
銘と、オーナーである馨、それと明。
赤坂の自宅にスラインウェイのセミコンがある癖に、何故か彼女は
このピアノが気に入っていて、時間があると、こうして弾きに来る
のだ。

階段を降り、カウンターに入る銘を、彼女はちらつと一瞥した。

弾いているのは、アルフレッド・コルトーの練習曲だ。

指をスムーズに動かすためのシステムティックな音階を、明はメトロノームに合わせ、飽くことなく、淡々と繰り返し弾いている。

「よく続くよな。ほんと、感心するよ」

半ば呆れつつ、銘は言う。

「やってると、随分違うんだ。銘さんもやる？」

「冗談。俺はそういうの向かないから」

「それだから、いつまで経っても勘が戻らないんだよ」

ピアノを弾きながら、明はくすくす笑う。
思いがけず、痛いところをつかれてしまった。

「…じゃあ、久々にお手合わせ願おうか」

「へえ、珍しい。弾く気になったの」

「まあね」

彼は、ステージの脇に置いてあるウッド・ベースを手を取った。
ワセリンを取り、慣れた手付きで指先に擦り込んでいく。

チューニングが済むと、明は幾分早目のテンポで、” S o W h a
t ” のイントロ・パターンを弾き始める。

「うわ、いきなりそれか」

銘は、思わず苦笑した。

「リハビリには持ってこいでしょう？」

明は、悪びれずに言う。

そして、軽妙なタッチで、テーマを弾き始める。

彼の指は迷うことなく、そのラインを追っていく。

明が叩き出すモダンな旋律に、銘のベースが絡む。

この二人の手にかかれば、こんな単純なコード進行の曲でさえ、珠
玉の一品になる。

ベースとしての本分である、リズムとルートのサポートを守りなが

らも、時にアグレッシブに、時に問い返すように語りかけてくる彼のベースを、明はこよなく愛していた。
その揺るぎのないビートと音程があるからこそ、自分を自由に解き放つことが出来るのだ。

久し振りにベースに触れ、生の音楽を紡ぎ出しながら。

彼は明らかに、自分の中の何かが変化したことに気付いていた。
以前から悩みの種だった、引きずるような重さはすでになく、軽やかに息が出来る感覚がある。

（わたしが、蘇らせてあげる）

彩の言葉を、彼は思い出していた。

彼女が言ったことは本当だったんだな、と彼は思った。
でなければ。

こんな風に、体が言うことを聞く筈がない。

明の手によって、曲が新たな展開を進んでいくにつれ。

弦の振動を、体内のビートを心地良く体感しながら。

彼は、やはり自分はこの世界でしか生きられないと、あらためて思った。

より深い部分で心を通わせ、魂を共有し、一つの音楽を作り上げていく快感。

これは、誰とでも分かち合えるものではない。

この時。

飯田明いいたけあきというピアニストの実力をもまた、彼は思い知ったのだ。

演奏は、40分以上続いた。

デュオだというのに、それ以上の手応えと興奮とがあった。明に導かれるままにエンディングを迎え、呼吸を合わせて最後の音を弾ききったあと。

二人はステージ上で目を合わせ、声をあげて笑い始めた。何故だか。

おかしくて、堪らなかったのだ。

「もう、銘さんには敵わないな」

「何言ってるんだ。明のあれは反則だろう」

「だって、普通にやってたら何だか舐められてる気がしてきてさ」

「そんなの、お互いさまだよ。俺だって気が気じゃなかった」

スツールにベースを立てかけると、銘は彼女に歩み寄った。明もまた立ち上がって、彼と hug をする。

やや汗ばんだ体を抱き締め、乱れた呼吸を整えながら。

「お前はやっぱり、凄い奴だよ」

「何、今頃気付いたの？」

「ライブじゃ、実力の半分も出してないだろう？」

体を離してから、彼は笑顔で、その肩を叩いた。それからステージを降り、カウンターへ向かう。

「何か飲む？」

「ビール」

「冗談。まだ昼だぞ？」

「今日はどうせ夕方だから。それまでには抜けるでしょう」

「全く、困った奴だな」

肩を竦めつつ、銘は、彼女のためにピスルナーを用意する。
彼の後ろ姿を眺めたあと。

ピアノの鍵盤を拭きながら、明は、独り言のように呟いた。

「…ベースが良くないからだよ」

「え？」

「僕は、なかなか本気を出せないんだ。銘さんぐらいの人じゃないや」

彼は驚いて、明を見る。

「嘘だろう？ 葵はよくやってると思うよ。ここ数ヶ月で随分変わったし」

「それがまずいのさ」

ピアノの蓋を閉め、スポットを消してから、彼女は指を振りながら、カウンターのスツールへ座った。

それから、大きな溜息をつく。

「葵は確かに安定してるよ。良くも悪くもね。その分、煽られることも触発されることもない」

「そうかな？ 聴いてる分には、そうは思えないけど。耳もいいし、勉強熱心だし…」

「ただただ無難にこなしてるって感じで、燃えもせず、冷めもせず。物足りないよ」

「へえ、意外だな」

彼は、ピルスナーに生ビールを満たし、明の前に置く。

彼女は無言でそれを取り、一気に流し込む。

それからまた、溜息を一つ。

「坂口さんが連れて来ちゃったからさ。橋元バンド辞めさせて。今更放り出す訳にいかないよ」

「ああ、そうか」

銘は、腕組みした。

松尾葵^{まつおあおい}は、仙台出身のベーシスト。

高校１年からベースを始め、大学入学をきっかけに、都内のライブハウスで活動を始めた。

やがて、ピアニストの橋元^{はしもと}由香里^{ゆかり}に見出され、在学中にプロ・デビューした逸材だ。

東北の人間らしく口数は少ないが、実直で誠実な人柄であり、なかなかの美青年故、ファンも多い。

それを。

明のマネージャーである坂口が、わざわざ頭を下げて引き抜いてきたのだ。

彼は銘を慕い、時間の許す限り、個人的に教えを請うほどの勉強家だ。

メンバーとの仲も良く、演奏だって決して悪くはない。

むしろ、若手の中ではファースト・コールだろう。

だからこそ。

明の意外な言葉に、銘は戸惑いを隠せなかった。

「愛人だったって噂だよ。橋元さんの」

「まさか」

彼はそれを、一笑に伏した。

「俺にはそうは思えないな。ここまでやって来れたのは、あくまで葵の実力だよ」

「まあ、どっちでもいいけど。お陰で僕は、今でもあのオバサンに恨まれてるんだから」

「気にするな。この業界じゃ、よくあることだから」

新たにビールを注ぎながら、彼は笑った。
明には、それが不満だったようだ。

「笑い事じゃないよ。結構深刻なんだから」

「ごめん。そうは見えなくてさ」

「銘さんから、それとなく指導してやってくれない？」

「指導？」

「その、メンタルな部分というか、感覚をさ。無理かな？」

彼は明の前にビールを置き、しばし考えた。

「うーん、明が焦る気持ちも判るけど、そういう部分は、指導の仕様がでないな。天性のものもあるし、第一、経験を積んでいくうちに判ってくるからだから」

「銘さんが弾いてくれれば、何の心配もないのに」

「また、簡単にそういうことを言う」

「本気だよ。僕は初めて会った時から、銘さんのベースが好きなんだ」

彼は、反射的に明を見た。

その大きな瞳が、真っ直ぐに自分を見据えてくる。

「銘さんじゃなきゃ、駄目なんだ。知ってる癖に」

「買い被り過ぎだよ。明と俺が、釣り合う訳ないだろう」

「すぐ、そういう言い方する。僕には、銘さんが必要なんだ。銘さん以外、考えられないよ」

「は？　なあ、明、ちょっと待って…」

「あのさ、前からこうして頼んでるのに、どうして受け入れてくれないの？　僕がこれほど惚れ込んだ相手なんかいないのに。何か僕に不満でもあるの？」

彼は、明のただならぬ剣幕に慌てた。

慌てながら、思い出していた。

以前から。

レギュラー・メンバーとして、明のユニットに参加してくれるよう、何度も頼まれていたことを。

しかし。

長年第一線を離れていたことと、身体的な不安とが重なっていたこともあり、

彼はそれに対して、yesとは言えなかったのだ。

第十六話

戸惑う彼を。

明はなおも、真っ向から見詰めてくる。

その真剣な眼差しから、彼は、逃れられそうもない。

その時。

「うん、お邪魔かな？」

ドアの向こうから、聞き慣れた声がした。

明が振り向くと、そこに、馨の人懐っこい丸顔があった。

「いや、まさか。お邪魔だなんて」

動揺を隠しつつ、銘は、スツールを勧める。

「随分、熱心に口説いてたみたいだからな」

明の頭にぽん、と手の平を乗せ、馨は笑顔を見せた。

銘は、必死に弁明する。

「いや、ですからあれは主語が抜けてまして。音楽の話です」

「あ、そう言えばそうだった。ベースがって言うの、忘れてた」

「普通に聞けば、愛の告白だったぞ」

スツールに腰掛けながら、馨が笑う。
明は、ぷいと横を向いた。

「さっきも言っただけど、僕が好きなのは、銘さんのベースだけだよ」

「本人も、いい男じゃないか」

「あのね、馨さん。僕は、誠実な人が好きなんだ。誰がこんな浮気者なんか…」

その口調に。

銘は、ぎよっとした。

「おい、明。何だよその言い方…」

「浮気者か。まあ、確かにそうだな」

馨はにこにこしながら、明の言葉を肯定した。
銘ははっとして、彼を見る。

「実は、修子ちゃんから電話貰ってな。今日は、その件で来たんだ」

「馨さん、それは…」

「まあいいから、ちょっと出て。ここへ座れ」

「僕、席、外そうか？」

「いや、明。お前も一緒にいてくれ」

銘は覚悟してカウンターを出、馨の隣に腰を下ろした。
何を言われるかは、すでに判っていた。
明は黙って、自らビールを注ぎに立つ。

「…なあ、銘」

「はい」

「別れたんだって？ 修子ちゃんと」

彼は、答えられなかった。

修子が承諾しない限り、別れたとは言えないと思っていたからだ。

「いえ、まだです。…向こうにいる間だけ、離れてみようとは言いました」

「なるほどな」

馨は、胸ポケットから煙草を取り出して、火を点ける。
深く吸い込んでから、再び話し始める。

「俺以上に、カミさんがパニクっててさ。ほら、一応俺達は彼女の後見人だから。てつきりお前等は、このまま一緒になるもんだと信じてたからさ。寝耳に水で」

「すみません、ご迷惑を」

「いや、謝るなよ。それより、話し合ったのか？ 今後のこととか」

「…いえ、まだです」

「だろうな」

銘が置いたカップに、彼は静かに口を付けた。

「こういうことは、片方の話ばかり聞くもんじゃないって、俺はうちの奴に言っただ。お前がそういうことを言い出すからには、余程の理由があるんだろうって、俺は思ってたさ」

「……」

「ぶっちゃけ、どうなのよ。何か理由があるんだろう？」

「女とか」明が、口を挟んだ。

「へ？ 女だって？ 銘、そうなのか？」

彼は、ばつが悪そうに目を逸らした。
それを見て、馨は確信したようだった。

「冗談だろう？ 信じられんな。よりによって、堅物のお前が」

「免疫ないから、余計手に負えないんだよね」

「明、悪いけど黙っててくれないか。知りもしない癖に」

銘は、ぴしりと嗜めた。

ビールを呷りながら、彼女は涼しい顔だ。

「判ったよ。黙ってりゃいいんでしょう。もう、おっかないな」

「…それで、修子ちゃんとの婚約を解消することにしたのか？」

「正確には、それだけが理由じゃないです」

銘は一度口をつぐんで、頭の中を整理した。

それが、言い訳でないかどうかを確認しながら。

「前から思ってた。年齢差にしろ、育った環境にしろ、無理があるんじゃないかと。それに加えて、遠距離ですからね。彼女は遊びたい盛りだし、まだ学生生活も始まったばかり。俺がいるせいで、いろいろな出合いを無駄にして欲しくないんです。もし良縁があるとしたら」

「じゃあ、例えばな。…俊明と縊りを戻してもいいってことか？」

その名を耳にして。

銘は一瞬、言葉を失った。

しかし。

こう、答えるしかなかった。

「…仕方ないです。彼女が望むなら。俺には、引き止める権限なんかありません」

「そうか。判った」

馨は、煙草の火を揉み消した。
それから、おもむろに訊く。

「で。お前を狂わせてるのは誰だ？」

「人妻だよ」と、明。

「だから、黙ってるって……」

銘は思わず、声を荒げる。

しかし。

彼女は、少しも怯まずに言う。

「しかも、槇村英の奥さん。凄いな。美術界をも巻き込んだ、一大スキャンダルだ」

クールな明の物言いに。

二人は、静まり返ってしまった。

その沈黙にいたたまれず。

銘は、ターンテーブルを回す。

"Sonny Stitt Plays Arrangement
of Quincy Jones"のB面、"If You
Could See Me Now"が、JBLから溢れ出してく
る。

ステイットが奏でる極上のバラードに、彼等はしばし耳を傾けた。

それから。

銘は、ゆっくりと口を開いた。

「……彼女は、ただの友人です。修子の件は、彼女とは関係ありません

ん」

「まあ、そういうことにしておくかな。お前も大人なんだし。俺は今更、うるさいことは言いたくないよ。こればかりはな」

冷めた珈琲を啜ったあと、馨は、深い溜息をついた。

「でも、銘。まさか、電話一本で済まそうなんて、思ってるんじゃないだろうな」

「いえ。何れ修子には、きちんと説明したいと思ってはいるんですが…」

そう言つと。

銘は当惑して、視線を落とす。

その胸中を察したかのように、馨は言った。

「—— 会つて来い」

「え？」

「行つて、ちゃんと話してこい」

馨は、ポケットの中から一枚の封筒を取り出した。

カウンターのの上にそれを置くと、銘の目を見据えて言う。

「明日の朝8時、羽田発新千歳行きだ。修子ちゃんには、俺から連絡しておいたから」

銘は、顔色を変えた。

幾ら何でも、急な話過ぎる。

「そんな。馨さんにそこまでして戴く理由がありませんよ」

「何言つてんだ、馬鹿！」

柔和な馨から発せられた、思いも掛けない言葉に。

銘は、はっと息を呑んだ。

「言つたお前はいいかもしれないが、今、彼女がどんな気持ちでいると思つてる？ 何度かけたって、電話すら出ないそうじゃないか。何考えてんだよ、お前は！」

「……」

「それを、何れだあ？ それまで彼女は、一人で悶々としてなきやならないんだぞ？ 全く、どうしたんだよ、銘。お前の想像力は、一体、何処に行つちまつたんだよ？」

彼には、一言もなかった。

馨の言う通りだった。

しばらく。

カウンターの上に置かれたチケットを、銘は眺めていた。
やがて。

彼は決心したように、その封筒に手を伸ばす。

「…判りました。今回は、お言葉に甘えます」

「ついでにちよっと、羽を休めて来い。ここのところ、お前はおかしかったからな」

「……」

「北海道はいいぞ。人間の手の及ばない自然が残ってる。俺は釧路生まれだけど、今でも、あの大地に戻れば、小さいことなんかみんな吹き飛んじまう気がするくらいだ」

ようやく笑顔を見せた馨の前に、明がさっと右手を出す。

「何」

「あれ、僕のは？」

「何で俺が、明の分まで出さなきゃいかんのよ。お前はしょっちゅう行ってるだろう？」

「前回ツアーで行った時も、観光する暇なんかなかったんだ」

「もう、すぐそれだ。油断も隙もねえな。坂口に頼めよ」

「無理だつて。坂口さん、ケチだしさ」

二人は、仲良く小突き合いながら、くすくす笑っている。

しかし。

銘は、笑う気にはなれなかった。

銀座での個展は、今日が最終日だ。

そのため彼は、閉店後、彼女を迎えに行く約束をしていた。
それが終われば、例え会いたくても、会えなくなる。

彩が、連絡先を教えてくれない限り。

第十七話

憂鬱な気分のまま、彼は仕事を続けた。

日曜なので、23時で看板を消す。

ライブもないのに、何故か来客が多かった。
年に数回、こんな日がある。

シャワーを浴び、身支度を整えながら。

彼は、明の言葉を思い出していた。

あれは、本当に音楽の話だったのだろうか。
ひょっとして彼女は、自分のことを――

（まさか。あり得ないな。何を自惚れてるんだ、俺は）

彼は首を振って、その馬鹿げた憶測を打ち消した。

同じ業界の人間と関係を持たないというのが、彼のポリシーだった。
ミュージシャン同士だと、上手くいっているうちはいいが、破綻した際に、何かと面倒が多いからだ。

戸締まりをし、駐車場まで歩いていく途中。

見上げると、中空には、明るい月がかかっていた。

昨日までの雨は嘘のように上がり、高層ビルの間隙からは、星空が覗いている。

忙しさにかまけて、空を見ることなどすっかり忘れていたことに、
彼はこの時、ようやく気付いたのだった。

日曜の夜なので、道路は恐ろしく空いていた。
そのため、銀座まではずぐだった。

店に入ると、彩はソファーに腰を下ろし、彼を待っていた。

「こんばんは、銘さん」

彼女は、いつになく晴れやかな笑顔を見せた。

「こんばんは。ごめん、遅くなって」

銘も、笑顔を返す。

「大丈夫。こっちもさっきまで片付けてたから」

「運ぶのはどれ？」

銘が尋ねると、彼女は黙って、”melodious blue”を指差した。

「これだけ？」

「あとは明日、専門の業者さんが運んでくれるから」

「遠慮することないのに」

「ううん。本当にいいの。それに…」

彩はつと立ち上がり、表面にそつと触れてみる。

「これは、銘さんにあげたいと思って」

「え？」

「貰ってくれる？ 迷惑でなければ」

彼は、うろたえた。

展示中のその絵には、少なくとも、6桁の値段がついていたからだ。

「そんな… 買うならまだしも、ただで貰う訳にはいかないよ」

「元々、銘さんのために描いたものだから。もし、嫌いじゃなかったら」

「まさか、嫌いだなんて。凄く好きな絵だよ。でも…」

「時々、思い出して欲しいの。銘さんのためにわたし、何もしてあげられなかったけど…」

銘は、はつとして彼女を見た。

思いがけず真剣な眼差しが、彼を捕らえてくる。

「…どういうこと？」

「今日で、最後にしましょう」

彼女は、懸命に笑顔を作った。

それから、何度も練習を重ねたかのように、話し始めた。

「こういう状態は、やっぱり、お互いのために良くないと思う……」

やや俯きながら、彼女は続ける。

「あなたには、修子さんがいる訳だし、わたしだって、夫のある身だもの。再会してから一ヶ月、毎日会えたこの二週間、素敵な夢を見させて貰ったから」

「……」

「わたしは欲張りだから。続けていたらきつと、これ以上のことを望んでしまうと思う。そうしたら、必ず、悪いことが起きる。そんな気がしてならないの……」

予想外の出来事に、彼は、言葉を失った。

立ち竦みつつ。

突然のことに混乱する思考を、必死に立て直そうとする。

「要するに——俺とはもう、会えないって？」

「……」

「これで、終わりにしたいってこと？」

見詰め返すと。

彩は、ずっと視線を外した。

その表情から。

彼女の苦悩が察せられた。

この日を迎えるまでの懊悩と逡巡さえも、彼には容易に想像が出来

た。

恐らく。

彼女は、銘の将来を思い、一人ですっと悩んでいたのだろう。

しかし。

彼は、言わずにはいられなかった。

「…彩さん」

「……」

「それは、本心なの？」

「……」

「本心じゃないとしたら。…今更、そんなこと言わないで」

「…でも」

キャミソールの肩紐を、彼女は無意識に引き上げた。

それから、両腕を掻き抱く。

押し寄せる不安から、我が身を守るかのように。

「—— 自分が怖い。このままで行くと、何もかも放り出してしまいたい。あなたのことも、彼女のこときつと、傷付けるに決まっているもの…」

銘は思わず、溜息をついた。

それから、おもむろに口を開く。

「ねえ、彩さん」

「うん」

「俺…明日、修子に会いに行くんだ」

「え？」

「正式に、婚約を破棄するために。電話ではもう、伝えてあるけど」

銘は、自分の発した言葉が、想像以上に冷たく響いていることに気付いていた。

しかし、もう黙っている訳にはいかなかった。

彩は、目を細めて、彼を見ている。

「…嘘でしょう？」

「本当だよ。明日の朝の飛行機で、札幌へ行ってくる。明日から三日間かけて、今後のことを話し合ってくるよ」

「どうして、そんな…」

「前々から、何とかしなければいけないとは思ってたんだ。彼女とは年も違い過ぎるし、考え方も、生き方も違ってきている」

「……」

「以前ならそれでも、何とかやっていけると思ったよ。でも、今は

—— 事情が違ってきてるんだ」

「……」

「誤解して欲しくないけど、あなたのために、修子と別れる決心をした訳じゃないんだ。これはあくまで、俺と彼女の問題だから」

彩は、じつと彼の目を見据えていた。
それから。

堪えかねたように、彼に歩み寄る。

「銘さん……いいの、それで？」

彼女の声は、掠れていた。

「いいんだ。もう、決めたことだから」

「後悔、したりしない？」

彼は、彩の瞳を真っ直ぐに見詰めた。
それから。

ゆつくりと、首を横に振る。

彼を見詰めながら。

彩は、意を決したように、壁際のパネルに手を触れた。
天井の照明が、一つずつ消えていく。

腕の中に、小さな体が滑り込んで来た時。

銘は迷わず、その可憐な唇を求めた。

決して、後悔などするものか。

そう、何度も自分に言い聞かせて。

第十八話

白いロールスクリーンを通して差し込む、街灯の薄明かりの中で、二人は何度も、口付けを交わした。そのうちに。

抑えは、利かなくなってくる。

早まる鼓動に、息苦しさを感じながらも。

彼の身も心もすでに、彩を欲していた。

より深く、より鮮明に、彼女と交わりたい。

そんな思いが、彼を突き動かしていた。

貪るように唇を重ねながら。

彼は、彩の体をよりきつく抱き、細い肩紐を引き下ろす。

露わになった胸元から、淡いピンクのレースが覗く。

合間に漏らす彩の吐息が、速い呼吸が、一層思いを募らせる。

さらに求めようとする彼の手を、彩は、咎めるように掴んだ。

熱い口付けの解けた隙に、彼女はその耳に囁く。

「銘さん、駄目……」

その言葉に。

銘はやっと、我に返った。

唇を離して彩を抱き締めると、彼は、必死に呼吸を整えようとする。柔らかな髪を撫で、額に優しく唇を付けながら。

込み上げてくる愛しさに、今にも溺れてしまいそうになる自分を、踏み止まらせるのがやっとだった。

その腕に抱かれ、服を整えながら、彩は呟く。

「…銘さん」

「うん」

「この先、何があっても…わたしを受け入れてくれる？」

「そのつもりだよ」

「ねえ、本当のことを知っても、わたしを離さないで…」

「絶対に、離さないよ」

「あなたは酷く驚くと思うけど、お願いだから、嫌いにならないで…」

「大丈夫。何があっても、彩さんを嫌いになったりしない。約束する」

彩の手が、自分の背をきつく抱くのが判った。

彼女もまた、心の中で戦っているのだと、彼は思った。

その葛藤と痛みとが。

まるで、自分のことのように感じられた。

車を、店の前に置いてから。

二人掛かりで、その絵を搬入する。

注意深く階段を降り、無事に店内に辿り着いてから、あらためて梱包を解く。

彩の言葉通り、カウンターの奥にある扉と食器棚との間の壁に、丁度それは収まった。

「凄いね。ぴったりだ」

銘は、素直に感心した。

「目測には自信があるのよ、仕事柄」

彩は、満足そうに言う。

こぼれるような笑顔を向けたまま。

そんな彼女を、銘は心から愛おしく思った。

「…何か、飲んでいく？」

「ううん。出来れば、早目に帰りたいの」

「判った。じゃあ…」

そう言つて、カウンターから出ようとした時。

突然、電話が鳴った。

はっとしてディスプレイを見ると、明の携帯からだった。ちよっと迷つてから、彼は、通話ボタンを押す。

「もしもし？」

「…銘さん？」

「どうした、こんな時間に」

彩は、さり気なく視線を外して、ステージに歩いていく。その背中を眺めながら、彼は明の言葉を待つ。しかし。

彼女は何故か、沈黙したままだ。

「——何かあったのか？」彼は、微かな不安を覚えた。「何だか、らしくないな」

「昼間は…ごめん」

「え？」

「余計なこと言って」

「ああ、別にいいよ。気にしてないから」

「明日、行くんだよね」

「そう。やるべきことはやらないと」

「…いるんでしょう？そこに」

銘は、言葉に詰まった。

それが、何よりの証拠になることを知っていながら。

彼の狼狽を察してか。
明は、穏やかに続けた。

「丁度、店の近くまで来てたんだ。ちょっと寄ろつかと思ったら、お取り込み中みたいだし」

「いや、そんなんじゃないよ。これは……」

「いいよ。邪魔するつもりもないし、告げ口する気もないから」

「なあ、今、何処に——」

そう言いかけた時。

すでに、電話は切れていた。

彼は諦めて、子機を戻す。

彩はステージから下り、銘に向かって歩いてくる。

「……修子さん？」

「いや、違うよ」

彼は、動揺を押し隠しつつ微笑んだ。

「ほら、もう、2時過ぎだよ。送っていくから」

階段を上がり、車に近付くと。

明は黙って、運転席から降りてきた。

後ろ手にドアを閉めると、二人に向き直り。

思わず足を止めた銘を、冷やかに一瞥して言う。

「夜間の路駐は危ないって。しかも、エンジンも掛けっ放し、キーも付けっ放しで」

「それはどうも」

やっとの思いで、銘は、笑顔を返した。

しかし。

明は真顔で、にこりもしない。

「何かしてるのかと思って、ずっと待ってたんだ。だって、20分も出て来ないんだもの。心配になったから、余程店に行こうかと思っただけど、ひよっとしたらと思って…」

「彼女から、絵を貰ったんだ。それを運んでただけだよ」

「ま、いいけど。僕には関係ないことだし」

「また、そういう言い方を…」

彼の微かな苛立ちを知りながら、明は、全く取り合わない。

ジーンズのポケットに両手をつっ込むと、彩に向かって愛想良く微笑む。

彼女も慌てて、会釈する。

21歳の明が、24歳の彩よりずっと、大人びて見えた瞬間だった。

「じゃ、僕は帰るよ」

銘は咄嗟に、その腕を掴む。

「送っていくよ」

「いいよ。大した距離じゃないし。圭介のところへ行けば、チャリもあるから」

そう言つて、彼女はやんわりと銘の手を外し、くるりと踵を返す。
二、三歩歩き出してから。
思い出したように、明は振り返る。

「そうだ、これ」

ポケットから何かを探り出すと、銘に放つて寄越す。
彼の右手はそれを、反射的に受け取った。

「店の鍵じゃないか」

驚きを隠せずに、銘は言う。
明は、肩を竦めた。

「返すよ」

「どうして」

「言わなきゃいけない？」

彼は、戸惑ったまま、口をつぐんだ。
そんな銘に向かつて。

明は少しだけ微笑んでみせた。

それからあらためて、二人に背を向ける。

振り返りもせず、去っていくその背中を。

彼は、黙って見送っていた。

車が走り出すと。

彩は、呟くように言った。

「…ごめんなさい」

「どうして謝るの」

「わたしのせいで…」

「彩さんのせいじゃない。あいつはそれ程、心の狭い奴じゃないから。気にすることないよ」

「彼女、ピアノの人でしょう？」

「そう」

「綺麗な人。わたしには、金色の光に見えた。何だか、眩くて温かい…」

「うん、確かに、そんなイメージがあるな。名前の通り」

答えながら。

彼は、明に見放されたような寂しさを感じていた。
この5年間で。

こんなことは、初めてだった。

その喪失感を振り切るように、彼は、アクセルを踏む。

たちまち背後に流れゆく風景に目をやりながら、煙草に火を点ける。
そう。

誰が何と言おうと。

もう、後戻りなど、出来はしないのだ。

第十九話

銘と別れてのち。

明は足早に、圭介のマンションへ向かった。
店からは、一駅と離れていない距離だ。

暗証番号を入力し、ドアのロックを解除する。

そこから、地下の駐輪場へ続くスロープを歩いていた時。
背後から来た車が、軽くクラクションを鳴らしてくる。
振り返ると、そこに、圭介のフェアレディZがあった。

「どうした？ 今から帰る？」

彼は、窓を開けて身を乗り出す。

しんとした駐車場に、その声は響いていく。

「そうだけど」

「送ってくよ」

「いいよ。チャリで帰るから」

「いいから、乗れって」

微笑みつつ、圭介は手招きする。

明は、しょうがないなという風に、肩を竦めて見せた。

彼女が助手席に乗り込むのを確認してから、車は、軽やかにUター

ンする。

圭介は、246に出る前に、ナビの設定を赤坂に変更した。

カーステレオから流れているのは、ブランフォード・マルサリスの
”REQUIREM”。

「へえ、懐かしい。これ、好きだったんだ」

明が、目を輝かせて言う。

「だろ？ いいよね。俺も好き」

「ケニー・カークランドが参加した、最後のアルバムだね？」

「そう。この前HＭＶで見つけてさ。最近、こればっか聴いてる」

微笑みながら、彼は、ボリュームを上げる。

その手元を眺めながら。

明は、躊躇いがちに口を開く。

「…圭介さあ」

「ん？」

「明日、予定ない？」

「今のところね。久々のオフだから。明もだろう？」

「うん」

「そっか。じゃ、このまま何処か、遊びに行く？」

「……」

「山中湖でも、伊豆でも。日帰り出来る距離なら、何処でも連れてくよ」

「あのさ…出来れば、葉山まで送って欲しいんだ」

「あ、はいはい。おふくろさんとな」

圭介は、前方を見たまま頷いた。

「いいよ。泊めてくれるんなら、明日、一緒に帰ってもいいし」

「良かった。助かるよ」

「ったく。俺にまで遠慮すんなよ」

明は安堵の表情を見せ、助手席のシートを倒した。それから目を閉じて、深い溜息をつく。

「どうした。元気ねえな」

「別に」

「銘さんと、何かあったのか」

「何もないよ」

「嘘つけ。お前、ほんっと判り易いからな」

「圭介こそ、何やってたのさ。こんな時間まで」

「お、上手く切り返したな」

彼がくすくす笑った。

形のいい耳にかかる、茶色の髪の間から、シルバーのピアスが光る。

サックス奏者の内藤圭介ないとうけいすけは、明と同じ年。

工業大学に通う、現役の学生だ。

銘の紹介で、去年から、明のユニットに加わった。

複雑な家庭環境で育った彼は、明と大いに気が合った。
そのため。

二人は、暇さえあれば、一緒に出歩いているのだった。

「妹のとこだよ。あいつ来年受験なのに、全然勉強してねえから」

「麻由ちゃん、もう高3だっけ」

「そう。危機感のかけらもない。俺と一緒にさ。家系かもな」

信号待ちの間。

彼は、伸びをした。

「…で。銘さんと何があった？」

「だから、何もないよ」

「例の、女の件だろ？」

明は、反射的に彼を見た。

「鍵を返してきただけ。もう、行かない方がいいと思って」

「へえ。やっと、親離れする気になったか」

「親って言うか…もつと早く気付くべきだったんだ。銘さんは、そういうのに縁がない人だって、僕は勝手に決め付けてた気がする。行動を起こすからには、あの人は本気なんだよね。元々、口先だけの人じゃないから」

「俺は新参者だから、その辺のいきさつは良く判んない。けど…」

アクセルを踏み込みながら、彼は首を捻った。

「まあ、見守ってやるのが一番じゃね？　こついう場合は特に」

「そうだね。僕もそう思うんだ。ただ、少し距離を置いた方がいい
と思つて…」

「何でまた？」

「圭介は、女の嫉妬を知らないな？」

「はは、確かに。俺、女は嫌いだから。特にそついうの、ウザくて
駄目」

「やっぱりそうなんだ」

「何言つてんだ、今更。知つてた癖に」

「薄々はね」

「じゃなきゃ、お前と何もしないで寝てられる訳ねえじゃん」

「僕に、興味がないのかと思ってたよ」

「お前に興味がない男がいると思つてんの？」

圭介は肩を竦め、マルボ口を取り出した。
明も黙つて、手を伸ばす。

「何？」

「一本頂戴」

「止めとけ」

「何で」

「らしくないだろ」

「いいから」

彼は根負けして、一本を咥え、残りを箱ごと明に渡した。
左手でライターを取り、火を点ける。
それから、明の煙草にも。

「ありがとう」

「どういたしまして」

彼は、運転席側の窓を、少しだけ開けて呟く。

「知らねえぞ、おふくろさんに怒られても」

「青はあおいそんなの気にする人じゃないよ」

「俺が不良娘にしたって言われそうで怖いな」

「大丈夫。だって、あの人は…」

明は、紫煙を眺めつつ、他人事のように言う。

「僕のことになんか、まるつきり関心ないから」

「そうかな」

「そうだって」

「正気の時の青さんは、結構心配してるんだぞ、お前のこと」

「それだって、せいぜい、年に数回だよ。あとはずっと、夢の世界にいるもの。あの人は、眠りの森の美女なんだ。年も取らず、暑さも寒さも、痛みも知らず…」

「でも、ピアノは弾ける」と、圭介が付け加える。

「そう。ピアノだけはちゃんと弾ける。レコーディングもこなせるぐらいにね。それが皆、不思議で仕方がない。もう十数年もあんな状態なのに、ピアノだけは、決して青を見放さない。父さんに言わせれば、音楽の神様に愛されてるからなんだって」

「なるほどな。でも、判る気はする。青さんの演奏は、神がかり的だから」

「だから僕は一生、青には敵わない」

「そんなことないだろ」

「いや、ほんと。愛情も貰えず、母親らしいことなんか何一つして貰えなかった。でも——」

助手席側の窓を少し開けると、明はそこから、煙草を放り投げた。

「悔しいけど、僕はあの人が好きなんだ。あの人から離れられない。どうしてもね」

「そりゃ、親なんだから。仕方ないだろう」

「あの人に限らず、僕が好きになる人は皆、僕より他の誰かが好きなんだ」

圭介は、思わず溜息をつく。

それから、彼女の右手を掴み、指を絡ませる。

「また始まった。明は、いつもそれだ」

「圭介だつて…」

「俺が、何よ」

「例の子とか」

「ああ、巧たくみのことか」

「付き合ってるんでしょ？」

「まあな」

「ほら、やっぱり！」

「隠してた訳じゃないよ。ただ何て言うの、今は遠恋だからさ」

「だって、彼氏は彼氏じゃない」

「そりゃそうだけど。…なあ、ひょっとして、俺のことも好き組に入れてくれてた訳？」

「優しくしてくれる人なら、僕は誰だつて好きだよ。坂口さんも、馨さんも」

「銘さんもな」

「そう。銘さんも。ただ、それが、そういう好きなのかどうかなんて、僕には判らない」

「知ってる。お前はまだ、本気で人を好きになったことがない奴だから」

「僕には一生、縁がないよ。いつそ、知らずに終わりたいよ。いや、終われると思う。多分ね」

「多分、な」

明の真似をして、彼も窓から吸殻を投げた。

「な、明。悪いことするのは快感だろう?」

「快感と、後ろめたさと」

「それが恋だよ」

「は? 意味判んない」

「今に、知ることになるよ。相手が誰か、俺には見当も付かないけど」

「少なくとも、圭介じゃないね」

「そう。間違いなく俺じゃない。だからこうして、お前を甘えさせられるんだけどな」

そう言つと。

彼は、路肩に車を停め、エンジンを切った。

それから、無言でシートベルトを外す。

抱き寄せると、明は抵抗せずに、身を任せてくる。

助手席のシートベルトを外し、圭介は、あらためて彼女を抱き締め
た。

薄いＴシャツを通して、彼の温もりが伝わってくる。

「…ほんと、お前は素直じゃない」

呆れたように、圭介が言う。

「泣け、喚^{わめ}け。辛い時はさ。誰にでもあるんだぜ、そついの。恥
ずかしいことじゃない」

「…泣いたことないんだ。ここ数年」

「そりゃ、これだけ突っ張って生きてきてりゃな」

彼の腕に抱かれながら。

明は、珍しく混乱していた。

何が悲しくて、何が辛いのか。

誰が好きで、誰が嫌いなのか。

彼女には、判らなかった。

この日まで。

明にとって、自分を取り巻く人々は皆、均質な存在だった。

男女の別なく、平等に、愛すべき対象だった。

その中の誰かが、特別な存在になることなど、

これまでの彼女には、想像すらつかなかった。

しかし。

圭介に言われて、ようやく気付いた。

意識的に、銘と離れてから。

帰る場所を失ったような寂しさに、襲われていることに。

その一方で。

別れ際の銘の姿を、何度も思い出しながら。

そのことを、辛いとも悲しいとも感じることの出来ない自分を。
明は、観念して受け入れるしかなかった。

第二十話

芝浦に向け、車を走らせている時。

彩は、思い掛けない言葉を口にした。

「…銘さん」

「うん」

「…うちまで、送ってくれる？」

「え？」

彼は思わず、彩を見た。

彼女は俯いたまま、膝の上で、手を握り締めている。

「迷惑でなければ」

「まさか。迷惑だなんて…」

そう、答えつつ。

彼は俄かに、緊張を覚えていた。

その言葉に秘められた意味を。

彼はすぐに、理解していた。

彩は、踏み出そうとしているのだ。

これまで、銘自身が決して踏み出せなかった、最初の一步を。

その決意を思うだけで。
彼の鼓動は、みるみる高鳴っていく。
苦しいほどに。

いつも彼女を降ろす場所から、2キロほど進んだ辺り。
槇村邸は、埠頭の近くにあった。
広大な敷地の只中に、ぽつりと佇む純白の家。
正方形の建物は、何の飾りもない。
窓やドアといったものさえ、恐ろしく無機質で。
住居と言うよりはまるで、私設の美術館のようだ。

玄関に続く小道には、美しい白砂が敷かれている。
踏み締めるたびに、細かな砂が、軽く軋む音がした。

「これは、クレタ島の砂なの。いつの間にか、彼、持ってきたみたい」

彩は、事もなげに言う。

そして、慣れた足取りで、その砂の上を歩いていく。
やや遅れて、銘もそのあとに続く。

何の飾り気もないドアに、彩が、クラシックな真鍮製の鍵を差し入れると。

かちりと、小気味良い音がした。

「どうぞ」

「お邪魔します」

彼は、恐る恐る玄関に足を踏み入れた。

建物の半分は吹き抜けになっており、そこがリビングとして使われているようだった。

南側の片隅に、二階へ通じる階段があった。

空気は思ったより冷やりとしていて、仄かな画材の匂いを孕んでいる。

小さな彩の姿を見失わないように、彼は階段を上った。

毛足の長い絨緞の感触を確かめながら、三階まで上っていった時。不意に、彩の姿が消えた。

「…彩さん？」

彼は、不安になって声をかける。
しかし、返事はない。

暗い廊下を進んでいくにつれ、明らかに空気が変化した。
開け放たれた窓から流れてくる、潮の香り。

導かれるように足を運んでいるうちに、恐ろしく広い部屋に出た。
特殊なガラスを巡らせた空間の中で、銘はゆっくりと首を巡らせる。
その部屋からは、東京湾が一望出来た。

何処までがネオンで、何処からが星空か判らないほどの、クリアな
夜景。

余りの美しさに。

彼は思わず息を呑み、その場に立ち竦む。

その時。

「―― 銘さん」

彩の声がした。

彼ははっとして、辺りを見回した。
しかし、彼女の姿は、何処にも見えない。

「ねえ、わたしを探して……」

その言葉に、導かれるようにして。
暗さに目が慣れないまま、彼は歩き出す。

広い部屋の一角には、画廊にあったような絹布が、高い天井から吊るされている。

何重にも立ち塞がる布を避けながら、彼は懸命に彩を探した。
そのうちに。

奇妙な既視感が、彼を襲い始める。
そう。

あの、渚の夢だ。

彩を求めつつ、彼は恐れていた。
もしあの夢が本当なら。

自分は何れ、彼女を傷付けることになるかもしれない。
しかし。

今更、引き下がる訳にはいかない。

（彼女は、俺を試しているんだ）

ようやく、目が慣れてきた頃。

銘は、そう確信していた。

潮風の吹き込む暗がりの中、はためく白布を掻い潜りながら。
彼は諦めることなく、彩を探し続けた。

（死角は、この辺りしかない。だとしたら…）

そして。

星灯りに映る影を、通り過ぎようとする彩の姿を。

彼の目は、ついに捉えた。

その腕を掴み、華奢な肢体を抱き締めた拍子に。

布を吊っている糸が、ぷつりと切れた。

それは、ようやく出会った二人の上に、ふわりと落ちかかる。

大理石の床に、広がる布の上に彼女を横たえながら。

銘は、これまでにない息苦しさを感じていた。

明らかに、異常な痛みを。

不意に。

彼の執刀医だった、松村教授の言葉を思い出す。

（—— 銘くん。恋は、君の体に障るからね。そのことを、よく

覚えておきなさい)

しかし。

彼にはもう、止められそうもなかった。

命の危険を抱えながら、彩を愛することを。

その腕の中で。

彩は真っ直ぐに、彼を見詰めてくる。

ひたむきに、彼だけを見ている。

床に広がる亜麻色の髪、美しい瞳に。

彼は、長い間見とれていた。

何か言わなくては。

そう、思いはするものの。

言葉は空回りするばかりで、何の役にも立たない。

一方で。

冷静な自分は、なおも押し留めようとする。

禁忌を犯してはならないと。

しかし。

彩を思う気持ちの前で。

理性は、あまりにも無力だった。

「…銘さん」

彩が、口を開く。

その呼吸もまた、速かった。

「離さないで。嫌いにならないで…わたしのこと…」

その言葉に。

彼は今にも、魂を奪われてしまいそうだった。

「離さないよ。離すものか、もう…」

苦しい息の下で、銘は、何とか言葉を繋ぐ。

「どんな罰でも、俺は受けるよ。彩さんのためなら、俺は、何だつてする。あなたと、こうして、いられるのなら——」

彩の腕が、自分を強く抱く。

まるで、何かの合図のように。

その唇に、唇を重ねた時。

彼は、覚悟した。

これから先、全ての運命を受け入れることを。

彼女のために、越えていかなければならない試練を。

熱い口付けを交わし、服を脱ぎ捨てたあと。

彼は初めて、彩の肌を知った。

時折襲う胸の痛みに、意識を失いそうになりながらも。

銘は、彼女を愛することを止めなかった。

その吐息を、切ない声を耳元で聞きたびに。

思いは、募るばかりだった。

やがて。

請われるままに、彼女を貫こうとした時。
彼は、予想外の抵抗を感じた。
しかし。

躊躇うことを、彩は許さなかった。
彼女は、銘の体を強く引き寄せる。
何もかも、判っていたように。
そして。

ついに、その封印を解かせた。

何度も繰り返す、官能的な揺らぎの中で。
彼は今にも、自分を見失ってしまいそうだった。
このまま、命が尽きてしまってもいい。
たった一度でも。

彼女と、結ばれることが出来るのなら。

薄れそうになる意識と戦いながら。

彼は、何度もそう思っていた。

そして、その思いが伝わったかのように。

彼女の四肢には、みるみる緊張が漲みなぎってくる。

その吐息が、囁り泣くような声に変わっていく。

限界は、近かった。

彼が、その細い体を抱き締め、さらに深く求めようとした時。
彩の小さな悲鳴が、耳元を掠めた。

ほぼ、同時に。

彼もまた、解き放たれていく。
痛みを伴うハレーションと、痺れるような感触の中で。
これまで味わったことのない、切なさの中で。

第二十一話

体を重ねたまま。

肩で息をし、激しい動悸を堪えながら。

彼は彩を、きつく抱き締めていた。

それでいて。

彼には、信じられなかった。

彼女がまだ、無垢な体であったことが。

銘の背を抱きながら。

彼女は、そっと囁いた。

「…驚いたでしょう」

そう言う。

彩は、愛おしそうに、彼の耳に口付けてくる。

「24にもなつて、しかも、結婚して三年も経つのにって…」

彼は、答えられなかった。

苦しさや切なさ、込み上げるばかりで。

どんな想いも、言葉になりはしない。

上体をやや起こすと。

銘はあらためて、彼女に口付けした。

柔らかな唇を、何度も求めているうちに。

愛しさに、息が止まりそうになる。

唇を離し、彼女を抱き締めた頃。

世界は、薄らと明るさを取り戻しつつあった。

彩の温もりと、うつとりするような肌の滑らかさを。

彼は、生涯忘れまいと思った。

「…彩さん」

「うん」

「良かったの？ 俺で…」

返事の変わりに。

彩は、彼を抱く腕に力を込める。

その目から溢れ出す温かい涙を、彼は、指先で感じていた。

「これまで何度も、恋をして。でも、誰も、応えてなんかくれなかったの…わたし、見つけて欲しかった。ずっと。ここから、連れ出して欲しかったの…」

彼は、頷いた。

その涙を、そっと指先で拭いながら。

「ねえ、信じられる？ わたしね、十六であの人と出会って…それから一度も、こういう風になったことはなかった。結婚前は勿論、してからもずっと…」

「……」

「槇村が求めているのは、お人形さんなの。綺麗に着飾って、家にいるだけの。パーティーがある時、横に並んで、ただにこにこして

いるだけのお人形さん。…彼が愛しているのは、絵と、絵の中のわたしだけ。現実のわたしは必要なくて」

銘は、頷きながら、彼女の言葉に耳を傾ける。

噂には、聞いていた。

彼女が元々、槇村英のモデルであったことを。

五年もの間、彼を支え続けてきた彩を。

槇村は、何があっても手放したくはなかった。
だからこそ。

糟糠の妻を捨て、彼女と一緒にになったのだ。
丁度。

レンブラントが、若き家政婦ヘンドリッキエを求めたように。

「だから、この八年間、知らなかった。誰かを心から愛することも愛されることも。何も知らずにこのまま、年を取って死んでいくんだらうなって思ってた。…銘さんに会うまでは」

彼の腕の中で。

感情の昂りを必死に堪えながら、彩は続ける。

「ずっと、誰にも言えなくて。でも、辛かった。逃げ出したかった。出来ることなら。誰かを好きになっただとしても、誰一人として、わたしを助けてなんかくれなかった」

「……」

「最初は、あんなに優しくしてくれたのに…皆、簡単にわたしを見捨てるの。わたしが、槇村英の妻だから。禁忌^{タブー}を犯してまで、付き

合うつつもりはないって…」

「…それは、判るよ。俺だって最初は、迷いがあったから」

「銘さんも、逃げ出したかった…？」

「逃げ出したって訳じゃないけど、やっぱり…いけないことだとは思ったよ」

彼はその額に口付けし、微笑んでから、そつと体を離れた。
その時。

夥しい血が、互いの半身を染めていることに気付いた。
微かな罪悪感と共に。
初めて、銘は悟った。

あの夢が、何を示唆していたのかを。

真っ白な絹布で、彩の体を拭いてやりながら。

銘は、外した腕時計を拾い上げ、時間を確かめる。

「…大丈夫？」

不安そうに、彩が訊く。

「大丈夫。飛行機の中で、一時間ぐらいは眠れるだろうから」

「シャワー、する？」

「その方がいいだろうね」

そう、答えながら。

彼はまた、彩に口付ける。

美しい体を捉え、優しく抱き締めながら。

豪奢なバス・ルームで、一緒にシャワーを浴びながら。

銘は何度も、彼女とキスを繰り返す。

温かく濡れた肌を合わせ、髪を撫でているだけで、

心はどうしようもなく満たされていく。

こんなことは、初めてだった。

彩の部屋は、三階の一角にあった。

青色のグラデーションの中にぼつりと置かれた、淡いピンクのベッド。

「別々に寝てるの？」

「そう。必要のある時だけ、彼の部屋へ行く形なの」

「必要って——」

思わず、彼はそう訊きかけた。

被せるように、彩が言う。

「彼はわたしを愛してはくれないけど、時々、奉仕は求めるの。…
判るでしょう？」

銘は、何と答えていいか判らなかった。
戸惑って、彩を見る。

彼女は微笑んで、彼の首に腕を回してくる。

「でも、もう、それもおしまいにする。わたしは、銘さんのものだから……」

それから。

彼は彩を抱き上げて、ベッドまで連れていく。

まっさらなシーツの上で、彼女と抱き合った時。

ようやく、実感が湧いてきた。

愛する女性と、初めての朝を迎えたことの。

小さな体を抱き締め、瞳を合わせると。

彩は微笑みつつ、唇を重ねてくる。

穏やかな抱擁と、優しい言葉の中で。

彼はもう一度、彩を求めた。

明けゆく空の青と、太陽の赤が溶け合っていくように。

しっかりと繋がれた心を、その感触を、何度も確かめ合いながら。

午前六時。

結局、銘は一睡もしないまま、ベッドを抜け出した。

彩の眠りを妨げないように。

気怠い体を無理に起こして、服を身に着けていく間。

銘は、彼女の寝顔をずっと眺めていた。

（このまま、離れた方がいいのかもしれない……）

静かに、ベッドの端に腰を下ろしてから。
彼はふと、そんなことを思った。

柔らかな髪を撫で、額に口付けしようとした時。
彩の小さな手が、彼の手に触れてくる。

「あ、ごめん。起こしちゃったかな」

銘は慌てて、体を離す。

「ううん。いいの」

はにかむような笑顔を、彩は浮かべた。
胸の奥が、俄かに熱くなる感触。

朝の日差しの中で、触れ合うだけの口付けを交わしながら。
銘は、確信していた。
彼女を失うことなど、考えられないと。

素裸の彩をシートごと抱き締めて、彼は言う。

「彩さん…電話してもいい？」

「うん。わたしにも、携帯の番号教えてくれる？」

「あ、ごめん。携帯、持っていないんだ」

「え、そうなんだ。じゃあ、どうしよう…」

「四日後には帰るから、店に電話して。どうせ、俺しか出ないから」

「判った」

その時。

彼は、ふと閃いた。

「向こうに行ったら、買うよ。買ったら、真っ先に彩さんに電話する」

「ほんとに？」

「うん。本当は嫌いなんだけど。彩さんのためなら」

「嬉しいな。じゃあ、わたしのを教えておくね」

彼女は手を伸ばし、アンティークなサイドテーブルの上から、青いメモ用紙を取った。

自宅の番号と、携帯の番号を書くと、銘に手渡す。

「どっちでもいいから、いつでも電話して」

「判った。向こうに着いたら、一度電話入れるよ」

「うん」

「番号決まったら、必ず連絡するから」

「うん」

「それと…」

彼は、ちょっと迷ってから、あらためて口を開いた。

「木曜日、いや、水曜の夜、また会えるかな」

彩は、黙って彼を見詰めていた。

何もかも、見透かされてしまいそうな瞳を向けて。

「銘さん…」

「うん」

「…また、会ってくれるの？」

「会いたいよ。今だって本当は…あなたといたいくらいだ」

息がかかるほどの距離にいて、瞳を合わせながら。

銘は、彼女の頬を、両手でそっと包み込む。

「待っていてくれる？ 俺が、帰って来るまで」

彩は、何度も小さく頷く。

その拍子に。

長い睫の先から、涙がこぼれた。

「心配、要らないからね」

「うん」

「必ず、電話する」

「うん」

彩は、懸命に笑顔を返そうとするのだが、涙は止まらない。
堪えきれず、彼はまた唇を重ねていく。
溢れる愛おしさに突き上げられながら。
彼女と離れる苦しさに、胸塞がれながら。

第二十二話

いたわ
労るような抱擁を解いたあと。

圭介は、葉山へ向けて車を走らせた。

横浜横須賀道路を経由して、逗子ICに降りる頃。

CDは、ジョシユア・レッドマンの”BEYOND”に変わっていた。

明の好きなアルバムだ。

その左手に縋るようにして、明は、束の間の眠りに落ちていた。

圭介の優しさと、温もりを感じながら。

そんな明を、愛おしく思う一方で。

片手でステアリングを操る彼は、複雑な気分だった。

世界的に有名な指揮者である父と、天才ピアニストの母を持つ明。
名門の肩書きは、彼女には重過ぎるのだろう。

そのせいか。

余りある才能を持ちながら、明は敢えて、ジャズ・ピアニストの道を選んだ。

都内のマンションで一人暮らしをし、日本各地で演奏活動をする傍ら、スタジオ・ミュージシャンとしての仕事に甘んじているのだった。

「お前ほどの奴がさ。ほんと、勿体ないよな…」

六本目の煙草に火を点けながら、圭介は思わず一人ごちる。

明とのG i gが終わったあと。

その演奏の素晴らしさに胸震わせながら、彼は、いつも思うのだ。
明の実力なら、海外でも充分通用するだろうにと。

実際。

日本人であり、女性であるというハンディを抱えながらも、明は成功した一人だった。

十六歳でデビューして以来、早熟の天才と称され、多くのミュージシャンに愛されていた。

クラシックからポップス、歌伴からビッグ・バンドまでそつなくこなす明は、ニューヨークでも重宝がられていた筈だ。
それなのに。

何故、生まれた土地を捨て、友人達を捨て、日本に戻って来たのだろうと。

エージエントとトラブルがあったという説もある。

彼女の我儘のせいだと陰口を叩く奴もいる。

男女関係のもつれから、コネクションを失ったという噂を聞いたりもした。

しかし。

ことの真相を知る人間は、二人しかない。

本人と、彼女のマネージャーである坂口晴男と。
さかぐち はるお

あれほど慕っている銘にすら、彼女は、自分のことを殆ど話さない。
日々の軽口と鋭い言葉の端々に、圭介は以前から、明の底知れない孤独を見ていた。

だからこそ。

彼女を理解し、支えてやりたかったのだ。

暗闇を、ヘッドライトが切り裂いていく中。

入り組んだ坂道を上がりきったところに、灰水色の古びた洋館が見えてきた。

明の母、青の生家だ。

蔦の絡まる門を抜け、車を駐車場に入れたところで、ようやく明が目覚ました。

「着いたぞ」

「うん」

彼女は圭介の腕を離し、伸びをして、物憂げに車から降りた。

それから、溜息を一つつく。

気丈に見える明だが、母親に会う時だけは、どうしても気が重くなるようだ。

暗がりの向こうに、逗子の夜景が広がっていた。

そんな、美しい景色の中で。

明はまた、溜息をつく。

その背中を、圭介は平手で叩いてやる。

「大丈夫。俺がいるだろ？」

「まあ、そうだね。一人よりはましかな」

「おふくろさん、覚えててくれるといいけどな」

「さあ、どうだか。下手すると、僕のことさえ忘れてる人だから」

そう言って。

彼女は、肩を竦めて見せた。

広いエントランスを潜ると、黒い石畳の床には、沢山の木の葉が落ちていた。

「お帰りなさいまし」

玄関の灯りを点けながら、スガが、笑顔で出迎える。

「ただいま。青はまだ寝てる？」

「もう、お目覚めですよ」

「どうしたの、これ」

「ああ。昨晩は風が強くて。一階の窓を、お嬢様が全部開けてしまわれたのですよ」

この家に長年仕える老婆が、恭しくお嬢様と呼ぶのは、明ではなく、彼女の母のことだ。

初めてこの家に来た時、圭介はそのことを不思議に思ったのだが、青に会って、大いに納得したのだった。

「へえ、一階まで降りてくるなんて、珍しいね」

「ええ、先程お紅茶をお淹れしましたけど、大層ご機嫌が宜しくて」

「ほんと」

玄関前から続く階段に、足をかけた時。

明は、思い出したように付け加える。

「スガさん、ごめん。彼の寝る部屋を用意して貰える？」

「畏まりました。明さんと、ご一緒で？」

「あ、そうか。じゃあいいや。僕の部屋だけで」

「畏まりました」

そう言って、丁重に頭を下げたあと。

スガは、圭介に微笑みかける。

「宜しゅうございますね、お若い方は」

「いや、あの、すいません。そういうんじゃないんで、俺」

当惑しながら、圭介は首を振る。

何度か一緒に来ているせいか、スガは、彼を明の恋人だと思っているようだ。

その時。

明が、にっこりして言う。

「スガさん、彼、ゲイだから。ただの友達だよ」

「は？ 芸ですか？」

スガは、首を傾げる。

「うわ、馬鹿。何言っただ！」

圭介は慌てて、明の口を塞ぐ。
その様子を。

スガは、くすくす笑いながら見ている。

「あらあら、相変わらず仲のお宜しいこと」

曖昧に微笑して、階段を上り終えたあと。
圭介は、明を睨みつける。

「何考えてるんだよ！ 婆さんにあんなこと言っなんて」

「どうせ判らないよ。スガさんは、前世紀の遺物みたいな人だから」

「だからって…」

そう、言いかけた時。

薄暗い廊下に佇む人影に、彼は気付いた。
明もまた、その視線を感じて、振り返る。

古めかしいシャンデリアの光に透ける、金色の長い髪。
ゆったりと風に靡く、アンティーク・レースとオーガンジー。
肩から腰にかけての滑らかな曲線、完璧なシルエツト。

その女性に。

とても、生身の人間とは思えなかった。

第二十三話

「…お友達？」

天上から降り注ぐような声が、彼の耳をくすぐる。

「うん。そう」

明は平然と言い、美しい声の主に歩み寄る。

「今日は、調子が良さそうだね」

青と話す時。

明の声に、普段とは違うトーンが混じること、圭介は気付いていた。

元々中性的な彼女が、まるで、少年のような話し方をする。

「そう。何だか、あなたが来るような気がして…」

「どうしたの。こんなに濡れて」

その腕を優しく取った時。

明は、彼女の服が酷く濡れていることに気付いた。

「ああ、夜、通り雨が降って。ずっと見ていたの。あんまり綺麗だったから」

「雨が好きなのは知ってるけど。もう、風邪引くだろう？」

娘を宿める父親のように言つと、明は彼女の腰を抱き、部屋へ連れていく。

そのあとを、圭介も追う。

「…明さあ」

「何？」

「俺、廊下で待つてようか？」

「いいよ別に。入ってても」

「青さん、着替えさせるんだろう？ 俺、こっちにいるから」

「あ、そうか。悪いね」

そう言いながら。

明は、奥の一室に消えていく。

幾分ペンキのはげかけた、白い柱に寄りかかると、彼は煙草を取り出した。

火を点けて深く吸い込む頃に、二人の会話が聞こえてくる。

「また、ぶつけたの？ こころも青くなってるよ」

「そう？ 気が付かなかったわ」

「これだもの。あと、裸足で歩いちゃ駄目だって。踵も切れてるし。いつも言ってるだろう？」

「ごめんなさい。でも、気持ちがいいのよ、その方が」

「それは判るけど、でも、外に出ちゃ駄目だよ。判った？」

「ごめんなさい…ねえ、お願いだから、怒らないで…」

「怒ってないよ。ただ、心配なだけ。青は、ちよつと目を離すと、何するか判らないから」

（相変わらず、不思議な親子関係だよな…）

彼女達のやり取りを聞かたびに、圭介はそう思った。

明が言うように。

青は、まるで少女のようだ。

恐ろしく無垢で、夢のように美しい、永遠の乙女。

稀有な美貌と天性の才能故に、青は若い頃から、嫌でも人目を引く女性だった。

そのため、誰もが彼女に魅了され、その関心を得ようとしたのだが、彼女の心を捉えることが出来たのはただ一人。

明の父親だけだった。

奇妙な会話を聞きながら、煙草を吸い終わる頃。

明は、彼の名を呼んだ。

「圭介。もういいよ」

彼は、慎重に煙草を揉み消して、床に出来た水溜まりに浸したのち、開け放した窓から外へ捨てた。
それから、白塗りの扉を押し開ける。

錆びた蝶番が低く唸りを上げるのと同時に。

戸外からの風が、彼の頬を掠めて通り抜けていく。

青は、天蓋付きのベッドの上で、半身を起こしていた。

病人特有の蒼白な頬に、薄らと赤い唇。

ロシア人の父譲りの、端整な顔立ち。

ゆるやかなウェーブのかかった髪は、腰近くまで伸びていて、フェルメールの絵のように静謐な美が、そこにはあった。

「…どうも」

圭介は、微かな緊張を感じつつ、会釈を返した。

彼女の姿を見ると、いつも、溜息が出そうになる。

その名の由来でもある、深い青色の瞳が、彼を優しく捕らえた。

「内藤さん、ですよ」

「ええ、そうです」

「前もいらしてたでしょう。いつも明がお世話になって」

「いえ、とんでもない」

「あ、圭介。その辺に座ってて」

明が、傍にある椅子を指差した。
彼は言われるがままに、そこに腰を下ろす。

映画に出てくるような瀟洒なベッドの端に、明は腰掛けて、母親の手をさすっている。

その手に、温もりを戻そうとしているかのように。

そんな娘の姿を、青は、微笑みながら見詰めている。

時折、明の髪を撫でながら。

やがて。

青は包み込むように、その体を抱擁する。

光がこぼれるような笑みを浮かべて。

二人の傍にいる時。

圭介はいつも、違和感を覚えた。

長年病床にある母と、それを氣遣う娘。

一見美しい光景なのに、何かが狂っている。

奇妙な不協和音を、彼の耳は捕らえていた。

三十分ほど、そうしているうちに。

青は、再び眠りに落ちてしまった。

その体を、優しく横たえてから。

明は、彼女にそっと布団を掛け直し、窓を閉めて歩く。

「じゅめん、付き合わせて」

圭介に背を向けながら。

明は珍しく、そんな言葉を口にした。

「いや、大丈夫」

彼は、欠伸を噛み殺して立ち上がる。

「眠いでしょう？」

「まあな。明も徹夜だろう？ よく持つよな」

「さつき少し眠らせて貰ったし。元々タフだからね」

「まさか。とてもタフには見えねえよ」

そう言つて、圭介が笑うと。

明は、ちよつとだけ笑顔を見せた。

窓を全て閉め、部屋の扉を静かに閉ざしてから。

明は、二階の渡り廊下を通り、その奥にある自室へ向かう。

空はすっかり明るくなり、大きな窓の向こうには、遠く海が見渡せた。

鳥のさえずりが、辺りに響いている。

降り注ぐ陽光の下、木々の緑は、より艶やかに輝いていた。

途中。

思いついたように、明が訊く。

「シャワーする？」

「いや、いいやもう。起きてからで」

「じゃ、僕もそうする」

明が微笑んで、廊下の行き止まりにある大きな扉を開けると。
外国製のコロンの匂いが、俄かに鼻腔をくすぐる。

滅多に使わない筈なのに、中は、整然と片付けられていた。

カーテンからカーペットまで、黒で統一された部屋の中央には、如何にも明らしい、簡素なベッドが置かれている。

他には、年代物のソファとマホガニーのテーブル、洋書の並ぶ本棚があるのみ。

「相変わらず、殺風景な部屋だよな」

圭介は、呆れて言う。

「あんまりごちゃごちゃ置くの、好きじゃないからね」

「何だか、ラブホみてえ」

「へえ、行ったことあるの？」

「何度かな。興味本位。どんなもんかと思って」

「巧くんと？」

「まあ、その、いろいろな」

圭介が言葉を濁すと、明はそれ以上追及しなかった。

彼に背を向けて、何の躊躇いもなく、服を脱ぎ始める。

「また、一緒に寝るのか？」

彼は、念を押してみる。

「駄目？」

「いや、別にいいけど。俺、寝言酷いから、弱味握られそうで怖いんだよな」

「大丈夫。全部メモしといてやるから」

そう言つて、彼女はくすくす笑った。

ちよつと迷つてから、圭介もまた服を脱ぐ。

明を気遣つて、背を向けるようにベッドに潜り込むと。

彼女は背後から、彼の体を抱く。

彼はまた溜息をつき、明に向き直る。

「パジャマぐらい着ろよ。一応、女なんだから」

「嫌いなんだ。苦しくなつてさ」

「素っ裸はまずいだろっ」

「下は穿いてるよ」

「まあ、お前は色気のかけらもないから、男と大して変わらないけど…」

「いいよ、抱いても」

「冗談。俺を誘惑しても無駄だって言ったよな？」

「判ってるって」

「どうせまた、安眠枕にするつもりだろ？」

「ご明察」

「ったく。お子ちゃまはこれだから」

そう言いつつも。

圭介は、明の首の下に右腕を滑り込ませる。

その胸に、彼女はぴたりと身を寄せてくる。

細い体をしっかりと抱き締めて、彼は欠伸をした。

明の温もりと、均整の取れた体の感触が伝わってくる。

（やれやれ。ほんと、無防備な奴だよ）

もう一言、文句を言っただろうと思った時。

明はすでに、軽い寢息を立てていた。

その寝顔を見た時。

彼は、何も言えなくなってしまった。

涼やかな空気と、人肌の温かさの中で。

圭介の瞼も、次第に重くなっていく。

自分の腕の中にいる、友人とも恋人とも言えない相手の額に、彼は敬意を払いつつ、口付けする。

青との不協和音を、拭い去るように。
その心の痛みを、分かち合うように。

第二十四話

午前九時三十分。

新千歳空港に、機体が降り立った時。

ランディングの衝撃で、銘は、ようやく目を覚ました。

北の大地には、抜けるような青空が広がっている。

降り注ぐ日差しに軽い頭痛を覚えながらも、彼の気は晴れなかった。果たして、修子は何と言ってくるのか。

もし、絶対に別れたくないと言われた時、自分はそれを拒否出来るのか。

彼にはまだ、迷いがあった。

しかし。

彼はすでに、彩を選んでしまった。

そのせいで。

例え、彼女を傷付ける結果になったとしても。

どれほど、責められようと。

全ての咎を、背負っていく覚悟をしなければと、銘は、心に決めていたのだ。

小さなバッグを一つ抱えて、到着口を出ると。

そこに、修子の姿があった。

ワイン・レッドのプレーンなTシャツに、細身のジーンズ。

以前彼が贈った指輪は、まだ、左手の中指にあった。

銘の姿を見つけると、彼女はすぐに歩み寄ってきた。

彼は、何と言っているのか判らなかった。

ぎこちない空気の中で。

最初に口を開いたのは、修子の方だった。

「…疲れた？」

「いや、大丈夫」

「朝ご飯は？」

「ただだけど…修は？」

「わたしもまだ。札幌着いてから、お昼と兼用にする？」

「そうだね」

一通り、会話を交わしてからも。

目に見えない壁のようなものを、彼は感じていた。

石狩ライナーに乗り、札幌に向かっている間も。

二人は、殆ど口をきかなかった。

猛烈な睡魔と、それに伴う頭痛を堪えながら、

銘は必死に、自分と闘っていた。

ややもすると、修子へ傾いてしまいそうになる自分の気持ちを修正することに。

彼は、全力を尽くしていたのだ。

そんな時。

不意に、修子が腕を絡めてきた。
そのまま、彼の肩に凭れてくる。

「…修」

「銘さん…わたし、判ってるから…」

「……」

「あれからずっと、考えてたの。わたしが悪かったんだって。ろくに連絡もしないで、自分のことばかり考えてて。離れた場所にいて、銘さんがどんなに心配してたか、やっと判った。だから…銘さんに嫌われてしまっても、仕方ないんだって…」

目を閉じて、彼女は続ける。

「ごめんなさい。今更謝っても、きつと、遅いんだろうけど…」

左手を預けたまま。

彼は、言葉を失っていた。

「ねえ…わたし、判ってるから。銘さんがどうして一人になりたいって思ったのか。もう、諦めたの。それがあなたのためだって。でも…怒らないでね。明後日までは、恋人のままでいて欲しい…昔の銘さんでいて欲しいの…わたしも、昔の自分に戻るから。銘さんのこと、大好きだった自分に戻るから…」

「…ごめん、修。でも、君のせいじゃない。俺が悪いんだ。修を嫌いになった訳じゃない。でも…もう、どうしようも…」

「判ってる。だから…謝らないで。あなたのせいじゃないもの。最後のお願いだけ、聞いて欲しいの。もし、銘さんが嫌じゃなければ…」

彼女の目から、涙が溢れた時。

銘は堪え切れず、その手をきつく握り締めた。

ほんの数時間前まで彩を抱いていた手で、修子に触れることに、彼は抵抗を感じていた。

しかし、彼女の健気さに触れた時。

その思いまで突き放すことは、どうしても出来なかった。

札幌駅に到着して、近所の喫茶店で軽く食事を済ませたあと。銘は、一時間だけ一人にして欲しいと、修子に頼んだ。

「うん、判った。駅ビルの中、のんびり見てるから」

彼女は笑って、エスカレーターを上っていく。

その後ろ姿を見送りながら、さすがに胸が痛んだが、約束を違える訳にはいかない。

その足でビックカメラへ赴いた彼は、迷わず一階の携帯売り場へと向かった。

初めての経験だったが、四十分ほどで、全ての手続きが終わった。

真新しい携帯を手に、店を出る。

交差点の角でメモを取り出し、慎重にプッシュ・ボタンを押す。すぐに、彩が出た。

「無事に、着いたの？」

上気した声が、耳元から流れてくる。

「うん。これから、彼女のアパートへ行くんだ」

「そう…」

「修子は、何もかも判ったみたいで。ただ、この三日だけは、前と同じように接して欲しいと」

「……」

「それで、全てが終わるよ。そうすればもう、俺はあなたのものだ」

通りを行き交う人々が、彼をちらりと一瞥する。

何故か、彼等が全て事情を知っているような気がして、落ち着かなかった。

「銘さん…本当にいいの？」

「いいよ。今更、引き返す訳にはいかないし。第一…」

彼は、溜息をついた。

それから、自分に言い聞かせるように話す。

「これは、彼女のためでもあるから。帰ったら、詳しく話すけど」

「うん…」

「また、暇を見て電話するよ。今日は、家にいるの？」

「多分。ちょっと、描きたいものもあるし」

「判った。じゃあ、またあとで」

やや興奮を覚えながら、終話ボタンを押す。

店員に教えて貰った通り、電源を落としてから、彼は、修子との待ち合わせ場所に向かった。

修子のアパートは、南北線麻生駅から、すぐの場所にある。
日当たりのいい、小奇麗な2LDK。

几帳面な彼女らしく、室内は整然と片付けられていた。

部屋に入り、ドアを閉めると、途端に緊張が蘇る。

恐らく、彼女も同じ気持ちだろう。

そう、銘は推測していた。

小さなリビングの床に、二人は並んで座る。
この部屋に来るのは、今回で三度目だった。

「…何か、飲む？」

彼女が、遠慮がちに訊く。

銘は、首を振りつつ微笑む。

「いや、大丈夫。さっき、珈琲飲んだばかりだし」

「そう…」

修子の胸中にも、また、葛藤があった。

目の前に、愛する人がいる。

そう思いながらも、体は動かない。

彼の胸に飛び込みたくとも、そう出来ない理由があった。

その迷いを察したかのように。

彼は、その肩を抱き寄せる。

「ごめん、修、俺…」

「謝らないで。お願いだから。泣きたくなっちゃう」

彼女は、心の揺れを隠して笑ってみせた。

溢れる涙を隠すように、彼の肩に顔を埋める。

「銘さん…好きな人、いるんでしょう？」

「…え？」

「すぐ、判った。…コロン、残ってるもの…」

銘は、思わず息を呑んだ。

たちまち、駆け上がってくる罪悪感。

反射的に体を離そうとした彼の首に、修子の両腕が回された。そのまま、柔らかな唇が重なってくる。

彩に対する思いと、修子に対する未練。

激しい葛藤が、通り過ぎたあと。

もう、抗うことなど、出来そうになかった。

何度も口付けを交わしながら、彼は、修子を求めた。

Tシャツを脱がせると、透き通るような肌が露わになる。背中のホックを外し、胸に口付けていく。

次第に、彼女の呼吸が早まっていくのが判った。

背中を掻き抱く腕。彼もまた服を脱ぎながら、体を重ねていく。久し振りに抱く恋人の体。

堪えきれずに彼女が漏らす声と、熱い吐息を感じるたび。

胸は、鋭く疼いた。

その時。

修子は突然、咎めるように、両手でその体を押しとどめた。

乱れた息のまま、彼を見上げる。

「——ごめんなさい」

興奮をぎりぎりで抑えつつ、彼は努めて優しく訊いた。

「どうしたの？」

「……」

「ごめん…嫌だったかな」

彼女の瞳から、また、涙が溢れる。

「そうじゃないの。そうじゃない…でも、もう…」

自分の背中に、じわじわと嫌な感触が上ってくるのを、銘は自覚していた。

嫌な予感が現実のものとして形となる様を、彼は、直視するしかなかった。

「…もう、わたし、銘さんに愛される資格なんて…」

「…どういうこと？」

銘を抱き寄せて、彼女は目を閉じた。

彼もまた、その華奢な肢体を抱き締める。

まさか、と彼は思った。

そして無意識に、修子の言葉の続きを想像していた。

彼が思い描くことの出来る、最悪の筋書きを。

「会ったの。本多さんに——銘さんに言われた通り。だから…」

彼女の腕は、一層きつく背中を抱く。

微かな嗚咽が、彼の耳を打つ。

一瞬。

時が、止まったかのように思えた。

その髪を、優しく撫でながら。
銘は、深い溜息をつく。

「…そうか」

途端に、全身から力が抜けていくのが判った。
その事實は、想像以上に彼を打ちのめしていた。
同時に、本多に会ったという言葉の意味を、彼は瞬時に理解した。
修子のもう、自分のものではないということ。

ショックを隠しきれないまま、彼は、修子から体を離れた。
気まずい思いで、服を着けながら。

この責任は、自分にもあると思っていた。
彼女を見捨てた、自分のせいだと。

そう思う一方で。

修子を責めるような思いも、またあった。
そんな自分の身勝手さと、救い難い現実の重さを。
嫌でも、受け入れるほかはなかった。

第二十五話

「――修」

「うん」

「少し、ここで寝かせて貰えるかな」

「…うん」

「昨日は、徹夜だったから」

「ライブか何かで？」

「まあ、そんなところかな…」

後ろめたさを覚えながら、彼は服を脱ぐ。

彼女のベッドは、いい匂いがした。

前日からの疲れのせいか、彼は、目を閉じるとすぐに、眠りに落ちてしまった。

その姿を見つめながら。

修子の手櫛で、乱れた髪を整える。

今にも、涙がこぼれそうだった。

（しっかりとしないと…この三日だけでも）

そう、自分に言い聞かせると、彼女は立ち上がる。
彼への未練を、断ち切るように。

銘の服を畳んでいる時、ポケットの何かに触れた。
手をつ突っ込んで探してみると、それは、携帯電話だった。

（銘さん、こんなの持つ人じゃなかったのに）

その存在に気付いた時。

心臓は、嫌でも高鳴った。

震える手で、彼女は携帯を開き、電源を入れてみる。
アドレス帳には何もない。

発信履歴は一件だけ。

その時間を見て。

彼女はあの一時間の間に、何があつたかを悟った。

修子は信じられずに、その真新しい携帯を見つめる。

さらに。

彼の財布を開けてみる。

そんなことをしてはいけないと、重々承知しながらも。

奥の方に、置まれた青いメモ用紙。

そこに書かれた、【榎村 彩】の文字と、二つの電話番号。

半ば確信を抱きつつ、携帯の発信履歴と、その番号を照合してみる。
間違いない。

彼の思い人は、この女性なのだ。

修子は、思わず目を瞑る。

救い難いショックと絶望とが、彼女を襲っていた。

胸の奥に、疼くような痛みが蘇る。

もう、取り返しがつかないのだと、彼女は思った。

彼は、自分が思っているよりずっと、遠くへ行ってしまったのだと。

銘が目を覚ました時。

修子は一人、パソコンに向かっていた。

電気もつけない部屋の中で。

「…修？」

彼女ははっとして、振り返る。

それから慌てて、電源を落とす。

彼は、裸のまま、修子を抱き締めた。

その胸に残る、深い傷跡に。

彼女は、唇をつけていく。

「シャワー、借りてもいいかな」

「うん」

「それから、ちょっと出掛けようか」

「何処に？」

「一度、連れて行きたい場所があったんだ」

額に口付けしつつ、銘は微笑んだ。

修子は黙って、その顔を見上げている。
その唇に。

彼は、あらためて唇を重ねた。
この三日間。

昔の自分に戻ることを、彼は、すでに決めていたのだ。

近場のロイヤルホストで軽く食事を済ませてから。
銘は修子を連れ、南北線に乗ってすすきのへ出る。
彼が向かったのは、”Steella”。
ヴォーカリスト、藤崎レイナの店だ。

分厚いドアを潜ると、すぐに、黒服が飛んできた。

「何名さまでしょうか？」

「二人です。なるべく、ステージに近い席がいいな」

「畏まりました」

グラウンド・ピアノを取り巻くように作られたカウンターに、二人は
腰を下ろす。

丸テーブルからスツールまで、黒で統一された店内。
平日だと言うのに、周囲はほぼ満席だ。

修子は、落ち着かない様子で、辺りを見渡した。

「来たことないの？」

銘は、訊いてみる。

「だって、高いって噂でしょう？……」

「確かに、安くはないかな。ミュージック・チャージだけで4000円だからね」

彼は、笑った。

運ばれてきたボトルに、手をつけながら。

「銘さん、慣れてるみたい」

「彼女とは、ちょっと付き合いがあったから」

「どんな？」

「どんなって——ほら、始まるよ」

促されて見ると、奥の扉からメンバーが現れた。

歌伴を担当するトリオらしい。

神経質そうなピアニストは、自信たっぷりな顔をして、グランドの前に座る。

BGMが止まった瞬間、演奏が始まった。

曲は、”How Deep Is The Ocean”。

西村康彦の名前を、彼は以前から知っていた。しかし。

評判とは裏腹な、酷いプレイだった。

散漫な指使い、適当なアドリブ。

明らかに、客を舐めている感じだ。

中年のドラマーは終始横を向いていて、如何にもやる気がない。
ベーシストは若い女性。

運指も音程も、いい加減極まりない。

その癖。

金のかかった衣裳を身に纏い、やけに気取った弾き方をしている。

修子が、ちらつと彼を見る。

彼女もまた、同じことを感じているようだ。
それからこっそり、耳打ちしてくる。

「…銘さん」

「うん」

「わたしが言うのはちょっとあれかもしれないけど…こんなものの？」

「まあ、最初のステージだからね。平日だし、手を抜いてるんだろ
う」

彼は、彼女にグラスを渡して微笑んだ。

その時。

西村と、目が合った。

若いピアニストは、突然、指をもつれさせた。

思いがけず、ミストーンを連発する。

明らかに彼は、カウンターにいる青年の素性に気付いたようだった。
ベーシストが、怪訝な顔をして、彼を見ている。
その後。

何とか、エンディングに持ち込むものの。
その顔は、蒼白になっていた。

刹那。

金色のスポットが、ステージの奥を照らす。
そこに。

黒いドレスに身を包んだ、レイナの姿。

もう、50近い筈なのに、その美しさは変わらない。

店内には、割れんばかりの拍手が巻き起こる。

「こんばんは、皆様。」Steelia”へようこそ。只今の演奏は、
西村康彦トリオでお送りしました」

妖艶な笑みを浮かべ、客席を見渡す彼女の貫禄に、修子は息を呑んだ。

長いシルバーのピアスが、スポット・ライトを浴びてきらめいている。

「札幌の短い夏も、もう終わり。皆様には何か、思い出がありますか？ その夏を惜しみつつ、次の曲をお届けしたいと思います。」
Summer Nite”

西村のピアノは、気合の入ったイントロを出す。
さつきとはまるで、別人のようだ。

覇気のないリズム隊を牽引するように、レイナの力強い声が響く。
Nina Simonを思わせる、絶妙なアーティキュレーション。

その歌を聴きながら、銘はあらためて思った。
彼女はやはり、本物だと。

背筋がざわめき、鳥肌が立つ。

目を閉じれば。

彼女と共に、ステージに立っていた頃の自分に帰れる気がした。音楽を愛し、夢中になっていた頃の自分に。

1ステージ目が終わると。

レイナはすぐに、銘の元へやって来た。片手に、グリーンの瓶を持ちながら。

「銘ちゃん！」

「お久しぶりです」

銘は立ち上がり、彼女としっかりhugを交わした。

「何よ、嫌な子ね。来てるなら言ってくればいいのに」

「すみません。つい数日前に決まったものですから」

「2ステから、入ってくれるわよね？」

「いや、そんなつもりじゃないですよ。今日は、レイナさんを聴きに来たのに」

「いいから入って。遠慮することないわ。うちの若い子達にも聴いて欲しいし」

そう言っ、カウンターの中に目配せする。ベースを弾いていた女性が、慌てた様子でやって来る。

「この子、ベース始めてまだ四年なの。まだただけど、最近少し判ってきたかな」

戸惑う彼女を、レイナは引き寄せた。

「カナエちゃん、こちら、郁崎銘さん。名前ぐらいは、聞いたことがあるでしょう？」

「初めまして」

彼が手を差し出すと、彼女は心底驚いたように、レイナを見返した。

「え、ほんとですか？ あの、郁崎さん？」

握手を交わす手が、震えている。

「田沼カナエです。ほんと、お恥ずかしいです。あんな演奏をお聴かせしてしまって…」

「いえ、とんでもない」

「うわ、ほんと、今日が出番で良かった。あたし、大ファンなんですよ」

「それはどうも」

感激に身を震わせるカナエを見て、レイナは微笑んだ。

「もう、五年も前かしらね。一緒にツアーをしてたのは。体を壊し

て、今は都内で活動してらっしゃるのよ。ね？」

「いや、都内でも滅多にやってませんけどね」

銘は、正直にそう答えた。

それから。

レイナの目は、隣にいる修子に向けられた。

「お連れの可愛い方は？ やっぱり、ミュージシャンなの？」

「あ、はい」

彼は、修子の肩に手をかけて言う。

「彼女、札幌在住なんです。まだ学生ですけど、素晴らしいピアニストですよ」

「まあ、そうなの？ 素敵じゃない！」

レイナの目が、一際輝いた。

当然ながら、修子は酷く慌てた。

「そ、そんな。わたしなんかまだ全然…」

銘は、それに被せて言う。

「本当ですよ。何ってったって、あの、本多俊明の愛弟子なんですから」

「へえ、本多さんの？ ああ、そう言えばこの前、ツアーでいらし

てたわよね」

その時。

カウンターの端に座っていた西村が、ぎょっとしたように振り返る。それを横目で見ながら、銘はレイナに囁いた。

「俺に演奏させて下さるのなら、彼女にもチャンスを下さいよ」

「勿論。あなたが褒めるからには、余程の腕でしょうからね」

抗弁しようとする修子を制して、レイナは言った。

「西村ちゃん、悪いけど、代わって貰っていい？」

ピアニストは、仕方ないなという風に、渋々頷く。

それを見た修子は、ますます慌てた。

思わず、レイナの腕に取り縋る。

「あの、レイナさん。わたしほんと、駄目ですから……」

「いいのよ。こういう時は、もっと自分を売り込まないと」

悪戯っぽく笑うと。

彼女は、手にしたハイネケンを小粋に振って見せる。

それを見た銘も、水割りのグラスを一気に干した。

久し振りのステージに、軽い緊張を覚えつつ。

第二十六話

休憩時間が終わったあと。

店内は再び、暗闇に包まれる。

レイナの前座として、修子がトリオを務めなければならない。

客席は、ほぼ埋まっている。

中年のサラリーマンが、年配のカップルが、冷やかな視線を送る中。

彼女は、しっかりと銘を見て、カウントを出す。

曲は、” Stella by Starlight”。

キーはG major。

彼は敢えて、店の名前の由来でもあるこの曲を選んだのだ。

ミディアムのツービートから始め、修子のアドリブからフォービートへ。

ドラムの井上は、別人のようなレガートを刻み始めた。

堅実でありながら、時に自分を際どく押してくる銘のビートに、修子は心地良く身を任せていた。

彼の紡ぐ音と、自分の弾くピアノの旋律が重なり、響き合って。

ありきたりのスタンダード・ナンバーが、緊張感溢れる一つの楽曲となる。

その恍惚を。

彼女はこれまで、何度も経験していた。

ここ数年間。

アマ・プロを問わず、いろいろなベーシストと演奏する機会に恵まれてはいたが、彼のようなベースを弾ける人間は、一人もいなかった。

た。

誰もがそれを、才能と呼ぶけれど。

その陰にある日々の努力を、彼女は誰よりも知っていた。だからこそ。

銘のベースに、誰よりも深くインスパイアされ、その音色を、心から愛しいと思うのだ。

静かな青い焰に包まれるような、慎み深いソロが終わると。

ゆるやかな流れは、そのまま銘に引き継がれる。

本気の拍手が巻き起こるのを、修子の耳はしっかりと捉えていた。思わず、胸が熱くなる。

拍手の余韻を受けながら。

銘の、ベース・ソロが始まった。

繊細な息吹を掻き消さないよう、そっとバックキングを続けているうちに。

誰もが、彼の音楽に引き込まれている手応えを感じていた。

客席は音もなく静まり返り、まるで、大きなコンサート・ホールにでもいるかのようにだった。

銘の指先が弾き出す、強靱なピッツィカート。

重厚な単音が生み出していく旋律が、持ち前のセンスと大胆なダイナミクスを伴って、微かなピアノの残響に纏わっていくうちに。

音は熱を持ち、うねり、次第に高まっていく。テクニクでもひけらかしでもない、本物の音楽が、そこにはあった。

32小節に渡る世界の中で。

彼の情熱が、繰り返し、聴衆の心を満たしていく。

この人に、一生敵う筈などないと、修子はあらためて思った。自分に、御せるような人ではないと。

銘のソロが終わり、4バースに入る直前。

割れんばかりの拍手と歓声が沸くのを、修子は当然のように受け止めていた。

バック・リフを弾き終わり、最後の一音が宙に消えたあと。

狭い店の中は、数秒の間、静寂に包まれた。

そして。

思い掛けないことが起きた。

G i gでは珍しい、スタンディング・オベーションと、長く熱心な拍手。

さすがのレイナも、ステージに出るのを躊躇うほどだった。

取り巻く熱狂の中で。

修子は、確信していた。

これは、自分の実力ではない。

井上のドラムのお陰でもない。

これこそが、彼自身の力なのだと。

彼が命をかけてきた、音楽の魅力なのだと。

思わず。

涙が出そうになるのを、彼女は必死に堪えた。

泣いている暇はない。

すぐに、歌伴が始まるのだ。

レイナが参加して、数曲をこなす。

彼女の歌に寄り添うように気を遣いつつ、彼は慎重にラインを奏で続けた。

時に慰撫し、時に囁くように。

誘惑し、翻弄し、突き放し、抱き締めるように。

生き返ったレガートと、修子のピアノのサポートを上手く調整しながら、曲全体を巧みにコントロールしていく。

その時。

彼は、自分が如何に音楽を愛しているかを、あらためて思い知らされた。

色恋沙汰とも、平凡な日常とも隔絶された、無限の世界。

またこうして演奏が出来るなら、死んでも構わない。

そんな感慨が、彼にはあった。

自分の思いがバンドに伝わり、バンドの熱狂が客に伝わり。

それがまた、拍手や歓声、熱心な視線によって還元される。

何と、素晴らしい空間だろう。

何という喜びだろう。

こんなことが、自分に出来るだなんて。

曲に集中しながらも、彼は一人、感激に打ち震えていた。

そして。

修子に、深く感謝していた。

自分を理解し、その世界に導いてくれる、若きピアニストに。

例え。

今、修子と別れたとしても。

彼女の優れた音楽性を、この一瞬を、彼は永遠に忘れることはない。恐らく。

彼女もまた、同じ気持ちだろう。

共に築き上げ、支え合ってきた経験は、お互いにとって、一生の財

産なのだから。

結局。

三部まで、二人はレイナのバックを務めあげた。
アンコールは三曲。

銘と修子が参加してから、一人の客も席を立つことはなかった。

「ほんと、びつくりしたわ。この店始まって以来よ」

そう、レイナは笑っていたけれど。

西村とカナエ、それと井上に礼を述べてから。

残って飲んでいくように勧めるレイナに丁重に詫びを入れ。

銘は修子を連れ、店をあとにした。

すすきのは、水商売の女性とそのパトロンで溢れ返っていた。

きらびやかなネオンと、美しい街並みに目を細めながら。

彼は何故だか、笑いが止まらなかった。

釣られて、修子も笑い出す。

歩きながら笑い続ける二人を、周囲は怪訝な顔で見ていたが。

彼はもう、嬉しくて仕方がなかった。

楽しくて仕方がなかった。

修子と、こうして演奏出来たことが。

連中の鼻を明かしてやれたことが。

「これでもう、大手を振ってあの店に行けるだろう？」

銘は、彼女に囁いた。

「でも、いいのかな？ 却って恨みを買ったりとかしない？」

「大丈夫だよ。オーナーはあくまで、レイナさんだから。彼女には100%気に入られたし」

「銘さんの口利きがあったから。わたしの実力じゃ…」

「そんなことない。よく、あれだけ弾けるようになったよ」

彼は微笑みつつ、近くにいたタクシーを拾う。

すこぶる、気分が良かった。

誇らしくて、仕方がなかった。

修子のことだ。

十六歳からジャズを始め、僅か三年で、プロを凌ぐ実力つけた彼女の成長が。

まるで、自分のことのように、嬉しくて仕方がなかったのだ。

麻生のアパートに戻ってから。

彼は、修子を捕まえて、一緒にシャワーを浴びた。

音楽という一線を越えたせいだ。

わだかまりはもう、何処にもなかった。

たった三日だけでもいい。

本多に再び奪われてしまう前に、彼女を自分のものにしておきたい。
だから。

その間、彼は、彩のことを忘れようと思った。
限られた期間だけでも。

目の前にいる恋人を、愛したいと思った。

彼女の部屋の、シングル・ベッドの上で。

彼はあらためて、修子を求めた。

数時間前まで奏でていた音楽のように。

二人は求め合い、深く交わった。

互いの吐息を感じ、鼓動を共有して。

絡めた指すらも、愛おしく思いながら。

第二十七話

「会場、何処だつて？」

明が、不機嫌そうに訊いてくる。

「インターナショナル東京。大ホール」

運転席の坂口晴男が、にこやかに答える。

四十二歳になる彼は、明の父の親友で、元々は青のマネージャーだった。

明がニューヨークでデビューしてからは、彼女の専属になったのだ。ステアリング前にかざした予定表を見ながら、彼は、溜息をつく。

「さすが、有名人同士の結婚披露宴だけあるなあ。役者や画家、音楽家……どえらい面子が仰山集まりよる」

「客がどんなだろうと、僕には興味もないよ」

「相変わらず、強気やな。お前の好きなセレブの仕事やん」

眼鏡のブリッジを上げながら、坂口はくすくす笑った。

やや太目の体軀を、ダブルのスーツの中に押し込めた姿は、実際の年齢よりかなり若く見える。

見かけ通りの温和な性格でありながら、業界一のやり手としても知られる彼は、決して明を甘やかさず、彼女が嫌がる派手な仕事を、平気で取ってくる。

それが。

明は、前から気に食わないのだ。

「何処がセレブよ。ああいう連中は、成金って言うんだよ」

「はあ。ほんま、言葉にうるさいやつぢやなあ。帰国子女の分際で」

「文句ならアナトリイに言ってよ。僕に日本語を仕込んだのは、彼なんだから」

「自分の爺さんに、彼言うな」

「爺さん呼ばわりすると怒るんだもの」

「ま、確かに爺さんって感じはせえへんなあ。イケメンやし」

「まだ六十二。現役バリバリだよ」

「今、何処に勤めてはるん？」

「慶応と東京外語大。講師だけどね」

「へえ、格好ええなあ」

「坂口さんも間違いなく、孫命まろいのちの爺さんになるね」

「アホ言つな。うちの茉莉はまだ六つや」

「二十年後には二十六だよ。子供の一人や二人いたっておかしくないさ」

そんな話をしながら。

車窓を眺めて、彼女は溜息をつく。

漆黒のスーツに身を包んで。

「…明あ」

「何？」

「幾ら裏方でもなあ…も、ちょい、色っぽい格好してもええんちゃう？」

「冗談。ホステスじゃあるまいし。これで充分」

そう言うつと。

明は、坂口の胸ポケットに手を突っ込んだ。

「あ、こら。何すんねん」

「いいじゃん。一本だけ」

「何言うてんねん。これから人前で演奏すんのに、煙草はあかん」

「坂口さんさあ、僕より胸あんじゃん」

「やめ！ 触んな！ この変態！！」

彼が必死に抵抗するので、明は、一服するのを諦めた。
悔し紛れに、横目で睨んでやる。

「ふん、ケチ」

「誰が！ ケチはお前やん！」

「何でさ」

「煙草ぐらい、自分で買ったらええやん」

「貰うのが好きなんだって」

「味に変わりはない」

「いや、それが違うんだなあ」

「は！ もう、意味判らんわ…」

呆れた坂口が、もう一度溜息をついた時。

丁度、ホテルの前に着いた。

きらびやかなエントランスを抜け、駐車場に車を止める。

「よお」

明が振り返ると、圭介が、スーツ姿でバイクから降りてくるのが見えた。

テナーのフライト・ケースを背負ったまま。

「何やお前、その格好で来たん？」

「いや、その、車出すの面倒で」

「アホ。転んだら、楽器潰れてまうやろ」

「慣れてますから。全然余裕っすよ」

「はあ、どいつもこいつも」

早足で歩きながら、坂口がぼやく。
その後ろに、明と圭介が続く。

「あとの面子は？ 控え室判つとらんのとちゃう？」

「吉住さん達はもう、先行ってますよ。セッティングもあるんで」

「譜面合わせは四時から言うてはったん。早よなったんかいな」

「ま、俺と明は手ぶら同然ですから。楽させて貰いますよ」

ヘルメットを脱ぎながら、彼は、明に向かって微笑んだ。
彼女は、呆れたように言う。

「何言ってるの。僕はまだしも、圭介はすることあるでしょう。リード合わせとか」

「そんなの、一分もかかんないって」

「どうでもええけど、あんじょうやりや。恥かかすんやないで」

二人は思わず、顔を見合わせる。

大口の仕事だけに、さすがの坂口も、気合いの入りが違うようだ。

今日は、弦入りのフルバンドでの営業。

ヤマハのフルコンに向かいながら、明はひたすら、欠伸を噛み殺していた。

セレモニーのあと、延々と演奏をさせられながら。

成り上がりの演歌歌手や、音程の取れないアイドルの歌伴をする。

その間。

長い髪を後ろで纏め、男物のスーツに身を包んだ彼女のことを、女性と見抜いた客はいなかった。

ただ、一人を除いては。

休憩時間。

彼等バンドマンは、ホールの片隅にある円卓で、好きに飲み食い出来るようになっていた。
そこへ。

「あなた、ひょっとして、飯田明さん？」

突然、背後から声をかけられた。

「え？」

明は、驚いて振り返る。

そこに。

彩の姿があった。

「やっぱり。最初に見た時から、そうじゃないかって」

他のメンバーが、怪訝な顔をしていたので。
カクテルドレス姿の彼女の腕を、明はそっと掴んだ。

「向こうで話しましょう」

そう言いながら。

明は内心、不思議に思っていた。
彩が、自分に声をかけてきたことを。

（何のつもりだろう。自分から、僕に話しかけてくるなんて）

ドアに近い一角まで来ると。

彼女はあらためて、彩に向き直る。

「ねえ、誤解しないでね。わたし、お仕事の邪魔するつもりじゃ…」

「それは、判ってますよ」

明は、努めて穏やかに言った。

ピンクのショールを羽織った彩は、見違えるばかりに美しかった。
その左手に、大きなルビーの指輪が光っているのを、明は見逃さなかったが。

「でも、あそこで銘さんの話をされると困るんです。まだ誰も知らないことだし」

「ごめんなさい。そんなつもりじゃないの。ただ、あなたとお友達になりたくて…」

「申し訳ありませんが、お客さんとプライベートな付き合いはしない主義なんです」

「そうなの…」

彩は、長い睫を伏せた。

美しく磨いた爪で、無意識に髪を弄ぶ。
その様子を見て。

明は、彼女のことを、少しだけ気の毒に思えた。

「…銘さんは、今、札幌に行ってますよ」

「そうですね」

「よく知らないけど…多分、あなたのためでもあるんじゃないかな」

「そうかしら」

「修子さんとは、相思相愛だったから。もう、三年も前から。その思いを振り切るのは半端なことじゃないと、僕は思います」

「…明さん」

「はい」

「あなたも…軽蔑してる？ わたしのこと」

「僕は基本的に中立ですよ。敵でも味方でもない。興味ないって言った方がいいかもしれないけど」

「でも…」

「心配要らないです。こういうことは、あなた達にしか判らないことだから」

そう言つて、微笑んだ時。

「明！ 出番だぞ！」

圭介が、遠くから呼ぶ声を聞いた。

「はあい！」

元気に返事をしながら。

明は、肩を竦めてみせる。

「すみません。もう戻らないと」

「あ、ごめんなさい。休憩中だったのに」

「まあ、あんまり気にしないで下さい。美術界は判らないけど、この業界じゃ別に、珍しいことじゃないから。それに…」

「それに？」

明は、彩を引き寄せると、その耳に囁いた。

「…僕も、そうなったことがあるから。銘さんと」

その言葉に。

彩は、はっと身をこわばらせる。

咄嗟に、彼女を抱き寄せると。

その額に、明は口付けした。

共犯者としての口付けを。

それから。

軽やかに踵を返し、ステージに向かう。

ピアニストの顔に戻って。

明の華奢な後姿を、彩は、呆然と見送っていた。
しかし。

その言葉が嘘だとは、到底思えなかった。

第二十八話

札幌で迎えた、二日目の朝。

空は、相変わらず晴れていた。

明るいい日差しの中、トーストを齧りながら、銘は、新聞に目を通している。

「へえ。ビル・スタインバーグのカルテットが来るんだ」

「そう。それ、凄く評判いいみたいね」

珈琲を淹れつつ、修子が答える。

「このメンバーで4500円は安いよ。修、行ってご覧。絶対損はしないから」

「やっぱり？　じゃ、今日チケット買っておこうつと」

「何より、バックが凄い。一流揃いだな。エド・ハミルトンがベース、ダグラス・コナーがドラムか。ピアノはショーン・マックウェルだし」

「ベースとドラムは判るけど、ピアノの人だけ聴いたことないの。どんな感じ？」

「若い人だけど、スタイルは結構オーソドックスだよ。俺は好き。修の好みじゃないかな」

「ふうん。良かった。ますます楽しみ」

「それにしても、ビルが日本に来れるようになるなんて。何だか信じられないよ」

「一緒に演奏したことあるの？」

「そりゃあもう。彼は、マンハッタン・ミュージック・スクールの同期だし」

「え、そうなの？」

「そう。俺が最初に惚れ込んだサックス奏者でね。当時から、滅茶苦茶上手かったよ。でも、なかなかジャズの仕事が見つからなくてその後、ジュリアード音楽院に進学して。細々とスタジオで食ってるよなんて言ってたのに。そうか、ついに一枚看板になったんだな」

社会面の下に並んだ大きな広告を眺め、彼は、感慨深そうに目を細めている。

その横顔を、彼女は複雑な思いで見詰めていた。

「…ねえ」

「うん」

「前から、思ってたんだけど」

問いかけながら。

修子は、テーブルの上にコーヒークップを置く。

「何？」

「銘さん…復帰する気持ちはないの？」

「プロとしてってこと？」

「うん…」

彼は、ちょっと考えてから、カップに口をつける。

「したくないって言ったら嘘になるけど。ただ、やる以上は、自分の病気にかこつけて、中途半端なことはしたくないからね。前みたいに、ステージに穴を開けるのも嫌だし」

「うん」

「正直、一時は完全に諦めてた。丁度、修に会ったあたりはね」

「……」

「でも…この前、明と二人で演奏したり、昨日みたいなことがあったりすると。やっぱり、血が騒いでくるよ。俺にはこれしかないって。これしか出来ないんだって」

彼は、テーブルの上で、長い指を組む。
それから、ふと視線を落とす。

「…修とのことを一度白紙に戻したのも、そういうことが頭にあつたからだよ。いつまた倒れるか判らない。そんな状態で、家族を持つ自信が、今の俺にはないし。それに…万が一何かあった時、修に

これ以上、悲しい思いさせたくないんだ。我儘かもしれないけれど……また音楽やって、ステージの上で死ねたら本望だよ」

その言葉を。

修子は、胸が潰れる思いで受け止めていた。

（でも——銘さんが別れる決心をしたのは、あの女性のためでもあるんでしょう？）

そう問い詰めたい気持ちを、彼女は堪えていた。最後の二日間を、つまらない嫉妬や疑惑で台無しにしたくはなかった。

忘れよう。

携帯のことも、顔すら知らない女性のこと。今はただ、目の前にいる彼だけを見ていよう。

彼女は必死に、そう言い聞かせていた。

南北線で駅まで出て、石狩ライナーで小樽へ向かう。

新しい車両は、山の手線のような横並びの座席だ。

琴似を過ぎると、乗客は誰もいなくなった。

やがて。

海岸沿いに差し掛かり、車窓が海の青に満たされると。

二人は子供のように、並んで窓に見入った。

美しいブルーのグラデーションが、視界一面に広がっている。

ここを通るたび。

誰もが、その色に惹き込まれてしまうのだ。

「ほんと、綺麗。バスでは何回もあるけど、電車で来たのは初めて」

「高校生の頃に一度だけ、小樽の小さなライブハウスで演奏したことがあって」

「それで知ってたの？」

「そう。ウッド・ベース抱えて、電車に乗って。この風景を一度、修に見せたくてね」

そう言つて、彼が微笑むと。

修子はそつと、手を握ってくる。

左手の中指にはまだ、あの指輪があった。

銘は、彼女の手を取って、指輪に触れてみる。

かなり瘦せたのか、それは、簡単に回るようになっていた。

「…修」

「うん」

「…ごめん。こんなことになって」

「いいの。わたしも悪かったし。だから…謝らないで」

彼の心の揺れに気付いて、修子は、無理に笑顔を作つて見せた。

「明日、空港に行くまで、わたし…頑張るから。その気持ち、取っておいてくれる？」

その健気さに。

彼の胸は、鋭く痛んだ。

しかし。

今更、引き返せる訳もない。

頷きながら、銘は、その指に指を絡めて握り締める。
修子も目を伏せたまま、握り返す。

「…修」

「うん」

「何か、欲しいものはない？」

「え？」

「君に、プレゼントしたいんだ」

「いいよ、そんなの…」

「何でもいいよ。最後だから、何かしてあげたいんだ」

「でも…」

「ほんとに。気持ちだから。遠慮しないで」

彼女は、しばらく悩んでいるようだった。

それから、おもむろに口を開く。

「…じゃあ」

「うん」

「札幌に戻ってからでもいい？」

「いいよ」

「銘さんに、買って貰いたいものがあるの。一つだけ」

「判った」

「あと…もう一ついい？」

「いいよ、何でも」

「お金では、買えないものだけど…」

「うん」

そこで。

彼女は一瞬、言い淀む。

それから。

意を決したように、口を開いた。

「言葉だけ、頂戴。嘘でもいいから。わたしのこと——好きだ
つて…」

そう、言いかけた時。

彼女の目から、不意に、涙が溢れた。
それを見て。

彼は、堪え切れずに、修子をきつく抱き締める。
しばらくの間。

二人は黙って、身を裂かれるような辛さに堪えていた。

あの日。

走って、彼女を追いかけた夜。

あの胸の痛みを、彼は思い出していた。

初めて、修子に思いを伝えた時のことを。

それがまさか、こんなことになるなんて。

彼には、信じられなかった。

でも。

もう、どうすることも出来ない。

涙を堪えながら、彼は言う。

「――…好きだよ、修」

彼女が答えようとすると。

銘は、唇を重ねてくる。

束の間の口付けのあと。

彼の声は、掠れていた。

「嘘なんかじゃ、ないからね」

涙を拭いながら、何度も頷く彼女に。

彼はまた、口付けする。

その心は、二つに引き裂かれていた。

修子への未練と、彩への思いに。
でも。

今はもう、どうすることも出来ない。

平日にも関わらず、駅前には観光客の姿があつた。

海に向かう坂を下っているうちに、修子は、そつと手を繋いでくる。
その温もりが、慎ましが愛おしかった。

運河まで出ると、爽やかな海風が吹き抜けてくる。

仲睦まじく歩く二人の姿は、嫌でも目立った。

広い遊歩道には、人が溢れている。

絵を描く老人、売る青年、大道芸人まで。

ストリート・ミュージシャンの姿もあつた。

ギターやハーモニカを鳴らす日本人が多い中。

一人だけ、コントラバスを弾いている青年がいた。

浅黒い肌に黒い瞳をした、南米系の若者だ。

彼の前で、銘は、足を止めた。

バッハの”S a r a b a n d e f r o m s u i t e N o . 5

”を見事に弾き終えた彼は、遠巻きに眺めている聴衆に向かって、
深々とお辞儀をする。

その前で、二人は並んで拍手をした。

青年は、白い歯を見せながら、はにかんだ微笑を浮かべる。

足元に置かれた箱に、チップを入れようとした時。

銘はそこに、小さなアルゼンチン国旗が立ててあることに気付いた。

「Usted tiene buenas habilidades de la música! (君には、音楽的才能があるね!)

」

いきなりそう言うと。

銘は、彼に握手を求めた。

咄嗟のことに驚きながら、青年も笑顔を返す。

「Gracias. Tocas algún instrumento musical? (ありがとう。あなたは何か楽器をやるの?)」

「Si, toco el contrabajo, también (ああ。俺も、コントラバスを弾くんだ)」

「No me digas! (え、ほんとに?)」

目を丸くする彼に向かって、畳みかけるように言う。

「Le importa si juego su instrumento? (楽器を触っても構わない?)」

「No, para nada! (ええ、どうぞ!)」

青年の許可を貰ってから。

銘は彼のベースとアルコを借り、演奏を始めた。

曲目は、ピアソラの「Adios Nonino」。

銘が奏でる重厚な弦の音色が、運河沿いの煉瓦倉庫まで穏やかに響き渡る。

行き交う人々も足を止め、彼の演奏に聴き入っているようだった。

目を閉じて、演奏に集中する彼の姿を、その指先を見つめながら。

修子は、胸の奥が俄かに熱くなるのを感じていた。

そして、気付いていた。

彼を、彼の音楽を、自分がどれほど愛しているか。

その優しい調べに包まれながら。

自分にとって、銘は初めから特別な存在なのだと。

かけがえのない相手なのだと。

今更のように、思い知らされたのだった。

第二十九話

演奏を終えた時。

聴衆から、拍手が巻き起こる。

目を開けた銘は、自分が多くの人々に囲まれていることに気付いて驚いた。

それから。

青年が、感激に打ち震えている姿が、目に飛び込んできた。

「Maravilloso! (素晴らしかったよ!)」

今度は、彼の方から握手を求めてくる。

「Soy Jose Carlos Fernandez. Mucho gusto. Como se llama Usted? (僕はホセ・カルロス・フェルナンデスだよ。あなたは?)」

「Encantado, Jose. Me llamo Mei. Mei Ikuzaki (宜しく、ホセ。郁崎銘だよ)」

「No es posible! (嘘だろう?)」

その名前を聞いて。

青年は、飛び上がらんばかりだった。

「Que buena bajista! Tiene arte. Me alegro de verte! (凄いベーシストだと思った! もう芸術の域ですよ。会えて嬉しいです!)」

銘は、笑顔でそれに応える。

「Muchas gracias. Es muy bien, atractor (ありがとう。素晴らしい楽器だね)」

「Denada. Me mero por su musica! (どういたしまして。僕はあなたのファンなんですよ!)」

二人が楽しそうに話している姿を、修子は離れた位置から眺めていた。

自分の知らない銘が、そこにはいた。
音楽家としての彼は、修子にとってあまりに眩く、遠い存在のように思えた。

しかし。

それは、束の間だった。

「修! ごめん!」

青年と別れると、彼はすぐに走ってきた。

「楽器みたら、つい、弾きたくなって。ほったらかしにしまったね」

「ううん。それはいいんだけど…」

修子が振り返ると。

青年はにこやかに手を振って、何か叫んでいた。

銘も、笑顔で手を振り返す。

「何て言ってたの？」

「素敵な奥さんに宜しく」だって。調子のいい奴だよ」

そう言つと。

彼は微笑みながら、修子の手を握ってくる。

「さ、行こうか。遅くなっちゃったな」

暖かい日差しに包まれ、二人、並んで歩いている間。
修子は、明が以前言っていた言葉を思い出していた。

（銘さんはさ、ちょっと距離を置いて後ろを歩く癖があるでしょう？でも、それって、何かあった時、すぐに手を出せる位置なんだよね。本多さんは、ずかずか先を行って、振り返って待ってる感じ。圭介は、僕が転べば一緒に転ぶようなところがある。そう思わない？）

確かにそうかもしれないと、修子は思っていた。

今、一緒に歩いているのが本多なら、彼は自分のことに夢中になつて、先を行ってしまうだろうと。

自分と歩く時、銘はいつもやや後ろにいて、エスコートするようにそつと腕を回してくる。

それが、いつの間にか当たり前になっていたのだ。

「あ、修。ヴェネツィア美術館行ってみようよ」

「いいけど。あそこって、高いものしかないんだよね」

「まあ、そう言わず。どのみちこの辺は、ガラスばかりでしょう？」

「どうせなら、北一硝子の方が見るとこあるよ」

「そうか。じゃ、そっちにしよう」

見上げるたびに、銘は必ず微笑み返してくる。

周囲にどれほど若い女性がいても、自分だけを見詰めてくれる。その優しさが、嬉しかった。

同時に、辛かった。

もう二度と、彼とこんな時間を持てなくなるのかと思うと、悲しみに押し潰されそうになる。

しかし。

彼女はその辛さに、必死に堪えていた。

そして、何とかこの二日間を乗り切ろうと思っていた。

通り沿いにある、小さなイタリアン・レストランに入ってから。

修子は、あらためて訊いてみた。

「銘さん、スペイン語出来るんだ」

「簡単な話ならね」

「へえ。知らなかった」

「聞いている通り、いい加減だけど。正式に習った訳じゃないから」

前菜のスモーク・サーモンを取り分けながら、彼は笑った。

「英語が話せるのは知ってたけど」

「俺が通ってた先生のところには、中南米から来た奴が多くて。そこで覚えたんだ」

「ふうん。タンゴも習ってたの？」

「そう。何でもやらされた。クラシック、ジャズ、ロカビリーまで一通り。あと、知り合いの店にバンドネオンが入ってて。そこでバイトしてたし」

「凄いな。銘さんって」

「少しは見直した？」

「いつも、敵わないって思ってる」

若いウェ이터が、ペスカトーレの皿を前に置くと。
修子はそれを取り分けて、銘に渡す。

「ありがとう」

「どういたしまして」

「正しい日本語講座だな、まるで」

そう言つて。

二人は、顔を見合せて笑つた。

「…これから、どうする？」

修子が訊いてくる。

「何処かまだ、見たいところはある？」

「ううん、もう一通り見たから」

「じゃ、もう少しぶらぶらして。それから札幌戻つて、修の欲しいものを買に行こうか」

「うん」

「予算が判らないから。先に銀行寄つて…」

「あ、大丈夫。そんなに高いものじゃないから」

修子は、慌てて首を振る。

「そうなの？」

「うん。でも、銘さんに買って欲しいの」

「そうか。でも何だか、ほっとしたような、複雑な感じだな」

彼はそう言って、くすくす笑った。

出来ることなら。

このささやかな時間が、いつまでも続いて欲しい。
銘という間。

修子はずっと、そう思っていた。

今なお、胸の奥深くへ残る、彼への想いを封じ込めながら。

第三十話

小樽から札幌へ戻る時。

高速バスのターミナルからずっと、二人は手を繋いでいた。緑なす山を、バスが駆け抜けている間。

修子は彼に寄りかかり、そっと目を閉じていた。眠っている訳ではなかった。

ただ、その温もりを感じていなかった。そして。

記憶に焼き付けようとしていた。

何れ失われてしまう、この日の彼の姿を。

再び南北線に乗り、中島公園駅へ向かう。

繁華街からは、大分離れた場所だ。

修子が何処へ行こうとしているのか、彼には見当もつかなかった。

しばらく歩いているうちに。

目の前には、YAMAHHAのビルが見えてきた。

彼女の目的地は、どうやら、ここのようなのだ。

「…修」

「うん？」

「まさか、グラントとか言わないよね？」

念のため、彼は訊いてみた。

修子はくすくす笑って、彼の手を引く。

「そんなの、うちのアパートに置けないでしょう」

「それはそうだけど」

「心配しないで。大きいものでも、高価なものでもないから」

エントランスを潜ると、彼女は迷わず、小物を売っているフロアへ向かう。

それから。

銘に向かって、微笑んだ。

「これが欲しかったの」

修子が指差したのは、長い鎖のついた、小さな銀色の音叉だった。値段だつて、1000円ぐらいのものだ。予想が外れた銘は、拍子抜けした。

「え？ 本当にこれで…」

そう言いかけてから。

彼ははつとして、口をつぐんだ。

何故修子がそれを選んだのか、その理由に思い当たったからだ。

「…判ったよ」

彼は、その音叉を二つ手にした。それから、修子に微笑んで見せる。

「どうせなら、お揃いにしよう」

レジに向かう銘の後ろ姿を、彼女は黙って見詰めていた。

昔から、彼にはそういう部分があった。

何も言わないのに、こちらの思いを察してくれるようなところが。

自分と彼とは、どうしても響き合うのだろう。

どうしてこうも、通じ合えるのだろう。

そう思った途端。

涙が、溢れそうになる。

国道沿いを歩いて、すすきのへ戻る時にはもう、日はすっかり落ちていた。

賑やかな道則を、二人はただ、手を繋いで歩いた。

何も言わず、瞳を合わせることもなく。

それでも。

お互いの想いだけは、通い合っていた。

繋いだ手を通して。

その温もりを通して。

明日の今頃はもう、彼は東京へ戻ってしまう。

自分の知らない、誰かの元へ行ってしまう。

幾ら考えないようにしても、そのことが、頭から離れなかった。

この手はもう、自分のものではないのだと。

二度と、彼を取り戻すことは出来ないのだと。

胸に込み上げてくる悲痛な叫びを、彼女は必死に振り払おうとした。そして。

銘もまた、同じ思いだった。

本多に会うことで、彼女は、彼の元へ戻る決心をしたのだろう。そしてそれは、自分のせいだと。

実際に修子に会い、想像以上に心が揺らぐのを感じながらも、彼は、決して引き返せないと思っていた。

東京で待つ、彩のために。

そして、修子の将来のために。

「…銘さん」

「うん」

「お腹、空かない？」

「言われてみれば、もう夕飯時だね。修は？」

「ちょっとだけ」

「何処か、いいところある？」

「ビヤホールみたいなところでいい？」

「いいよ。少し、飲んで帰ろうか」

「うん」

修子は微笑んで、彼の手を引く。

それから、ロビンソン百貨店の8Fにあるレストランへ向かう。
案内されたのは、駅前通りの夜景を見渡せる、カウンスター席だった。

生ビールで乾杯したあと、軽くつまめるものを頼む。

酔いが回るにつれ。

彼女は、いろいろなことを彼に打ち明け始めた。

これまで、銘には絶対に言わなかったことを。

「わたしね、ずっと、サークルの先輩に口説かれてて…」

「え？」

「もう、どうしても嫌になって…だから、銘さんに電話したりしたの」

「ああ、あの、夜中に電話寄越した時？」

「そう。銘さんと婚約してるって言っても、全然本気にしてくれなかったから。それで…」

「そういうことだったのか」

彼は、あの夜の自分の態度を思い出していた。

真夜中にかかってきた一方的な電話に、酷く腹を立てたことを。
しかし。

彼女には、彼女なりの理由があったのだと。

この時、彼は初めて知ったのだ。

「あと、バイト先とか講義中は、携帯厳禁で。なかなか、かけれなかったの」

サラダを取り分けながら、彼女は俯く。
長い睫を、そつと伏せるようにして。

「…ごめんね。何だか、言い訳ばかり。もう、どうしようもないのね」

そう言って、懸命に笑顔を見せようとする。

「はい。お野菜も取らないと」

「ありがとう」

「食事には気を付けてね。銘さん、結構好き嫌いあるから」

「そうでもないよ」

「嘘ばかり」

「ほんとだって」

「じゃあ、この牡蠣入れてもいい?」

「それは駄目」

「ほら、あるじゃない」

「牡蠣は駄目だつて。フランスで中^{あた}つて以来、食えないんだ」

「へえ、本場なの？」

「ツアー中だったから、体力が落ちてたんだろっ」

「勿体ないな。屋台なんかで食べられるんでしょう？」

「そう。生牡蠣は、フランスの消費量がトップだつて話だよ」

何気なく、そんな話を振った時。
突然。

彼女は、声のトーンを落とした。
それから。

カウンターの下で、銘の手をそつと握ってくる。

「—— 銘さん」

「うん」

「もし、もしね、わたしが…」

その時。

背後の学生が歓声を上げた。

そのために、彼女の言葉は途中でかき消されてしまった。

彼は、修子の肩を抱くようにして、顔を近付ける。

「ごめん。聞こえなかった。何？」

「…、辞めたら——」

「え？」

「…大学、辞めたら怒る？」

彼は、耳を疑った。

言葉を失ったまま、ただぼんやりと、彼女を見詰める。

「…どういう、こと？」

「ごめんなさい、何でもない」

彼女は急に、体を離れた。

にこやかに笑いながら。

「気にしないで。何言ってるんだろう、わたし…」

彼女は、握った手を離して立ち上がる。

動揺を押し隠すようにして。

「ごめん、ちょっとトイレ行ってくるね」

「うん」

そう、答えながら。

彼はたちまち、不安に陥った。

戸惑いながらも、彼は考えた。

修子が言おうとしていた言葉の続きを。

気を落ち着かせようと、煙草を探っている時。

彼は、携帯の存在に気が付いた。

見ると、不在着信が12件。

全て、彩からだった。

修子という間も、彼は、彩へ何度か電話を入れていた。
しかし。

彼女の携帯は、いつも留守電になっていた。

そのたびに彼は、諦めて電話を切っていたのだ。

「ごめんね、待たせて」

修子が戻ってきた時。

彼は、平静を装いながら、立ち上がる。

「何処だった？」

「あ、あそこのドア」

「判った」

微笑みつつ、席をあとにしたものの。

胸に、微かな痛みが走った。

個室の中から、彩の携帯にかけ直す。
三度目のコールで、彼女が出た。

「銘さん？」

「あ、ごめん。気付かなくて」

「ううん。こっちこそ、ごめんなさい。何度もかけて」

「なかなか、繋がらなかったから」

「今日、パーティーだったの。槇村の代わりに招待されたから」

「あ、そうだったんだ。道理で」

「そう。そこで…意外な人に会ったんだけど」

「誰に？」

「…明さん」

「明に？　へえ、バンドが入ってたんだ」

「そう。それで——」

彼女は何故か、言い淀む。

「明さんから、聞いたんだけど…」

「何を？」

「……」

「あいつ、また何か余計なことを？」

彩は、答えない。

そのために。

彼は一層、そのことが気になり始めた。

「…何て言ってたの？」

「……」

「彩さん？」

「…ごめんなさい。何でもないの。ただ、あなたが札幌に行ってるって」

「本当にそれだけ？」

「あと…お客さんとは友達になれないって言われた」

「ああ、それはあいつのポリシーだからね。気にすることないよ」

「それだけ。ごめんなさい、長くなっただしょう？」

「また、あとでかけるよ」

「もう、遅いから。気を遣わないで。修子さんと一緒にいてあげて」

「…判った」

「おやすみ、銘さん。着いたら電話して」

「うん、そうするよ。おやすみ、彩さん」

そう言って電話を切ったあとも。

何やら、腑に落ちないものを感じていた。

修子といい、彩といい。

何か自分に、隠しごとをしているような気がしてならなかった。

第三十一話

「なんや、明。えらい大人しいな」

「そんなことないよ」

「悪いもんでも食ったんとちゃう？」

「何言ってるの。坂口さんと一緒にしないで欲しいな」

そう言って、笑ってみせたものの。

明はいつになく、気が塞ぐのを感じていた。

（どうして、あんなこと言ってしまったんだろう。よりによって、あの人に）

さつき。

彩と交わした会話が、鮮やかに蘇る。

誰にも話さないと約束した筈なのに。

どうしてあかも簡単に、銘とのことを話してしまったのだろう。自分らしくない、と、明は思った。

嫌でも、溜息が出る。

首都高は、相変わらずの渋滞。

真っ暗な空から落ちてくる陰気な雨を、彼女はしばらくの間、無言で眺めていた。

「…あのさ、坂口さん」

「ん」

「誰かに嫉妬するって、どういう感じ？」

「どういう感じって？」

「苛々するとか、癢に障るとか、そんな感じ？」

「いや、まあ、人によるんやろうけど。妙に腹立ったり、意地悪してやりたなったり」

「それで？」

「相手にダメージ与えて、自分が何とか優越的な場所へ立ちたい思ったり」

「なるほど」

「でも、岸田秀が言うとなんな。嫉妬というのは、相手に対する尊敬の念がないと成立せえへんって」

「うんうん」

「どうでもええ奴やと、最初から勝負にならんやろ？ 敵わん部分があるからこそ、嫉妬になるんやて」

「へえ」

「…って、何や、明。そういう目にでも遭^おつてんの？」

「いや、そうじゃないけど。ちょっと訊いてみたかっただけ」

怪訝な顔をしている坂口から目を逸らし、明は再び車窓に目をやった。

ようやく、気持ちの整理がついたような気がしたからだ。

（僕の時とは違い、銘さんは彼女に本気になっている。だからか…）

窓に映る憂い顔は、奇妙に歪んでいて、とても自分のものとは思えなかった。

その向こうに透過するヘッド・ライトに目を細めながら。

あの夜も、こんな雨だったなど、明は思った。

丁度、三年前。

ある事件をきっかけに、明はニューヨークから日本へ戻ることにになり。

そこで、日本式コマーシャルリズムの洗礼を受けることになった。

大手のレーベルと契約が決まったあと。

彼等が要求したのは、彼女の美貌を前面に出してのジャケット撮影。それと、有名ミュージシャンとの共演。

明は当然、これを拒絶した。

自分がやっているのは音楽であって、演奏者自身の映像など関係ないだろうと。

さらに。

共演者のネーム・バリューではなく、自分自身の音楽を売りにしたいと。

明がそう異議を唱えると。

担当者は、即座に激怒した。

売れるCDを出したいなら、黙って言われた通りにしろと。
綺麗なねえちゃんのジャケットなら、日本人は皆、喜んで買うのだと。

中身なんかどうでもいい。

演奏が良からうが悪からうが、そんなことは関係ないと。
イメージあるのみだと。

無造作に組んだ脚を、明は盛んに動かしていた。

こんな場所にいることさえ、汚らわしいと思った。

隣席の坂口が、必死に目配せするものの。

怒りは、収まりそうになかった。

「じゃあ、僕には無理ですね。他を当たって下さい」

「何言ってるんだ。最初からそういう条件で、うちと契約したんだろ
う？」

「僕はミュージシャンです。体が売りのタレントじゃあるまいし、
そんなこと出来るもんか」

この時点で。

明はついに、席を蹴って立ち上がり。

契約はご破算となった。

帰りの車の中で。

坂口はひとしきり説教した。

日本には、日本のやり方があるのだと。

しかし彼女は、聞く耳すら持たない。

「あんなあ、明、頼むわ。そんな我儘言うてたら、何処でも使ってくれへんで」

「いいよ、別に。それで結構。何が悲しくて、あんな連中に頭下げなきゃならないの？」

坂口はおろおろしたけれど。

明は、どうしても納得がいかなかった。

自分が売れるためなら、手段は選ばないというやり方に。何より。

坂口が席を外した、ほんの僅かな隙に。

自分と寝ると、遠回しに言われたことが気に食わなかった。

娼婦じゃあるまいし、と、明は思った。

体を売ってまで、CDなど出したくはなかった。

その後。

自分が正しいと思う道で行くしかない、明は坂口を説得し。

レーベルとの専属契約に頼ることなく、フリーのミュージシャンとして活動することに決めた。

しかし、そこにも問題はあった。

聴衆は、ネーム・バリューでしか集まらない。

ニューヨークでデビューした頃は、新進気鋭の新人と持て囃されていた明だが、日本ではまだ無名同然だった。

そこで。

坂口は、あらゆるコネを駆使して、方々に頭を下げ、そこそのミュージシャンを集めては、破格のギャラと待遇を約束して、明と組ませた。

それに関しては。

さすがの彼女も、口答え出来る立場ではなかったのである。

しかし。

その夜、”Riot”での演奏は、散々だった。

年寄り連中のいい加減なサポートと、やる気のない態度。

彼等の出す舐めきった音に、明はすっかり萎えていた。

やり手と言われる坂口が、ありとあらゆるつてを頼って、自分のためにかき集めてくれたメンバーではあったけれど。

この一ヶ月間、連中のために、どれほどのストレスを蒙ったことか。女のお遊びには付き合えないよなと陰口を叩かれ、ギャラが安い、待遇が悪いと文句を付けられ。

それでも。

酷いプレイの割には、連中の名前だけで客は来る。

それが、明には甚だ納得がいかなかった。

自分の実力を引き出してくれるところか、足を引っ張ろうとするメンバーに、彼女は本気で腹を立てていたのだが。

自分に合ったメンバーと組ませて欲しいと訴えても、堪えてくれと頭を下げられるばかり。

出口が見えない演奏を、何度繰り返しても。

納得のいくものに、なる訳がない。

G i g が終わったあと。

形ばかりの打ち上げが始まる。

しかし。

音楽の話など、出たことがない。

博打と女、金と他人の悪口ばかりが続く。

日本のジャズの黄金期を支えたと言われるジャズマンとは、到底思えなかった。

中でも。

女好きで名高い、ベースの金田は別格だった。

明を無理矢理隣に座らせ、ことあるごとに触ろうとする。

さらに。

女なら黙ってても酒を注ぐもんだと説教された時。

明の忍耐は、限界に差しかかりつつあった。

（辛抱しい、明。でないと、演奏する場所すら確保出来んようになるで）

坂口の声が、何度も思い出されて。

自分のために、下げなくてもいい頭を下げ。

無能と罵られ。

必死に、マネージメントを務めている彼に、これ以上迷惑をかけたくなかった。

自分さえ我慢していれば。

そう思っつて、堪えてはいたものの。

酔いの回った金田は、ますます執拗に、明を求めてきた。

メンバーも、同じ席にいますと言っつのに、ただ、困惑する彼女をにやにやして見ているだけ。

抱き寄せられ、無理矢理キスされそうになった時。
最後の糸が、ぷつりと切れる音がした。

「止めて下さいよ！」

堪りかねて叫ぶと。

金田は意外そうな顔をして言う。

「何言っただ。散々、こういうことしてきたんだろっ？」

「そうだそうだ。指ぐらい入れさせてやれよ」

「生娘じゃあるまいし」

その言葉に。

明は、耳を疑った。

そして、絶望した。

これが、日本のミュージシャンの現実なのか。

この国では、こんな連中がもてはやされているのか。

連日のように通うスタジオでのバイトや、初心者へのレッスン。
週に何度かのリハーサルとライブ。

そのたびの心労に、明は疲れ果てていた。

こんなことをするために、帰って来たんじゃない。

何度もそう叫びそうになりながら、辛うじて堪えて来たのは。
ピアノが弾きたかったから、演奏がしたかったからだっただけ。
その思いも。

連中の暴挙の前で、ついに、立ち消えようとしていた。

何もかもが、嫌になっていた。

音楽も、ピアノも。

下げたくもない頭を下げ、人の言いなりになって。

好きでもない相手と、当たり障りのない演奏をして。

演奏が終われば、ホステスマがいのことまでさせられて。

こんなことなら。

もう、全て失ってしまってもいい。

二度と、弾けなくなってしまう方がいい。

そう、思った時。

勝手に、体が動いていた。

派手に、ガラスが割れる音がして。

その次の瞬間。

砕けたグラスに、右手を叩き付けている自分がいた。

不思議と。

痛みは、感じなかった。

再度、振り上げた手を。

誰かが掴んだような気がした。

それから。

気付くと、背後から、銘に抱き抱えられていた。

おぼろげな意識の中で。

彼が、声を荒げているのを聞いた。

今まで一度も聞いたことのない、激しい口調で。

そして。

記憶は、そこで一度途絶えた。

第三十二話

意識が戻った時。

明は、ソファーに寝かされていた。

右手には、きつちりと包帯が巻いてあり。
その痛みで、目が覚めたのだった。

ステージの照明はすでに落とされており。

彼は一人、洗いものをしていた。

断続的な水音と、グラスが触れ合う音。

それを聞いているだけで。

酷く、安心させられる。

「…気が付いたか？」

顔を上げもせずに。

銘は、話しかけてくる。

「ほんと、無茶する奴だよな」

「…ごめん」

「まあ、二度と、あの連中と組むことはないだろうね。向こうも願
い下げたそうだから」

「……」

「……痛くないか？」

「大丈夫」

「甲じゃなくて良かったよ。大して深い傷じゃないけど。治るまで、しばらくかかるぞ」

彼は、少しだけ顔を向け、笑ってみせた。
その笑顔に。

何故か、胸が痛んだ。

「……銘さん」

「うん？」

「……ごめん、迷惑かけて」

「グラスを割ったことか？」

「……」

「それとも、連中を怒らせたこと？」

「……両方」

「責任取れない喧嘩はするもんじゃないな。一つ、勉強になったただろっ？」

最後の一つを洗い終わったのか。
彼は、手を拭きながら、明に歩み寄る。

温かい指先が、彼女の額を撫でた時。

胸に、熱い何かが込み上げてくるのが判った。

「—— 銘さん」

「うん」

「あんなの、本当の僕じゃない…」

「…そうだな」

「あんなの、僕の音楽じゃないよ」

「判ってるよ」

「あんなことしたくて、戻って来たんじゃない…」

「気持ちは判るよ。俺も、向こうから帰って来た時、そう思ったから」

「もう…辞めてしまいたいよ。何もかも」

「全く。何言ってるんだ。お前がピアノを辞められる訳ないだろう？」

「……」

「このくらいのことではメゲるなよ。お前が辞めたいって言ったって、ピアノはお前を離さないぞ」

「……」

「だから、これまで続けてこられたんだろう？…違うか？」

彼の、優しい言葉に。

知らず、涙がこぼれていく。

その涙に。

銘は、はっとしたようだった。

「…明？」

「…もう、言わないで」

咄嗟に。

彼の服を、右手できつく掴んでいた。

何かを察したかのように、銘は、その体を抱く。

「…どうした？」

「…助けてよ」

「え？」

「銘さん…助けてよ」

「え、何——」

「もう、どうにかなってしまいそう…」

何故。

自分がそんなことを口走ったのか、判らなかった。

酒のせい、寂しさのせい。

こんな風に、誰かを求めたことは、これまでなかった。そして。

相手が、その思いに応えてくれたことも。

彼の唇が、そつと重なってきた時。

明は、これまでにない安堵を覚えた。

連中が言うように、男を知らない訳ではなかった。しかし。

あの事件のせいで、自分は、もう誰も受け入れることの出来ない体にされてしまったと思っていた。それでいて。

実際にこうして、彼を求めた時。

口付けを交わすだけで、充分、心が潤っていくのが判った。

やがて。

銘が軽々と自分を抱き上げ、寝室に連れて行った時も。

何の抵抗も感じなかった。

肌を触れ合わせ、きつく抱き合って。

ただの女に引きずり落とされる感覚と、その歓喜を自覚しつつも。

明は酷く冷静だった。

細い首筋に、少女のような胸に、彼の唇が下りていくのを。

愛おしそうに眺めている自分がいる。

細い裸身の中に、彼の情熱を深々と受け止めながら。

逞しい背を掻き抱く自分の姿が、現実のこととは思えずにいて。

それでも。

彼に求められ、導かれるままに、微かに喘ぎ、身を擦っている自分がいる。

開かれた体の中心を、何度も鋭く突き上げられているうちに。
今まで感じたことのない、痺れるような快感に、彼女は襲われ始める。

怖い、と思った。

落ちていくような、昇っていくような。

意識せずとも、体中に力が漲り、ぴんと張り詰めていくような感覚。
その恐怖に。

体は、心は、自然と反応してしまう。

堪え切れず。

明は、彼の名を呼んだ。

「――…銘さん」

「うん」

「何だか、変な感じ…」

「怖い？」

「うん」

「余計なこと、考えないで」

「……」

「自分の気持ちのいいところだけ、追いかけていけばいい」

そう言つと。

彼は優しく、明の体を抱き締めた。

彼の胸に抱かれ、肌を合わせることで。
ようやく明は、安心することが出来た。

再び繰り返す強いうねりの中で、彼の吐息を耳にしながら、
身悶えしそうな恐怖が湧き起こってくる。

銘に言われた通り。

彼の温もりを感じ、心地良さだけに集中していくと。

未知の力が、体を押し上げてくる。

その瞬間。

銘が、何かを囁いた。

だが。

明の耳にはもう、何も聞こえてはいなかった。

その背をきつく抱き、堪え切れずに声を漏らしたあと。

何度も、体が震えるのが判った。

突き落とされるような恐怖が去ると。

そこからふわりと、地上に舞い戻ってくるような感じがした。

それとほぼ同時に。

銘の唇が、重なってくる。

深く、交わったままの状態で、何度も繰り返す口付けから。

彼の愛情を、痛いほど感じてはいたものの。

明はどうしても、素直に受け止めることが出来なかった。

彼の腕の中で、その心音を聞いている間。

明は次第に、後悔し始めた。

安易に、彼を求めたことを。

一番距離を置いておきたかった人間の前で、醜態を晒したことを。

「—— 銘さん」

「うん」

「悪いけど…」

「うん」

「僕は、銘さんに特別な気持ち持つてゐる訳じゃないから」

「…判つてゐるよ」

「傷付いた？」

「まさか。慣れてゐるよ。そう言われるの」

「そうなんだ」

「でも…俺だつて、誰とでも寝る訳じゃないよ」

「そうかな」

「うん。今回は初めて…負けてしまったけど」

「負けたつて？」

「ミュージシャンとは関係を持たない主義だつたんだ」

「へえ」

「信じてくれないだろうけど」

「別に、疑ってる訳じゃないよ」

彼の胸に残る深い傷痕を、明はそつと指先でなぞってみる。

「…銘さん、僕のこと好き？」

「野暮なこと訊くなよ。嫌いなら抱けないだろう？」

「嫌いじゃないんだ」

「放っておけるか、こんな危なっかしい奴」

彼の手が、乱暴に頭を撫でてくる。

それを嬉しく思いながらも。

明は、心に蓋をした。

気持ちまで、渡してしまっではいけないと。

何故か、そう思ったのだ。

（あれが多分…最初で最後になるんだろうな）

流れていく風景を眺めながら、明は思った。
その僅か三日後。

彼は修子と出会い、人知れず、彼女に思いを寄せるようになったから。

修子のことは、嫌いではなかった。

それと、彩のことも。

ただ。

自分を抱いたように、銘が修子を抱いている場面を。

或いは、彩を抱いている場面を。

想像することすら、堪えられないと感じていた。

だから。

あんなことを言ってしまったのかもしれないと、明は思った。

そして。

そんな自分の気持ちが判らなくなっていた。

あの夜のことを。

秘密にしようと言ったのも、これっきりにしようと言ったのも自分からだった。

それなのに。

何故かまだ、引きずっている自分がいる。

銘のことを、好きなのか嫌いなのか判らない自分がいる。

「何や、随分大人しいな？」

再び、坂口が訊く。

「好きな男でも、出来たんか？」

相変わらずの、軽い口調に。

彼女は少しだけ、口元をほころばせる。

「だと、いいんだけどね」

そう言うてから。

今の答えが、果たして正しかったのかどうか。

もう一度、考えてみたものの。

明にはやはり、判らなかつた。

第三十三話

地下鉄の駅を出て空を仰ぐと、満天の星が出ていた。東京とは違う、乾燥した涼やかな空気が心地良い。夜風の中。

二人はアパートまで、並んで歩いた。

その途中。

修子は、訊いてみる。

「明日、何時発の飛行機？」

「十九時丁度」

「じゃ、夕方まで一緒にいられるんだ」

「そうだけど…大丈夫かい？」

「何が？」

「大学とか、バイトとか」

「ああ。全然。だって、銘さんが最優先だもの」

笑顔を見せながら、彼女は、手を繋いでくる。

「…向こうにいた頃、よくこうやって散歩したよね」

「そうだね。赤坂、六本木、青山……あちこち行っ たな」

「夜の街って、凄く好きなの。三田に越す前は、川崎の山の中だったから」

「百合が丘だったっけ？」

「そう。父さんは、そこから都内の大学に通ってたの。ラッシュが嫌いでね。京王線乗るの嫌だって言ってたな」

その横顔を眺めている時。

銘の胸は、ちくりと痛んだ。

今から三年前。

彼がたまたま、早く店を開けていた時。

半分開けたシャッターの隙間から、修子は、中へ駆け込んできた。

真新しい制服は半ば引き裂かれ、全身はずぶ濡れで。

その姿を見た瞬間。

銘は彼女の身に、何が起こったのかを悟った。

その後。

彼女の義父との様々な話し合いを経て。

修子と共に、暮らすことになってから。

この少女の健気さと純粹さに、彼は惹かれていき。

そのために。

本多との仲に、口を挟めなかった。

修子を愛すれば愛するほど、彼は、束縛を恐れるようになり。

自分の気持ちを殺して、ひたすら、彼女の幸せを願うようになった。

それが果たして、正しい愛し方なのか。

彼にはずっと、自信がなかったのだが。

こと、ここに至って。

自分のやり方が、やはり、正しかったのだと彼は思った。

彼の知る限り。

女癖の悪い本多が、これほど入れ込んだ女性は、他にはいなかった。どれだけの修羅場を迎えようと、決して離婚を口にしなかった彼が、修子のために、それをやってのけたという事実。

自分と違う形ではあるけれど、本多は本多なりに、彼女を愛している。

銘には以前から、そんな確信があった。

この夜。

銘は何度も、修子を求めた。

華奢な体を抱き締め、穏やかに愛し合う中で。

彼は、自分に言い聞かせていた。

これが最後なのだ。

もう、忘れなくてはならないのだ。

例え、まだ彼女に心を残していようと。

終わらせなければいけないのだ。

その、腕の中で。

修子も、同じ思いを抱いていた。
彼の体を、その思いを受け止めている最中。
この夜のことを、自らの体に焼き付けようとしていた。
引き裂かれそうな悲しみに耐え。
溢れそうになる涙を堪えながら。

朝。

窓から差し込む、眩い光のせいで。
彼は、予定より早く目を覚ました。

修子は、彼の腕の中で、ぐっすりと眠っている。

ゆるやかなウェーブを描く、明るい色の髪と、伏せられた長い睫。
瞼にかかる前髪を、指先でどけてやりながら。

彼はそっと、額に口付けする。

そんな優しい気持ちとは裏腹に、彼の心は重かった。

彩への後ろめたさと、修子への後ろめたさ。

その二つが、交互に襲ってくる。

（あの人は、どうしているのだろう。…今頃、一人で目覚めている
だろうか）

恋人を胸に抱きながら、他の女に思いを馳せている自分を、彼はど
うしても許すことが出来ない。

それなのに。

彩のことを思うたび、胸は熱くなる。

その熱さと、最早留めることの出来ない思いを。

そして、修子への、絶ち難い未練を。
彼は、次第に持て余しつつあった。

晴れ渡る空を、流れていく雲をぼんやりと目で追いながら。

彼は、何度も自問する。

自分がしようとしていることは、やはり、間違っているのではない
か。

自分は、どうかしてしまったのではないか――

「…起きたの？」

その声で。

銘は、はっと我に返った。

十九歳の恋人は、彼を引き寄せて、唇を重ねてくる。

その、柔らかな感触に。

彼は今にも、負けてしまいそうになる。

ひとしきり、朝の接吻を済ませたあと。

修子は、訊いてくる。

「今日は、どうしようか」

「そんなに時間ないだろう？」

「そうだね。遠くへは行けないかな」

「ここで、ずっとのんびりしてる？」

「それもいいけど…そうだ。ファクトリーでも行ってみる?」

「札幌ファクトリー?」

「そう。あそこのアトリウム、好きなんだ」

「了解。じゃ、そうしようか」

それから。

彼女は、一緒に風呂に入ろうと提案してきた。

ユニット・バスなので、そう広くはないけれど。

交互にシャワーを使いながら、何とか体が洗える感じだ。

「まともな湯船に浸かるのは、久しぶりだな」

バスタブに深々と体を沈め、銘がそう言うと。

修子は、くすくす笑った。

「銘さんそこ、シャワーしかないもんね」

「でも、俺が馨さんに世話になり始めた頃は、銭湯に通ってたんだよ」

「へえ、そうなの?」

「馨さんがわざわざ、奥を改装してくれて。俺の部屋と、シャワー・ルームを作ってくれたんだ」

「あ、それで、あそこだけ内装が綺麗なんだね」

「そう。修がいた部屋も、元々はレコード置き場だっただろう？」

「うん。狭かったけど、凄く落ち着いたな。押し入れの中の隠れ家みたいで」

懐かしそうに、目を細める彼女を見ているうちに。
彼は、つい、こんなことを言ってしまった。

「…修」

「うん？」

「何かあったら、いつでも戻っておいで」

「……」

「修の部屋は、あのままにしてあるから」

「…うん」

「誰か雇うつもりもないし。店の権利も、何れ馨さんから譲って貰うつもりだし」

「……」

「帰る場所はあるから。心配しなくてもいい」

「…判った」

修子は俯いたまま、彼の両手を握ってくる。
彼女の額に額をつけ、銘は笑った。

「…じゃあ、修。後ろ向いてくれる？」

「え？」

「背中、流してあげるから」

「はあい」

彼女は、ボディ・タオルを彼に手渡すと、言われた通りに後ろを向いた。

その、可愛らしい背中を洗ってやると。

修子は、くすぐったそうに身をよじった。

「銘さん、そんなんじゃ駄目。まるで、やった気がしないから」

「あんまり強く擦ると、色素沈着が起きるんだぞ」

「それにしても、優し過ぎるって。もっと力入れて」

「はいはい」

「あ、そう。そのくらい。上手上手」

「全く、馬鹿にして」

「馬鹿になんかしてないよ」

「どうだか」

「あ、次、やってあげるね。交代しようよ」

そんな、他愛もない会話を交わしながら。

愛しさばかりが、込み上げてくる。

彼女の健気さや、優しさに触れるたび。

銘は、かねてからの決心が揺らぐのを感じていた。
しかし。

今更、引き返せる筈もない。

十時。

再び、南北線で大通まで出る。

そこから東西線に乗り換え、バスターミナル前で下車。

北に向かって、歩いていくと。

前方から、二人の小学生が現れた。

「あの…」

ピンクのポシエットを提げた可愛らしい女の子が、おずおずと尋ねてくる。

「どうしたの？」

銘は、笑顔を返す。

彼女の視線に合わせ、しゃがみこみながら。

「地下鉄の駅は、どっちですか？」

「ああ、ここを真っ直ぐ行くと、すぐだよ」

「ありがとうございます」

「いえいえ、どういたしまして」

二人揃って、ぴよこんと頭を下げると。

彼も、深々と一礼する。

それを見て。

修子はくすくす笑う。

「可愛いね。姉妹かな？」

「そうみたいだね。お揃いのポシエットだったから」

「銘さん、小さい子にも優しいんだ」

「何言ってるの。俺は、誰にでも優しいよ」

「知ってる。それがいいところで…悪いところでもあるかな」

「え？」

「冗談。ね、渡ろう！ 赤になっちゃう」

「あ、うん」

修子に手を引かれ、交差点を渡りながら。
彼は、その言葉が気になって仕方がなかった。

会ったその日。

彩のコロンに、気付かれた時。

彼は、否定も肯定もせず。

それ以降。

修子も、そのことに一切触れはしなかった。
だから。

彼女はもう、覚悟を決めたのだと。

問い詰めたい気持ちを堪えて、この三日間を乗り切ろうとしている
のだと。

彼は、そう理解していたものの。

時折過る不安を、彼女への罪悪感を、隠しきれぬ筈はなかった。

第三十四話

長いエスカレーターに乗り、渡り廊下を通ると。

思いがけず広い空間が、目の前に現れた。

頭上のガラスを透かして降り注ぐ日差し。

その熱気に、エア・コンディショナーの微かな冷気が交じり合う中。

二人は手すり越しに、階下の風景を眺めていた。

「ほんとだ。随分開放的なところだね」

と、銘が笑顔を向けると。

修子はそつと、手を握ってくる。

「吹き抜けだからね。この残響が心地良いの」

「判るよ。何だか、音楽が聴こえてきそつだ」

そう言つて、彼は目を閉じた。

清浄な空気を吸い込むようにして。

不意に。

細い両腕が、彼の首に回されて。

柔らかな感触が、重なってくる。

しんとした、回廊の最上階で。

二人は何度も、口付けを交わす。

年若い恋人同士のように。

しかし。

そんな時間も、もうすぐ、終わりを告げようとしていた。

この街を離れてしまえば。

彼女は、他の男の元へ。

彼は、他の女の元へ去らなければならない。

懸命に、互いを求めれば求めるほど。

その距離を、思い知らされるだけだった。

それから。

修子は、思いついたように、彼の手を引いた。
向かった先は、CDショップ。

「銘さんが参加してる奴、この前見つけたの」

そう言つて、一枚のCDを抜き出してみる。

裏のクレジットには確かに、銘の名前があった。

「まだ、売ってるんだな」

彼は、感心して言った。

「リチャード・ラファティは有名なもの。この頃は、そうでもなかったの？」

「まあね。俺も奴も、近所のイタリア料理店でバイトしてて。それで知り合っただ」

「そうなの？」

「うん。当時奴はアルトだね。俺が、テナーの方が向いてるって言

「ったんだ」

ジャケットには、テナー・サックスを構えた、黒い肌の青年が写っている。

彼はそれを、如何にも懐かしそうに眺めた。

「感慨深いね。あの頃一生懸命やってた連中は、皆、ビッグになって……」

「……」

「俺は、名も無き市井の人間に成り下がっちまったな」

自嘲気味に、そう呟くと。

修子は黙って、手を握ってくる。

「……銘さん」

「うん」

「そんな風に言わないで……」

「……」

「出来るなら、また、銘さんのベースを聴きたいって思ってる人は、沢山いるんだから」

「……そうだろうか」

「レイナさんも、わたしも。本多さんだって——」

その名を口にした時。

彼女は、はっとして彼を見た。
しかし。

銘は、いつものように微笑むだけだった。

「…そうだよね」

「銘さん、ごめんなさい。わたし…」

「いや、いいよ。嬉しいから。本多さんがそんな風に思ってくれてるなんて」

彼は、持っていたケースを棚に戻し、本多のCDを手にする。

人気のあるピアニストだけあって、リーダー作だけで1ブロックを占めている。

ジャケットには、やや若い本多の姿があった。

撮影用のペーパーの前、無造作に手を組んだ写真。

引き気味のショットだが、恐ろしく整った顔立ちと、意思の強そうな瞳は健在だ。

しばらくの間。

銘は何も言わず、そのジャケットに視線を落としていた。

「…凄いよ、あの人は。俺は、どうやっただって敵わない」

「……」

「だから…」

「うん」

「俺に、遠慮することないぞ」

修子は、怪訝な顔をした。

その頭を撫でながら、彼は微笑みを返す。

「行くんだろう？ 向こうに」

「…え？」

「本多さんに、メールしてただろう、昨日」

「ううん、違うの。あれは…」

咄嗟に首を振る修子を制して、彼は続けた。

自分に、言い聞かせるようにして。

「いいんだ。怒ってる訳じゃないよ。だから、大学のことも、気に
なくていい」

「でも…」

「休学するなり、中退するなり。修子の好きにきなさい」

思わず。

父親のような言い方をしていることに、彼は気付いていた。
そして。

それが、自分の役割だと思っていた。

恋人でも婚約者でもない自分が彼女に出来ることは、心穏やかに送り出してやることだけだと。

彼はそう思っていたのだ。

駅に戻り、空港に向かうまでの間。

二人はずっと、手を繋いでいた。

丁度、札幌へ向かう列車の中でしたように。

唯一、違っていたのは。

銘の方から、彼女の手を取ったことだった。

この日。

彼は一度も、携帯を手にとらなかった。

バッテリーが残り少ないこともあったが、今日一日は、修子に気持ちを預けておきたいと思ったためでもあった。

肩に寄りかかる彼女の重さを、愛おしく思いながらも。

銘にはまだ、迷いがあった。

修子と別れ、彩に向き合うことへの。

しかし。

もう、全ては動き出してしまい。

彼自身にも、最早、どうすることも出来なくなっていた。

チェック・インを済ませ、空港内を少し見て歩く。

沈黙を恐れ、いつも以上に饒舌になる銘とは対照的に、

修子は、殆ど口を利かなかった。

そんな風に、静かに寄り添っている間にも。

搭乗時間は、刻一刻と迫ってくる。

あのゲートを潜ってしまえば、再び、修子とこうして歩くことはな

いだろう。

そう思ったびに、彼の胸は塞いだ。
全ては、自分が蒔いた種でもあった。

やがて。

アナウンスと共に、人々がゲートに殺到する。

銘は、ゆっくりと彼女の腕を外した。

それから。

何か、言わなくてはと思ったのだが。

気の利いた言葉など、何一つ浮かばない。

「…修」

「うん」

「体に、気を付けて」

「ありがとう。銘さんもね」

「それと…」

「うん」

「何かあったら、必ず連絡して」

「判った」

「あと…」

「うん」

「今まで、ありがとう…」

「……」

「ほんとに、ごめん…」

「ねえ、そんなこと言わないで…」

「……」

「一生懸命、我慢してたのに。泣きたくなっちゃうから」

そう言うつと。

修子は右手で、口元を押さえた。

必死に、嗚咽を堪えるようにして。

その姿は。

彼の胸を、深々と抉^{えぐ}った。

「…銘さん」

「うん」

「あのね…」

彼女は、何故か躊躇いながら、口を開いた。

「彩さんと——」

「え？」

「彼女と…幸せになってね」

彼は、耳を疑った。

しかし。

修子は、涙を拭いながらも、懸命に笑顔を作っている。

「ごめん。わたし、気付いてたんだ…」

「…嘘だろう？」

「昨日、充電しておいたから。わたしの番号は、入れなくていいからね」

「…修」

「どうせ、もうすぐ、向こうに行くんだし…」

銘は、何と答えていいか判らなかった。

修子が、携帯の存在を知っていたことなど、彼には予想すら出来なかった。

呆然としている彼の耳には、搭乗を促すアナウンスしか聞こえない。それでも。

溢れ出す涙を、止めずに去ることは許されない気がした。

足早に通り過ぎる人々を黙殺し。

彼は、人目も憚らず、彼女を抱き締めた。

壁際に、その細い体を押し付けるようにして。

時間ぎりぎりまで、口付けを交わしながらも。

銘は、何も言わず、何も言えなかった。

そうして。

修子の中に残した心を、掻き集めようとしていた。
自らの戒めとして。

近い将来、失われてしまうであろう思いを。

第三十五話

東京は、雨だった。

空港に辿り着いてすぐ、銘は、彩の携帯に電話を入れた。

「遅かったのね」

彼女は、嬉しそうに言う。

その声に。

彼の胸は、ちくりと痛んだ。

しかし。

後ろめたさよりも、再び彩と会えた喜びの方が大きかった。

「…今から、会えるかな？」

「うん。実は今、空港にいるの」

「ほんとに？」

「到着時間を、銘さんが教えてくれたから。迷惑だった？」

「そんなことないよ。凄く嬉しい」

携帯を切ったあと。

彼は、少しだけ迷った。

修子に、連絡すべきかどうか。

ゲートを潜り、エレベーターに乗ってから。

彼は携帯を置いて、ポケットに収めた。

もう、彼女に関わってはいけない。

修子は、あの人の元へ行こうとしているのだから。

そう、自分に言い聞かせながら。

駐車場の入り口で、彩が待っていた。

彼女が着るワンピースの上で、鮮やかな緋色と黒とが混ざり合う。

B M Wに乗り込んでから、エンジンをかけるまでの数分間。

銘は貪るように、彩の唇を求めた。

彼女の細い両腕が、自分を抱く感触と。

その呼吸が速まるのを、腕の中に感じながら。

雨に照らされた首都高は、美しかった。

左ハンドルの車を運転するのは久しぶりだったものの、彼はすぐに、その感覚を思い出した。

その右肩に、彩は凭れてくる。

腕を絡ませながら。

「…銘さん」

「うん」

「あなたのところへ、泊めて貰ってもいい？」

「え？」

「駄目？」

「いや、構わないけど…」

「けど？」

「槇村英の奥様を、あんなところへお泊めしていいのかと思って」

彼は、笑顔でそう返したのだが。
その途端。

彩は、絡めていた腕を外した。
それでようやく。
自分の失言に気付いたのだ。

「…彩さん？」

彼女は、答えない。
黙って、窓の外を見ている。

「ごめん。そんなつもりじゃ——」

「二度と、言わないで」

「え？」

「わたしの前で、あの人の名前を、口にしたりしないで」

「冗談だよ。だから、怒らないで」

「冗談でも、言わないで。でないと、わたし…」

彼女の言葉が、嗚咽に変わった時。

銘は、激しく後悔した。

東京へ戻れたことと、彼女と再会出来たこと。

二つの喜びと安堵が重なったせいか、彼はいつになく上機嫌だった。そのため。

こんな、迂闊な発言をしてしまったのだ。^{うかつ}

駐車場に車を入れ、店へ着くまで。

彩は、一言も喋らなかった。

シャッターを開け、暗い階段を慎重に降り。

カウンターの明かりを点けると、ようやく、帰って来た実感が湧いた。

「何か、飲む？」

彼女は、黙って首を振る。

店の中は、思いの他綺麗に片付けてあった。几帳面な馨がやってきていたのだろう。

留守電を確認し、レジの清算を済ませてから。彼は自分の部屋に、彼女を案内した。

「狭いから、びっくりすると思うけど……」

あらかじめ前置きしてから、ドアを開ける。
その時。

彼はそこに、意外なものを見た。

「えっ？」

「あら？」

出掛ける前に整えたベッドの上。

そこには何故か、薔薇の花弁が敷き詰めてあった。

あたかも、彩がここに来ることを予想していたかのように。
しかし。

それを見た彼女は、うつとりとした笑顔を見せた。

「…素敵ね。それに、いい匂い」

深紅の一ひらを、彼女は拾い上げる。

「銘さん、結構ロマンチストなのね？」

「いや、そんなことないよ」

曖昧に微笑しながら、彼は考えた。

誰がこんなことをしたのだろうか。

どう考えても。

ここに入れる人間は、一人しかいなかった。

（明め。やってくれるじゃないか）

やや、複雑な気分に陥りながらも。

彼は、その花弁をどけようとした。

「あ、待って」

彩が咎める。

「いいじゃない、このままで」

「でも、これじゃ寝られないよ」

「ほら、見て、銘さん」

彼女は躊躇わず、ベッドの上に腰掛ける。

「ね。綺麗な色。わたしの服と、お揃いみたいでしょう？」

「…そうだね」

彼を見上げ、その両手を引きながら。

彩は、少女のように微笑んだ。

その笑顔に。

最早、勝つ術などなかった。

真つ青なベッド・スプレッドの上に広がる、真つ赤な花弁の上に。

彼は彩を、ゆっくりと横たえる。

口付けしながら、背中に腕を回し、ファスナーを下ろす。

露わになった肩から手を差し入れると。

彼女は耐えかねたように、シャツのボタンに手をかけてくる。

温かな彼女の肌と、冷やりとした花弁の感触が。
彼の衝動を、嫌でも燃え立たせる。

薔薇の上で、激しく求め合うほどに。

組み敷かれ、揉みしだかれた花の香は、ますます匂いたっていく。
まるで花を抱いているようだ、彼は思った。

同時に。

彼は、漠然と感じ取っていた。

その花に託された警告と、その意味を。

第三十六話

「最近、見なかったな」

「そう?」

「忙しかったのか?」

「そうでもないけど」

明は、清書中の譜面から、顔を上げて答える。

「アレンジとか、DTMとか。あと、スタジオでの仕事が増えたからね」

「へえ」

「昨日録音したのは、スーパーとか、ホーム・センターでかかっているような奴」

「イージー・リスニングみたいなもの?」

「単なるBGMだよ。聴いたところで、誰も僕だとは思わないような」

「珈琲は?」

「貰つよ」

カウンターの上に、五線紙を広げ。
子供のようにうつ伏せて、明は写譜ペンを動かした。
相変わらず、綺麗な譜面を書く。
やや赤みを帯びた髪が、その上にはらりと落ちた時。
細く白い首筋が、隙間から覗く。
その時。
彼ははつとして、目を逸らした。

札幌から帰って以来。

彩はほぼ毎晩、彼の元を訪れていた。

時間の許す限り体を重ね、朝になると帰っていく。

まるで、通い婚みたいね。

そう言って、彼女は笑うけれど。

銘の胸には、常に、一抹の不安があった。

夫のある女性と、こんな風に会っていていいのだろうか。

こんな逢瀬を続けていていいのだろうか。

人には言えない恋に、自分が易々と身を投じてしまったことを。

彼は、今も信じられずにいた。

無邪気で、明るくて。

誰よりも、芸術に近い場所にいる。

彩と過ごす時間は、楽しかった。

しかし。

彼の心の何処かにはいつも、底知れない空白があり、微かな警鐘さえ鳴っていた。

著名な画家の夫人と、密かに通じている自分。

その現実に対する不安は尽きなかったものの。
銘は、敢えてその背徳から目を逸らすことにしていた。
でなければ。

とても、こんな関係が続けていけそうになかった。

「…また、考え事？」

明が、棘のある言い方をする。

「そういう訳じゃないよ」

「そうかな。最近、心ここにあらずって感じじゃん」

長い睫を伏せ、珈琲を口にする明を前にして。

彼は、訊きたいと思っていた。

敷き詰められた薔薇の意味を。

けれど、どうしてもそれは出来そうにない。

万が一、あの豪華な演出が、明によるものでなかったら。
自分は、より一層の恐怖を味わうことになる。

何故だか、そんな予感がしていた。

あのあとすぐ。

修子は大学を中退し、本多を追ってヨーロッパへ渡った。

親代わりを務める馨の元へは、こまめに連絡が来ているものの。
予想通り、銘には、電話の一本すらなかった。

カウンターの背後にあるキー・ボックスの中には、銀色の音叉があった。

札幌で、修子と一緒に買ったものだ。

今はもう、誰とも響き合うこともないそれを、彼は大事にしまっていた。

彼女との思い出を封印するように。

その夜。

店を閉め、掃除をしている最中に、彩が来た。

「手伝おうか？」

「いや、いいよ。もう終わるから」

彼は笑顔を返し、カウンターに座るよう促した。

「最近、時間通りに終わるのね」

「そうだね。特に平日は」

「暇ってこと？」

「まあ、忙しくはないかな」彼は、やんわりと肯定する。「週末を除けば」

「…ねえ」

「うん？」

「それって、わたしのせい？」

「まさか。どうしてそんなこと…」

「何となく」

「ありえないね」彼は即座に否定した。「元々、繁盛してる店でもないし。気にすることないよ」

「そうかな」

「そうだよ」

「それならいいけど…」

彩が、そう言いかけた時。

頭上で、大きな物音がした。

誰かが、シャッターを足で蹴ったような。

「何かしら」

「彩さんはここで待ってて。見てくるよ」

「大丈夫？」

「大丈夫だよ。多分、酔っ払いだろう」

彼は、やや苛立ちを覚えつつ、階段を上る。暗がりの中で鍵を外し、でシャッターを開けると。思った通り、そこには誰もいなかった。

（やっぱり、悪戯か）

そう思い、店へ戻ろうとした時。

足元に、柔らかい感触があることに気付いた。ふと視線を落とした銘の目に、得体のしれないものが飛び込んでき

る。

シャッターの前から、歩道に到るまで。

ぬめぬめと光る何かの内臓と思しきもの。腸や心臓、胃などの塊が、大量にぶちまけられており。路上は一面、鮮血に染められていた。

真っ赤な海に、足を踏み入れたまま。

彼はしばし、言葉を失った。

単なる嫌がらせにしては、悪質過ぎる。

そう思いながらも、怒りよりむしろ、恐怖を覚えずにはいられなかった。

あの薔薇も、この血も、やはり警告なのだと。恐らく、彩のことに對する。

銘はようやく、そう確信するに至ったのだ。

その時。

「—— 銘さん？」

彩の、無邪気な声が耳を打つ。

「まあ…」彼女は、そこへしゃがみこんだ。「誰が、こんなことを」

「判らないよ」彼は、うつろな眼差しを向け、携帯を取り出した。

「とにかく、警察に連絡してみる」

「こんなことぐらいで、警察は動かないわよ」

「え？」

「誰も傷付いてないし。何も壊されてないもの。きっと、話も聞いてくれないわ」

彩は、他人事のようにくすくす笑った。

それから、その血に右手を浸す。

「それより、見て。何て綺麗な赤なの？」夢見るように、彼女は言う。「この色を、そのまま使えるといいのにな…」

普通の女性なら、気持ち悪いと目を背けるであろう時。

彩が放つ無邪気な言葉と、陶然とした目付きに。

銘は、戦慄を覚えていた。

そうとも知らず。

憑り依かれたように、撒かれた血を掻き集める彩。

芸術が、彼女を狂わせたのか。

それとも。

そんな彼女を怖いと感じる自分がおかしいのか。

彼には、判らなくなっていた。

第三十七話

その日も、朝から雨が降り続いていた。
営業前の練習を止め、銘は、楽器をスタンドに立てかける。
ステージの照明を落とし、カウンターへ向かうまでの間。
何故か、溜息が出る。

季節はもう、移ろいつつあるけれど。

ヨーロッパからの便りはなかった。

焼け付くような恋を手に入れたと同時に。

彼は、穏やかな日常を失った。

彩の夫が日本へ帰ってくるたびに、心は俄かに波立って。

救い難い嫉妬に振り回されることになる。

平穏は彼を見放し、安らぎも今はない。

これが、自分の望んでいたものなのか。

そう、自問してみたところで。

答えなど、出る筈がなかった。

あの夜から。

警告らしきものは、何度となく続いていた。

日に数十回繰り返し返される無言電話や、毎日のようにポストへ残される白紙の手紙。

けれど。

警察が言うように、誰も傷つけられてはいないのだし。

思い過ごしたと言われればそれまでだ。

子供じみた嫌がらせに気付くたび。

誰が、何のためにしているのか。

そんなことを考えたりも、時にはするけれど。

恨みを持たれるような相手は、一人しか思いつかない。

修子と別れ、彩と付き合うようになってから。

客足は、ぱったりと途絶え。

出演を依頼しても、断られるようになった。

明を除いては。

そろそろ、シャッターを上げなくてはならない時間なのに。

彼は、指一本動かしたくはなかった。

美しく、才能ある恋人——とは言え、それは人妻なのだが——

——がいる幸せと引き換えに、いろいろなものを失ってしまったことを、銘はあらためて悟った。

それでも。

彩を手放すことなど、彼には最早考えられず。

道ならぬ恋故の苦難を甘受し、耐え忍ぶ覚悟はとうに出来ていた。

壁にかかる絵を見るたびに。

揺らぎそうになる信念を、彼は見つめ直す。

この絵を初めて目にした時の感動を思い出し。

彩を初めてこの腕に抱き締めた時の感触を。

ひとつひとつ、確かめながら。

「お疲れ」

「お疲れさーん」

愛想良く手を振って、明は自動ドアを潜っていく。
六時間に渡るレコーディングのあとで、体は疲れを感じていたけれど。

頭は奇妙に冴え渡っていた。
そして。

銘のことが、ずっと気になっていた。
彼と、彼に纏^{まつ}わる噂のことが。

「明！」

急に、背後から名前を呼ばれ。
彼女ははっとして振り返る。

長身に黒のレザージャケット、長い茶髪。
背中には、テナーのソフト・ケース。
一目で、その人と判る。

「何だ、圭介か」

「相変わらずひでえ奴。そんな言い方するなんて」

「どうしたの？ 今日、休み？」

「バイトの帰り。銘さんとこ、寄って行こうと思って」

「へえ」

「ひょっとして、お前もそう?」

「うん。何だか気になって…」

「やっぱそうか。最近、おかしいもんな」

「野暮なことは言いたくないけどね。女絡みだと思うから」

「ああ、例の人妻か」

「もう、皆知ってるんだ」明は、肩を竦めた。「バンドマンは、こういう話好きだから」

「銘さんは特に、これまで浮いた話がねえ人だから。格好の話題になってるよ」

「浮いた話ね。あの人は、滅多にプライベートを明かさないから」

「俺と違ってな」

「そうだ！ 巧くん、帰って来てるんだって?」

「ああ」今度は、彼が肩を竦める番だった。「先週末からな」

「じゃあ、ラブラブじゃん」

「まあ、ぼちぼちってとこ。なんで、悪いけど、しばらくうちには泊めてやれねえから」

「何だかなあ」明は笑顔で答える。「うちのメンバー、何だかんだ言って、全員相手がいるんだよね」

「葵はいねーぞ？」

「あれは、橋元さんの愛人だから」

「噂だけだろう？」

「いや、ほんとの話らしい」

「そうか？　だって、年、違い過ぎるじゃねえの？　橋元さん、確かもう……」

「四十一」

「よく知ってるな？」

「青と同期だもの。だから余計、僕を目の仇にするんだよ」

ジーンズのポケットに手をつ込みながら、明は空を仰ぐ。夕暮れが、すぐそこまで迫っていた。

”Riot”のドアを開けると、珍しく、客が入っていた。それも、学生のような若い連中ばかり。

やや、居心地の悪さを感じながらも。

明と圭介は、カウンターの隅に腰を下ろす。

「忙しそうだね」

明が声をかけると、銘はようやく微笑んだ。

「何か、何処かの雑誌に紹介されたらしくて」

「へえ。それで、若い人ばかりなんだ」

「そう。まあ、ありがたいと言えば、ありがたいんだけど…」

そう話す合間にも。
客から、声が飛ぶ。

「すみませーん！」

「はい」

「ちょっと、うるさくて話出来ないんでー。もっと、音低くして貰えますー？」

「あ、はい」

銘は言われた通り、スピーカーのボリュームを下げる。
それを見て。

明と圭介は、思わず顔を見合わせた。

「…銘さん？」

「うん？」

「何やってんの？」苛立ちを露わにして、明が言う。「ここは、音楽を聴かせる店でしょ？」

彼女の剣幕に釣られ。

啓介も、思わず口を挟む。

「そうだよ銘さん。ライブハウスと知ってて来てる癖に。失礼じゃん？ 馨さんならあんな客、叩き出してるよ」

「そうはいかないって」と、彼は笑う。「若い子だから、そういうのが判らないんだろ」

「判らなければ、マスターが教えてやるべきじゃないの？」

「とりあえず、ライブとかやってる日じゃないし。仕方ないよ」

「でも ——」

言いかけて。

明は、口をつぐむ。

言っても無駄だ。

何故か、そう思ったからだ。

とりあえず、長居をやめ。

二人は早々に、店をあとにした。酷く、もやもやした気分のまま。

湾岸道路を過ぎる、ヘッド・ライトの中で。
ふと、明が眩く。

「…銘さん」

「うん？」

「変わったよね」

「…まあ、確かに変わったな」

「前は、あんなじゃなかったのに…」

「だよな。何だが、違う人みてえな感じ、したよ」

「…圭介」

「うん」

「うち、寄ってく？ それとも、このまま…」

「寄らせるよ」彼は、間髪入れずに言う。「何か、このまま帰れる
雰囲気じゃねえから」

「巧くん、どうするの？」

「メールしとく。約束してた訳じゃねーし。一人で部屋にいるのと
か、平気な奴だし」

「…ごめん」

「謝んなって」圭介は、彼女の頭を乱暴に撫でた。「こんな状態で、お前を一人にしておけるかよ」

閉店後。

銘は、掃除を終え、時計を見る。
いつもなら、彩の来ている時間だ。
それなのに、メールもなければ、電話もない。

（どうしたんだろう）

何度も、携帯を確かめるものの。
着信は一つもなかった。
何かあったのかと、気は急ぐけれど。
彼はその不安を押し殺し、レジの精算を始める。

そこへ。

店の電話への着信。
彼は反射的に、ディスプレイを見る。
案の定、非通知だ。

しばらく悩んでから。
銘は一度、深呼吸して。
それからおもむろに、通話ボタンを押す。

「…はい、”Riot”です」

いつもなら、相手は何も言わない。

言わずに黙って、彼が電話を切るのを待っているけれど。

この時に限って、相手は話すつもりだったらしい。

「—— 郁崎さん？」

いきなり、そう呼ばれて。

彼は、はっとした。

「はい、そうです」

答えながら。

彼は、相手の声に、僅かながら聞き覚えがあることに気付いていた。どちらかと言うと中性的な、掠れた感じの声。しかし。

それが誰なのか。

彼には、どうしても思い出せない。

冷やかな沈黙の中。

男が、言葉を紡ぐ音が聞こえるような気さえた。そして。

彼は、聞くことになる。

これまで、一番恐れていた人物の名を。

「槇村です」

第三十八話

思いがけない名前を耳にして。

彼は瞬時に、言葉を失った。

そして考える。

これから、どうすればいいのか。

どう説明すればいいのか。

彩とのことを。

けれど。

その胸中を察したかのように、榎村英は言葉を繋ぐ。

「僕の妻が、お世話になってるみたいですね」

「お世話だなんて」彼は、しらを切ってみる。「多分、誤解なさってるんじゃないかと思いますが…」

しかし。

予想外なことに、榎村は、明るい声で言う。

銘の言葉を遮るようにして。

「いいんです。気にしないで下さい。僕は、咎めるつもりなんかありませんから」

「…え？」

「芸術家には、よくあることです。いつそ共有しましょうよ。あなたと僕とで」

思いがけない言葉に。

彼は、思わず耳を疑った。

自分の妻の愛人を突きとめ、電話をかけておきながら。

叱責するならまだしも、それを認めるような発言をするなんて。

これは、策略なのだろうか？ と、彼は考えた。

さもなくば、何かの罠なのだろうか。

それを明らかにするためにも、逃げずに話し合わなくてはならない。

銘は、そう決心した。

「すみませんが」彼は、正直に告白する。「あなたが仰ることの意味がよく判らないんです」

「考えることなんかないです」男は、あっさりと言う。「あなたは好きに彩と会えば宜しい。これまで通りに」

「……」

「彩はね、芸術家ですよ。僕なんかには決して懐^{なつ}かない女です。そのことを承知で、僕は結婚したのでですよ」

「……」

「年齢差もあるし、利害もある。彼女は絵を描きたい人だ。でも果たして、僕なしでやっていけるかどうか」

「……」

「それが怖いから、僕とは別れられない。けれど今、あなたと恋に

落ちている。そういう現実がある」

銘は、答えられなかった。

相槌すら打てそうにない。

一体、この男は何を考えているのか。

自分を、そして彼女を、どうしたいと思っているのだろうか。

じつとりと、額に汗が滲むのを感じる一方で。

そんな言葉ばかりが、頭を駆け巡る。

「あの子は欲張りですよ。もの凄くね。普通ならありえないでしょう。世間様の謗り^{そし}を受けて当然です」

おっとりとした話し方ながらも。

槇村の鋭い言葉は、彼の胸をも突き刺していた。

今更言われるまでもなく。

彩への非難は、そのまま、自分に向けられたものでもあるからだ。

「…それで」彼は、やっとの思いで口を開いた。「わたしに、どうしろと？」

「そう。それで、あなたにお願いがあるんですよ。僕から個人的にね」

「どんな、お話でしょう」

「愛人として、正規の契約を結びたいのですよ。それなりの報酬をお支払いしますから」

「契約？」彼は、驚いた。「突然、何を言い出すんですか？」

「ええ。そうすれば、彩はあなたのものです。どれだけ会って戴いても構いません」

「ちょっと待って下さい。そんなの――」

「僕が日本にいる間は別ですよ。彼女には仕事がありますから。僕の妻を演じるという仕事かね」

「……」

「滑稽かとお思いでしょうが。これは大事なことです。でなければ、彼女の存在理由はなくなってしまうから」

彼女をまるで、ペットか何かのように言う槇村の態度に。

銘は知らず、血が滾^{たぎ}つていくのを感じていた。

あの病院で出会った頃。

彼女は、無垢で純真な子供だった。

親を亡くし、苦学した末に、槇村の愛人となり。

拳句、飾り物のような扱いをされているだなんて。

彩のこれまでを知っているだけに。

彼は、こう抗弁せずにはいられなかった。

「……お言葉を返すようですが」

「はい」

「わたしにはどう考えても、それが、まともなこととは思えないのです」

「どういことですか？」

「彼女は、あなたの妻である前に、一人の人間です。それを、金や契約で縛ろうとするなんて――」

銘が話している途中で。

電話の相手は、くすくす笑い出し。

それはじきに、常軌を逸した哄笑へと変わっていく。

受話器を握り締めながら。

銘は、自分の中の炎がくすぶり始めるのを感じていたが、それを今、表に出すことだけは、避けなければならない。

「槇村さん」彼は、不愉快な気持ちを抑えて言う。「何がおかしいんです？」

「だって、ねえ、あんまりじゃないですか。あなたは今、自分がしてることを判ってますか？」

槇村に言われて。

銘は、はっと我に返った。

いつの間にか、自分の置かれている状況も、立場も忘れていたのだ。

「ああ、おかしい。長生きはするものだ。まさか、間男に説教されるだなんて。僕は思いもしませんでしたよ」

「……」

「まあ、いいでしょう。あなたは思いのほか誠実な方のような。だから僕も、いろいろと考えたのですよ」

「……」

「ねえ、郁崎さん。恋とはね、不可欠なものですよ。靈性を高め、身体を清浄にする。いいことです」

「……」

「でもね、いつかは醒める時が来る。あなたのようにお若い方は、ご存知ないかもしれないが」

「何と言われようと、彩さんへの気持ちは変わりません」彼は、その声を撥ね退けるように言う。「絶対に」

「そうでしょうかね。彩は、あなたが考えているほどまともな女じゃないですよ。今に判ります」

「あなたにそんなこと、言われる筋合いは……」

「条件は、吞んで戴けるんですね？」

「いいえ」銘は、きっぱりと言う。「わたしは、あなたと契約するつもりはありません」

「へえ。では、これからどうするつもりです？」

そう訊かれて、彼は一瞬、返答に窮したが。咄嗟に、思いついて言う。

これまで、胸の奥に秘めていた言葉を。

「別れて下さい。彩さんと」

「ほう」彼は、揶揄うように笑った。「どうして僕が、彩と別れなければならないんです？」

「あなたといても、彼女は絶対に幸せにはなれない」

「まあ、そうでしょうね」彼は、素直に肯定する。「そんなことは、彩も判っていますよ」

「だったら、何故…」

「まあ、要するに、交渉決裂ということですね」槇村は、穏やかな声で言う。「Buena ideaだと思ったんですがね」

「何ですって？」

「あなたはスペイン語も達者だと。修子さんから伺ってましたけどね」

「え？」

「別れた恋人のことなど、もう、忘れてしまいましたか？」

聞き返す間もなく。

電話は、切られてしまった。

銘はしばらく、呆然としていたが。

やがて、その受話器を電話機の上に置く。

右腕には、痺れが残っていた。

彼には、数分としか思えなかったが。
実際には、三十分近い時間が経過していた。

カウンターに座り直し、さっきまでの会話を思い出してみたところ。

槇村の言葉が、警告であることには気付いていた。

修子の名前が出された時点で。

彼は、微かな胸騒ぎを感じていたけれど。

槇村英に直接、挑戦状を叩きつけたことと。

彩への思いを口に出したことを、後悔したりはしなかった。

彼の意思がどう転ぼうと。

好むと好まざるに関わらず。

全ては、動き出してしまったのだから。

第三十九話

目覚めた時。

明は一瞬、自分が何処にいるのか判らなかつた。

ソファ―・ベッドから身を起こすと、開け放したドアからは隣室が見える。

ベッドの上には、抱き合つて眠っている二人の姿。

圭介と、彼の恋人だ。

（相変わらず、仲いいんだ）

思わず微笑みながら。

明は、足の爪先をラグの上に揃える。

今日は、どうしようか。

やや酒の残る頭を抱えながら立ち上がると。

部屋の主に、そつと声をかける。

「…圭介」

「うん？」

「ごめん。シャワー、借りていい？」

「ああ。タオルとか、いつものところにあつから…」

「サンキュ」

明がクローゼットを開けると。

彼の腕の中で、巧が微かな身じろぎをする。

「あ、ごめん」彼女は、慌てて言う。「起こしちゃったかな」

「大丈夫」圭介は、目を擦りつつ笑顔を返す。「いいよ、巧。まだ寝てて」

「あれ、明さん…？」

「昨日、うちに泊めたんだよ」

「そうだったわけ？」

「いいから。寝てろって」

その額にキスしたあと。

圭介は彼を抱き直し、再び目を閉じる。

二人とも、さすがにまだ眠そうだ。

勢いよく降り注ぐ、熱い飛沫を浴びながら。

明は、ボディー・ソープのポンプを押す。

手の平の上に溢れてくる真っ青な液体に。

いつしか、銘の姿を重ねていた。

彼がいつも着ている、ダンガリーのシャツや。

最近、店に置かれている、ガラスの抽象画。

その絵を見るたびに、冷やりとした何かを感じるのだが。

銘には、そのことを言えなかった。

（どうも、あれ…好きになれないんだよな）

店の鍵を返してしまつて以来。

銘との間には、見えない壁が立ちはだかつているように思えた。それは、或いは嫉妬なのかもしれない。

彼と、あの人妻に対する。

それとは別に。

修子のが気になっていた。

本多と共に、ヨーロッパへ渡つた彼女のことが。

これは本当に、正しいことなのか。

それぞれがそれぞれに、不幸になるばかりではないのか。そんな予感が、明にはあつたけれど。

誰に話せるものでもない。

幼い頃から。

そう考える癖がついていた。

生まれてすぐに、祖父母の元へ預けられて以来。

気付くと、これほど無口になっていた。

解き放たれることのない思いは音楽となつて。

今は、自分の糧になつている。

それを支えてくれる人間は、思いのほか少なくて。

だからこそ。

銘が、最良のパートナーであることに変わりはなく。

彼以外と出来ない演奏があることを、明は知っていた。でも。

もう、戻れない。

それもまた、根拠のない予感のひとつとして。

空しく、胸中を彷徨うだけだった。

「…修子ちゃん」

「はい」

「どうした？ 遅れるぞ」

サングラス越しに、本多が微笑む。

LAXに降り立ったメンバーは、一様に疲れた様子だったが、修子のそれは、疲労と呼べるほど生易しいものではなかった。ロスアンジェルスを皮切りに、いよいよ、全米ツアーが始まる。現地のコーディネーターと挨拶を交わしたあと。

本多は彼女の手を引いて、モーター・ホームへ乗り込んだ。

「日程に余裕があるから。この方が機能的だと思ってね」

マネージャーに運転を任せると。

彼は、大きなソファアに横になる。

カーテンを閉めると、そこは全くの密室で。

修子にはようやく、機能的という言葉の意味が判った。

「おいで」

悪びれもせず、本多は言う。

やや迷ってから。

彼女は、その傍に腰を下ろす。

揺れる車内で、横になっていたせいか。
起き上がると、酷い眩暈がした。

これまで、一度も体験したことのない気分の悪さ。
トイレへ行き、ひとしきり吐いてみたもの。
だるさは増すばかり。

「…どうした？」

本多の声がする。

大事なツアーの初日だと言うのに。
自分のせいで、彼を煩わせたくない。
修子は、咄嗟にそう判断した。

「大丈夫です。ちょっと、車酔いしたみたいで…」

「ジェット・ラグもあるのかな。何処かで休もう」

「いえ、ほんとに大丈夫ですから…」

「まあ、いいさ。飯でも食おう。連中も飽きてる頃だろう」

一行の車はハイウェイを降り、途中のレストランへ向かう。
車内でも、店へ入ってから。
本多はずっと、彼女に付き添っていた。

「本当に大丈夫かい？ 顔が真っ青だ」

「あ、でも。外の空気を吸ったら、大分いい感じです」

「そうか。参ったな。車酔いのことまで考えてなかったよ。いいアイデアだと思ったのに…」

そんな彼の優しさに、今なお、心を動かされる自分がいる。本多の思いに、その期待に応えたい。

その一心で、ここまでついてきたものの。

長旅の疲れは、想像以上に溜まっていたようだ。

再び、レストランのトイレへ行き。

散乱したペーパーをどけ、嘔吐してみるのだが。すでに、胃液しか出て来ない。

便座を下ろし、その上に力なく座っていると。待ちきれずに、誰かが入ってきたようだった。

「…M a · a m ?」

「Y e s ?」

「A r e y o u a l l r i g h t ?」

「M a y b e …」

もう、出なくては。

気力を振り絞って、ドアを開けると。

目の前には、人の良さそうな若い女性が立っていた。

左手にはプラチナの指輪をし、上品な色合いのマタニティ・ドレスを着ている。

「I・m sorry:」

そう言つて、微笑みを返したあと。

また急に、吐き気に襲われる。

洗面台に両手をつき、気持ち悪さに耐えながら。

一体、自分の体に何が起こっているのか。

修子には、想像もつかなかった。

その時。

例の女性が、こんな言葉を口にした。

優しく、彼女の背中をさすりながら。

「Oh・ma・am! Are you pregnant?」

「え?」

「By any chance, are you with child?」

女性はそう言つと、自分の腹を両手の平で撫で。

それから、修子の腹部にそつと触れてくる。

につこり微笑みながら。

(…嘘でしょう?)

無心な笑顔に応えることも出来ず。

彼女は、愕然としていた。

もしそれが本当なら。

可能性は、あの数日間しかなく。

そのことを、彼に言える訳がない。

親切な夫人に支えられ、席へ戻ってからも。

彼女は、本多と目を合わせることが出来なかった。

そして。

この先、我が身に起こるであろう出来事を、想像する余裕すらなかった。

第四十話

気付くと。

漆黒の闇の中に、彼はいた。

ぬめぬめとした手触りの割に、重い感触はない。

まるで水の中にでもいるようだ。

不意に息苦しさを感じ、手を伸ばすものの。

その先には、何も触れそうにない。

視覚を奪われるということは、これほど恐怖を感じるものなのか。

銘は半ば戦慄しながらも、何とか体を動かしてみる。

足元のおぼつかないまま立ち上がってみて初めて、自分が座っていたことが判った。

壁を探り、スイッチを求めながら、彼は考える。

これはきつと、夢なのだろうと。

でなければ。

これほどの闇が、この街にある筈はない。

地下にある彼の部屋でさえ、テレビやPCのパイロット・ランプが点いているというのに。

伸ばした指先が、ようやく何かを捉えたところで。

彼は思わず溜息をつく。

それは、硝子の表面のように滑らかだったから。

削り取るように、爪を立ててみる。

何かが、ぼろぼろと崩れ出す音がして。

微かな明かりが、そこから漏れてきた。

（良かった。これで助かるぞ）

根拠もなく、そんなことを思いつつ。

彼は、なおも作業を続けた。

脆い硝子は、やや熱を帯びながら。

彼の指に合わせ、どんどん剥がれ落ちていく。

眩しさに目が慣れてきたあたりで、ふと目をやると。

その手は、青黒く変色していた。

丁度、死人の手のように。

はつとして、差し込む光に手を翳すと。

その向こうに佇む、女性の姿が見えた。

肩まである黒髪は、逆光の中で金色の光彩を放っていたが。

そんな位置で、顔など見える筈もない。

しかし。

銘にはすぐに、それが誰なのかが判った。

以前見た奇妙な夢。

深い森の中の、白服の女性だと。

「――修！」

叫んだところで。

銘は、現実の声を聞く。

そしてようやく、そこが自分の部屋であり、自分のベッドの上であることに気付いたのだが。

激しい動悸は治まりそうにない。

「…どうしたの？」

訝^{いぶか}しげな彩の声。

しまった。

そう、彼は思ったが。

彼女は微笑んで、口付けを求めてくる。

まるで、何も聞かなかったと言わんばかりに。
その唇が離れるのを待ってから。

彼はやっと、言葉を発する気になった。

「…いや。何でもないよ」

答えている間にも。

弱りかけた心臓が、彼の気を遠くする。

ぐったりと体を横たえたまま、犬のように息をして。
何とか、発作を抑えなければならない。

「また、夢？」

「そう。今度は黒だ。漆黒の闇と光…」

「レンブラントね。わたし、彼の絵も大好きよ」

くすくす笑いながら、彼女はベッドから起き上がる。

奥にある、シャワー・ルームへ向かうために。

そのほっそりとした背中を見送りながら。

ひとしきり、額の汗を拭った。

あれ以来、何かが狂い始めている。

そんな予感を抱いたまま。

照りつける陽光と、西海岸特有の爽やかな空気の中で、修子の思いは深く沈んでいた。

果たしてそれは、上手くいくのだろうか。けれど。

それが、どちらの子供であつたとしても。

本多には、言わなければならぬ。

慌ただしいツアーの中で、余計な心配をかけたくなかつたし。神経質な彼の、足手纏いまとになりたくなかつた。

サンタモニカ・ビーチのスタジオで、簡単なレコーディングを済ませたあと。

窓外に海を臨むカフェで、昼食を取っている最中。

彼女はナプキンに走り書きして、そつと本多に渡す。

”二人きりで、話したいことがあるんです。”

サングラス越しに、そのメモに目を通したあと。

彼は、微かに頷いた。

マネージャーやスタッフを別の席に移動させると。

白いマグカップを前にして。

本多は、優しく話を促してくる。

「…どうしたの」

「……」

「来る前から、体調が悪いみたいだけど。ひょっとしてそのことかい？」

「…本多さん」

「うん？」

「わたし…本当は、嫌なんです。大事なツアーの最中に、こんな話…」

修子が俯くと。

彼は怪訝な顔をして、サングラスを外す。
その様子が、只事ではないと悟ったからだ。

「…よく判らないけど。深刻な話みたいだね」

「……」

「構わないよ。どんなことでもいいから。話してご覧」

「…でも」

「うん」

「本当は、話さない方がいいのかもって…」

「あのね」彼は、微笑みながら言う。「君が思ってる以上に、俺はタフだし。いろいろな経験もしてきてるし」

「……」

「伊達に修羅場潜ってきた訳じゃないし、年食ってる訳じゃない。だから…信用してくれないか」

「……」

「例えば、そうだな。俺のことが、嫌いになったとか？」

「いえ…」

「じゃあ、他に好きな人が出来た？」

「いえ」

「やっぱり、大学に戻りたいとか？」

修子は、黙って首を横に振る。

その顔色は、すっかり失せていた。

「ふうん」彼は、首を捻った。「だとすると、俺には見当もつかないな。他に何か、君を困らせてることが…」

「困らせてるだなんて。むしろ、わたしです。本多さんを、困らせることになるのは…」

「それって…どういうことだい？」

「…あの」

「うん」

彼と、目を合わせた瞬間。

これまでに経験したことのない緊張が、全身を駆け上がってくる感覚に。

修子は辛うじて耐えた。

思考は混乱し、上手く言葉が出てきそうになかったが。

ここで言わなければ、あとからもっと大変なことになるのだと。理性は必死に、彼女を後押しする。

短気な本多が、根気強く言葉の続きを待っていることを知って。

彼女はようやく、決心した。

捨てられるなら、それでもいいと。

自分一人で、何とかしていくからと。

「…わたし」

「うん」

「—— 妊娠、してるみたいなんです」

その途端。

煙草を弄んでいた本多の指が、ぴたりと止まった。

それから彼は、その単語をゆっくりと反芻する。

一度ずらしたフォーカスを、再び合わせ直すように。

「…妊娠？」

頷きながら。

彼女は反射的に、視線を外した。

こんな状況で、彼の顔を見る勇氣などなかった。
だが。

本多の反応は、意外なものだった。

「それって…どうして判った？」

「昨日、トイレに立った時。言われたんです」

「じゃあ、そういう兆候も当然あったんだろう？生理が遅れてるとか、体がだるいとか…」

「…ええ」

「ストレートな言い方は許してくれるよな。こう見えても、一度は女房がいた身だから」

「はい」

「…それで。どうしたい？」

「……」

長い間、修子が答えられずにいると。
指先に挟んだ煙草を、ケースにしまったのち。
彼は、思いがけない言葉を口にした。

「…いい、きつかけだな」

「え？」

「俺と、一緒になるか」

信じられず。

彼女は、本多の顔を凝視する。

そんな返事が来るとは、予想もしていなかったのだ。

「長期のツアーは体に障るだろう。もし何なら、先に日本に帰っていてもいいし」

「え、あの。本多さん」

「うん？」

「いいんですか？」

「いって、どういって」と

「つまり、その…」

「墮ろせって、言って欲しい？」

「……」

「そう、言われると思ってた？」

「…はい」

「俺は、そこまで悪辣な男じゃないよ」彼は、サングラスをかけ直して笑う。「きちんと責任は取らせてくれ」

「でも…」

「うん」

「わたしで…いいんですか？」

「好きでもない女を連れ歩くほど、酔狂じゃないさ」

「……」

「早速、叔父貴に報告しないと。怒られそうだけど。一応、君の後見人だからね」

「…はい」

「そんな顔しないで。君にとっても初めてのことだろうし。おめでたいことなんだから」

修子の頬を撫でながら。

彼は、微笑んだ。

「心配することない。ラスベガスの仕事が終わったら、一旦日本に戻るという。すぐに手配させるから」

「はい。すみません…」

「謝ることはないよ。俺だって嬉しい。前の女房とは、からっきし

駄目だったからな」

人目も憚らず、キスをして。

彼は一見、上機嫌そうに見えた。
しかし。

本多の優しさに胸打たれる一方で。

修子の不安は消えた訳ではなかった。

これが、本当に彼の子供であるのか。

彼女自身にも、確信は持てなかったからだ。

第四十一話

「ありがとう。ここでいいわ」

ひとしきり、キスを交わしたあと。

にこやかに微笑みながら、彩は車から降りていく。

オートクチュールのドレスに身を包み、美しい髪を靡かせながら。

彼女のほっそりとした体と微笑みが、著名人の群れの中に紛れて消えるのを。

彼は、複雑な気分で見送っていた。

報道陣のカメラの放列、次々に差し出されるマイク。

着飾った女優やタレントが、これでもかとフラッシュを浴びせられている。

その光景はまるで、別世界の出来事のように思えた。

スノッブな空騒ぎを横目に見ながら。

彼はつい、溜息をつく。

彩をこういう場所へ送ってきたのは、初めてではないけれど、これではまるで…

刹那。

背後で炸裂する、凄まじいクラクション。

それと、ほぼ同時に浴びせられた罵声。

驚いて振り返ると、そこには真っ赤なフェラーリがいて。執拗にパッシングを繰り返す。

「くそっ」

反射的に舌打ちしつつ、銘はギアを入れる。

苛立ちと共に急発進させると、ホテルの中へ向かう人々が、一斉にこちらを振り返るのが見えた。ミラー越しに確認すると、フェラーリの後ろには、ベンツやリムジンがずらりと並んでいる。レセプションに出席する連中の車だ。

「…どうせ俺なんか、場違いだって言いたいんだろう?」

自嘲めいた言葉を発してのち。

胸ポケットから煙草を取り出して、火を点けてみる。

少し落ち着けと、そう言い聞かせながら。

外は雨。

そのせいでますます、憂鬱に拍車がかかる。

彩のことを知るにつれ。

彼は、自分と彼女との距離をより一層思い知らされることになった。幅広い交友関係と、世界規模のコネクション。

毎週のように行われる華やかなパーティー、ひっきりなしに鳴る携帯。帯。

最初のうちこそ、再会の喜びに満たされていた彼だったが。

彩にそんな輝きを与えているのは、槇村英なのだと。

彼女の夫に他ならないのだと。

覆せないその事実を前にして、ますます自信がなくなってくる。

（俺にはやはり、過ぎた人なのかもしれないな）

溜息と共に、紫煙を吐き出して。

ゆつくりと車を走らせながら、眩い高層ビル群を見上げてみる。

不夜城のような六本木ヒルズ。

グランドハイアット東京や森タワー。

生まれ育った街なのに。

この日はまるで、知らない場所のように思えた。

駐車場から、店へ向かって歩いている間も。

銘の気分は晴れなかった。

帰国してから、細々と営業の仕事をしていた頃、よくこんなことがあったなど。

歩道の上の水溜まりを避けながら、彼は思った。

見たこともないような豪邸、そこに集うハイソな人々。

彼等の要求に応え、耳触りのいいBGMを奏でながら。

こんなことをして、一体何になるのだろうか。

音楽や、それを奏でるミュージシャンに対する、日本とアメリカの考え方の違いに。

彼は次第に、疲れを覚え始めていた。

一流だろうが、三流だろうが、彼等にとってバンドマンはバンドマン。

一見ちやほやしておきながらも、その笑顔の影には、明らかな侮蔑が見え隠れする。

だから。

彩と自分との関係も恐らく、よくあるアバンチュールとしか見られずに。

退屈な結婚生活のスパイス程度にしか思われていない筈だ。

どれほど自分が献身的な愛を注いだところで、彩はそれでは満足しないのだろうか。

槇村が言った通り。

それぐらいのことは、彼にも容易に察しがついた。刺激が欲しいの、と、彩は口癖のように言い。

それが冗談ではないことも薄々理解していた。

今の彩は、類稀な才能を持った孤独な少女ではなく。

夫と多くのパトロンに囲われた、艶やかな蝶なのだと。

そんな現実を知るに従って。

銘は少しずつ冷静さを取り戻しつつあり。

子供じみた独占欲や年甲斐もない情熱を、恥じる気持ちさえ生まれつつあった。

けれど。

実際に彩に会い、彼女の微笑みに捕らえられると。

戸惑いも後ろめたさも、瞬時に消し飛んでしまう。

そんな自分の弱さを。

彼はやはり、認めたくなかった。

ジーンズのポケットに両手をつっ込んで。

降りしきる霧雨に打たれながら、店の前まで来た時。

彼はそこに立つ人影に気付いた。

「…何処行つてたの？」

明が問う。

煉瓦の壁に、背中を押し付けたまま。

純白のシルクシャツ、不揃いに伸びた長い髪、

ヴィンテージのジーンズに、リーガルの靴。
相変わらず、マニッシュな格好だ。

その問いかけに答える気にもなれず。

銘は黙したまま、鍵を放る。

右手で受け取ると、明は慣れた様子でシャッターを開け。

彼より先に、階段を下りていく。

その背中に向かって。

彼は、話しかけてみた。

「…明」

「うん？」

「ライブか何か？」

「うん」

「何処で？」

「Stage Four」

「西村さんの店か」

「そう」

「客の入りは？」

「いつも通りだよ。いや、葵目当ての若い女が多かったな」

「へえ」

「西村さん、ブログ始めたんだって」

「なるほどね」

「銘さんもやればいいのに」

「冗談。俺はそういうの向いてない」

「そうなんだよね。意外とマメじゃないからな」

銘が店の灯りを点け、アンプのスイッチを入れている間。明は自らビールを注ぎ、いつものスツールへ腰を下ろす。

「そつだ。これ、かけてよ」

そう言いながら、明は、一枚のCD-Rを彼に渡した。マルチプレイヤーのトレーに、それを押し込めたあと。彼もまたグラスを取り、サーバーからビールを注ぐ。明は特に文句は言わない。

そついうところは、以前から察しがいいのだ。

録音レベルが低いせいか、音がよく聴き取れない。

銘は右手を伸ばし、メインのボリュームを調節する。

JBLから流れてきたのは、硬質なピアノの音。

しかし、そのスタイルは明らかに彼女のものではない。

「…誰？」

「聴いてれば判るよ」

意味ありげに言うと、明はステージをちらつと見た。そこに、誰かがいると言わんばかりに。

銘も釣られてその視線を追ってはみたものの。

真っ暗な空間には、何も見えてはこなかった。

メロディアスなピアノが、ふわりと宙に消えてから。しばし、沈黙が訪れた。

そのあと。

突然鳴り響いた、ハードなドラム・ソロ。

特徴あるタイトなフレージングを、銘が聴き逃す訳はない。

「アランか？　じゃあ、これは…」

彼は、はっとして明を見たが。

彼女はにこりともせず、頷いた。

圧倒的な音の奔流、炸裂するパワー。

その中を、縦横無尽に駆け巡るピアニストの指先。

凄まじい迫力と息をつかせぬ緊張感に、彼は言葉を失って。

無人のステージに、思わず本多の姿を探してしまう。

さっきの明のように。

悔しいけれど。

こんなピアノを弾ける人間は、世界に一人しかいない。

殴りつけられたようなショックを感じながら。

銘はあらためて、本多の実力を目の当たりにした。

彼が知る、リリカルなスタイルはすではなく。

ホーン・ライクにブrouする、重厚な旋律と。

確固たる意思と自信に満ち溢れた姿さえ感じる。かつて銘が目指した世界に、本多は堂々と君臨し。賞賛と名声を欲しいままにしている。

しかし。

それは決して、一朝一夕に作られたものではなく。本多自身の努力と犠牲の賜物であることを、銘は知っている。研ぎ澄まされた感性の向こうに覗く、溢れんばかりの情熱と。その実計算され尽くした彼の音楽に。心は乱れ、そして熱くなる。

—— こんな演奏がしてみたい。
一度でいいから。

気付くと。

彼は無意識に、そんなことを祈っていた。とつくに諦めた筈の夢。

けれどそれは、夢ではなく。

あと少し、手を伸ばせば掴める筈のもの。

では、みすみす手放したのはどうしてか？

保身と、卑屈と、諦めの中で。

自分への言い訳に明け暮れた数年を、彼は思い出す。

俺は、音楽家ではなかったのか？

こんな現状に甘んじていていいのか？

音に込められた本多の思いは、彼の思いと共鳴し。溶け合って、反発し、また、激しく融合していく。帰って来いと。

恐れることはない。
でも。

俺には度胸がない。

あの人と渡り合えるような度胸が――

二十一分間の熱演を聴き終えたあと。

彼の頭の中は、真っ白になっていた。

それを見透かしたかのように。

明は、席を立つ。

「…どうだった？」

その問いにも。

彼は、上手く答えられない。

それほど、本多の演奏は素晴らしいものだった。

「来月出る新譜だよ。最初の一曲だけ貰ってきた。銘さんのために」

やや、相好を崩しながら。

明はCDをケースに戻し、カウンターに小銭を置く。

「あと…もう一つニュースがあるんだ」

「何？」

「聞いてない？ 馨さんから」

「いや、何のことだろう？」

「修子さん。帰って来るって」

「…えっ？」

「多分、何か事情があつてのことじゃないかな」

「事情つて？」

「さあ。そこまでは…」

肩を竦めながら、彼女はドアを押す。

それから、思い出したように付け加える。

「よく判らないけど。何だか、あんまりいい話じゃないみたいだ。
ニュアンスとしてはね」

そんな言葉を残すと。

明は静かにドアを閉めた。

振り返りもせずに。

その態度と、修子の突然の帰国の報せに。

彼は、引つ掛かるものを感じていた。

抗えきれない何かが、知らない場所で動き出しているような気配を。

第四十二話

平日だというのに。

成田空港は、多くの人で溢れ返っていた。

大きなカートを押す家族連れや、年配の団体旅行客。

その中に佇む、一人の青年。

肩にかかる明るい色の髪、シルバーのピアス。

タイトフィットなＴシャツに、黒レザーのブルゾン。

不躰な視線を撥ね退けるように腕組みをして。

搭乗手続きを済ませる巧の姿を、サングラス越しに見守りながら。

圭介は一人、浮かない顔をしている。

高校を卒業したあと。

アメリカへ留学することを選んだのは、巧自身だった。

その段階で圭介は、彼に捨てられたような気がしたものだが。

二年がかりで築き上げた絆は伊達ではないようで。

遠く離れていても、交際は順調に続いている。

高校二年の春。

ひよんなことから、巧と知り合ってから以来。

圭介は、この厄介な後輩の面倒を見ることが多くなったのだが。

気付くと、お互いを必要とするような関係になっていた。

母親の死によって、巧が天涯孤独となった時。

圭介は無理を承知で父親に頼み込み、彼を養子として家に迎えて貰い。

それ以来、都内のマンションで二人暮らしをすることになったのだ。

（女に不自由したことの無い俺が、まさか、男と付き合うことになるなんてな）

元々異性愛者である彼には、その事実が時折信じられなくなるくらいなのだ。

これまで付き合った女とは比べものにならないくらい、巧はひたむきな愛情を捧げてくれ。

そのために、これまでに経験したことの無いような、濃密な関係を築いてきた。

家族に言えない秘密を持っていることを、後ろめたく思っていた時期もあったが。

今はすっかり吹っ切れて、迷いはなかった。

プロ・デビューと同時にカムアウトして、巧とは公認の仲でもあり。音楽業界ではよくあることなので、仕事を続ける上での支障もない。

（…ま、今となっては、結果オーライってことか）

ようやく、手続きを終えたのか。

巧は彼に向かって、にこやかに手を振りながら。

銀色のバーを押し退け、真っ直ぐに駆け寄ってくる。

「ごめん！ 思ったより時間かっちゃって」

「いいよ。慣れてっから。お前のトロさには」

「もう、酷いなあ！」

「俺の口の悪さにも、いい加減慣れただろう？」

「うん。でないと、やっていけないもん」

くすくす笑いながら、巧は答える。

男にしては線の細い体、愛らしい顔立ち。

ブルーのＴシャツに、リーバイスのジーンズ。

何度となく抱き締めた恋人を、彼は目を細めて見返した。

「悪いな。最後まで見送れなくて」

「あ、ううん。いいよ。仕事なんでしょう？」

「まあな。今日は早目に入んなきゃならないんで」

「今度会えるのは、クリスマスかな」

「一番忙しい時期じゃねーの」

「頑張って帰って来るから。待っててね」

「俺のことはいいから、学業に集中しろよ」

「判ってるって。圭介もね」

「言っなつて。痛えんだから、その話題」

「あはは、ごめんごめん！」

「じゃ、そろそろ行くからな。気を付けて行けよ」

「うん。圭介も」

「たまには電話ぐらいしろよ」

「メールしてるじゃん、毎日」

「何か話した気がしねーんだよ、ああいうのって」

「判った。電話する」

「じゃな」

「うん。またね」

無造作にポケットに手をつ突っ込むと。

彼は、踵を返して歩き出す。

エレベーター・ホールへ向かう角を曲がるまで。
巧はずっと、自分の背中を見送っているだろう。
いつものように。

だから。

その直前で、一度手を振ってみる。
振り返りはせずに。

駐車場から車を出し、首都高に乗ったあと。

彼は煙草を咥え、空を見上げる。

一面の曇天からは、細かな雨が降り始め。
ますます、気が重くなる。

カーステレオから流れてくるのは、EXILE。
巧のCDだ。

「あの野郎。結局忘れていきやがって――」

そう呟いた途端。

不意に、視界が歪んだ。

思いの他空いている車線を、縫うように飛ばしながら。

空を仰ぎつつ、込み上げる感傷を振り解こうとするのだが。

この三年間、それが上手くいった試しはない。

「全く」ステアリングを握りながら、彼は溜息をつく。「俺が事故
って死んだら、お前のせいだからな！」

そう、毒づきながら。

彼は観念して、サングラスを外す。

溢れる涙を拭うために。

巧がアメリカに帰るたび、見送りに来たとしても。

別れ際のキスはいつも、エレベーターの中。

周囲の目を恐れるあまり、友達以上の距離にはなれず。

手を繋ぐどころか、抱擁すら出来ない。

そんな関係に、苦しさを覚えなと言ったら嘘になるけれど。

恋人はそれを知ってか知らずか、笑顔で手を振ってくれる。

巧の手前、突っ張ってはいたが。

本当は、彼と離れたくはなくて。

彼を離したくもないのだ。

でも。

そんなことを、今更言える訳もない。

涙を拭い、サングラスを掛け直すと。
気を取り直して、アクセルを踏み込んだ。
今日は久々のギグ。
場所は、R i o t。
銘の店だ。

「よお」

「あ、おはようございます！」

先にセッティングを済ませた葵が、笑顔を向けてくる。
アシンメトリーな前髪から覗く、黒目がちな瞳。
183cmの長身に、やや甘くハスキーな声。
がつしりとした体格に、すらりと長い指。

この美貌の青年に会ったびに、彼はつい思い出してしまうのだ。
葵が橋元由香里の愛人であるという、明の言葉を。

(…でも、まあ。これだけ男前なら、モテて当然だよな)

そんな言葉を押し殺しながら、テナーを用意していると。
寡黙なベースリストは、珍しく話しかけてくる。

「明さん、遅いですね」

「ああ、ちょっと遅れるらしいな。スタジオから真っ直ぐ来るらしいから」

「相変わらず、忙しいみたいで」

「そりゃそうだ。俺達と違って、あいつは売れっ子だから」

「圭介さん、売れっ子じゃないですか」

「そんなことねーって。俺なんかまだまだ…」

笑いかけて、ふと顔を上げた時。

葵の、いつになく真剣な眼差しに気付いた。

圭介は手を止め、あらためて彼を見返したが、その表情には、微かな躊躇いの色がある。

「…圭介さん」

「うん？」

「ご存知なんでしょう？」

「何が」

「俺の、噂のこと…」

その言葉に。

圭介は、反射的に溜息をつく。

それから立ち上がった、楽器をホルダーに置き、胸ポケットの煙草を取り出して火を点ける。

「噂って…橋元さんのことか？」

率直にそう言う。

顔きはしないものの、葵は、ずっと目を伏せてしまう。
それで圭介は、噂が噂ではないことを悟ったのだが。
勿論、口には出さない。

「とりあえずはな。でも、お前が話さなければ、それはあくまで噂だし」

「……」

「はつきりいってそういうの、興味ねえから。銘さんのこともそうだけど」

「……」

「子供じゃねえんだし。寝る相手ぐらい、本人が見極めればいいだけの話だろう？」

「…ええ」

「なら、別に問題はねーじゃん」

「……」

「ま、気にすんなって。俺も明も、そういうの関心ねえから」

「はい。ありがとうございます」

「それに。知ってると思うけど……」

「はい」

「俺も、人とは違う道を選んじまったからさ」

「……」

「誰かの生き方に文句言える筋合いじゃないし。その代わり、自分の生き方にも文句を付けられたかないんだよ」

「あ、はい。判ります、それ……」

「つまり、そういうこと」

話を切り上げようと思ったところへ。

ようやく、銘が帰って来た。

その後ろには明と、ドラムスの徹の姿。

「ごめんごめん！ 思ったより長引いてさ！」

「何やってんだよ、ったく！」

「わりーわりー！ 今すぐセッティングすつから！」

和気藹々と話す、ステージの上から。

圭介はふと、カウンターに視線を向けてみた。

ここ数日。

銘の笑顔を、彼は一度も見ることがなく。

目にするのは、「冗談も言わず、やけに思い詰めた顔をして。ただ黙々と仕事をこなしている姿。

銘の変貌振りに気付いて以来。

圭介は、言いようのない不安を感じていた。

近いうちに、彼に何か悪いことが起こるのではないか。
そんな、根拠のない不安を。

第四十三話

「…明」

「うん？」

「ごめんな」

「何が？」

「広告、出したつもりだったのに」

「あ、いいよ。よくあることだつて」

カウンターでビールを受け取りながら。

明は、笑顔で答えるけれど。

銘の気はどうしても晴れそうになかった。

毎週、音楽雑誌にスケジュールを送っているのに。

先月から、何故かそれが掲載されなくなった。

編集部に問い合わせても、手違いでしたと謝られるだけで。

ライブの客は減る一方だった。

今夜もギグにも、来たのは二十人ほど。

常連客と、葵の取り巻きのみ。

チャージ・バックも、大した額にはならないだろう。

それなのに。

明も他のメンバーも、何一つ文句は言わず。

俺達も営業しないとなあと笑うばかり。

そのことに。

銘は酷く、心を痛めていた。

スケジュールのことも、一連の嫌がらせのことも。

彼には、心当たりがあつたからだ。

彩と交際を始めて、三ヶ月が過ぎた今。

彼は次第に後悔し始めていた。

彼女からのメールも電話も、日を追うごとに少なくなり。

ここ一週間は、顔すら見ていない。

槇村英が帰国しているからだ。

そのことだけでも、彼の胸中は波立っているのに。

彩は、無邪気なことばかり言ってくる。

今夜は、槇村と一緒にレセプションに出席するとか。

フランス大使の家で会食する予定だとか。

当たり障りのない返事をしながらも。

彼は時に苛立ち、時に酷く傷付けられていた。

彩の住む世界と、自分のいる場所のギャップを思い知らされるたびに。

彼女を自分のものにするのが、単なる夢物語に過ぎないと思い知らされて。

あの槇村英に向かって、彩と別れてくれと言ったことさえ、まるで嘘のように思えてくる。

それなのに。

打ち上げの賑やかな雰囲気の中で。

彼はつい、携帯を気にしてしまう。

一人孤独に、彼女からの連絡を待っている間。

会いたい気持ちと、振り回されるのは沢山だという思いが激しく交

錯する。

そんな葛藤の心地悪さに、彼の手はひっきりなしに煙草を求め。明の呼びかけにも気付かないほどだった。

「…銘さん！」

はっとして、顔を上げると。

明は呆れ果てた様子で、溜息をつく。

「音楽。さっきからずっと止まってるんだけど？」

「あ、そうか。すまない」

「それと、ビールのお代わり」

「了解」

「全く、何やってんだか…」

ぼやきながらも。

こういう時の明は、酷く優しい。とは言え。

この店で始めたライブで、一人の客もいないステージは初めてで。途中からぼつりぼつりと人が現れて、銘は大いにほっとしたのだが。それはやはり、自分のせいとしか思えなかった。

「しかし、世の中不景気だよなあ。こんないいバンドを誰も聴きに来ないなんて」

と、圭介が溜息をつく。
葵は、くすくす笑った。

「まあ、そんな腐らないで下さい。たまたまですよ」

「お前はいいよな。例によって美女が押しかけて。俺なんかファンもつきやがらねえ」

「そんなことないですつて。サークルの連中ばかりですし」

「それでも、来るだけいいさ。俺も一度でいいから、きゃあきゃあ騒がれてみてえよ」

「あのねー」と、明がクールに混ぜっ返す。「あんまりそういうこと言ったら、巧くに言いつけるからね」

「いいよ別に。惚れてんのはあいつの方だから」

「お、言ったな？」と、徹が笑う。「どうした。珍しくお惚気全開じゃねえか」

「まあまあ、そう突っ込まないで。そんなことより、何とかなんねーの、これ？」

「何処も同じみたいだよ」と、明は声を低めて言う。「身内しか来ないか、或いはゼロか」

「てか、ジャズ自体がもう低迷期だからなあ」

「そうですね。ブルーノート以外、70年代以降を聴く人ってあんまりいないですし」と、葵。

「ましてや、日本のミュージシャンなんて、二束三文扱いだしな」

そんな愚痴を聞きながら、明はくすくす笑う。

「何で笑ってるんだよ？」

「いや、面白いなと思って」

「何が？」

「柱の陰に熱心な聴衆がいる」って話、知ってる？」

「ああ」と、圭介が頷く。「エリック・ドルフィーか」

「何だそれ？」

と、徹が首を傾げると。

葵がすぐさま説明する。

「客が入らないってメンバーがぼやいてた時、ドルフィーはそう言
って、平然と演奏してみせたそうですよ」

「そう。彼にだってそんな時代はあったんだ。僕等なら尚更そうじ
やないの」

明の言葉に。

三人は、顔を見合わせる。

日本へ帰ってきてからというもの。

明は時々、こんな樂觀を見せるようになった。

それは、彼女のリーダーとしての資質が開花した証拠でもあり。揺るぎない自信の表れでもあった。

ささやかな打ち上げのあと、一人になってから。

銘は、ステージのスポットを付けてみる。

久し振りに手にするウッド・ベースは、やけに重かったが。指板に触れた途端、そんなことは気にならなくなっていた。

柱の陰にいる観客をイメージして演奏すること。

そんな時代を経験したことのない自分が、どれほど恵まれていたのか。

彼は今更ながら気付かされた。

ニューヨークでの修行を経て、本多と共に最前線にいた頃は。現地のコーディネーターが、チケットを捌くのは最早常識で。

地方の小さなクラブであろつと、都内の大きなホールであろつと。

客の入りを気にしたことなど一度もなかった。

楽器と体一つで現地へ飛び、ただただ演奏に明け暮れる毎日の中で。自分は次第に慢心していったのかもしれないなど、銘は思った。

誰もいない、しんとしたステージの上で。

思いつくままに、即興演奏を繰り広げながら。

彼は、これまでの数年間を思い出していた。

病に倒れ、プロとしての活動を諦めてから。

本多の紹介で、この店を手伝うようになり。

やがて譬から、全てを任されるようになった。
明や修子、そして彩。

ここで出会った人間は、数え切れないけれど、
その殆どを、いつか俺は失うのかもしれない――

そんな思いを刻んでいる最中。

彼は、扉のベルが鳴る音を耳にした。

「彩さん？」

そう呼びかけて、顔を上げると。

彼の目に飛び込んできたのは、思い掛けない人物の姿。
胸の下まで伸びた髪と、以前よりほっそりとした体。

いつものジーンズに、スタンド・カラーの白いシャツ。
彼は信じられずに、目を見開いたまま。

ベースを椅子に寄りかからせて、ステージを降りる。

「……お久し振りです」

軽く会釈をしたあと。

修子は、真正面から彼を見据え。

それから、再び口を開く。

酷く、他人行儀な声で。

「少しだけ、話しても構わない？」

第四十四話

カウンターに向かつて、左から二番目。

そこが、修子のお気に入り席だ。

以前のようにそこに腰を下ろすと、彼女は疲れた様子でハンドバッグを肩から外した。

そのバッグに見覚えはない。

本多に買って貰ったものか、自分で買ったものなのだろう。銘は無意識に、そう推測していた。

沈黙に耐えかねて、彼はCDをかける。

パット・マルティノの”Live at Yoshi's”。

ベースレスのトリオだが、彼は気に入っていた。

「…オルガンは、ジョーイ・デフランシスコ？」

「そう」さすがに目を合わせられないまま、彼は背を向ける。「何か飲む？」

「珈琲を」

湯が沸くまでの時間が、永遠のように感じられる。

いたたまれない気持ちのまま、彼は修子の言葉を待った。

でも、彼女は何も言わない。

胸ポケットを探って煙草を一本取り出し、火を点ける。

修子は頬杖をつきながら、ステージを見詰めていた。

以前より幾分大人びた横顔。

彼女の態度は、札幌で会った頃とはまるで別人のようだった。それも仕方がない、と、銘は自分に言い聞かせる。

全て自分に責任があるのだと。

「…銘さん」

「うん？」

「ごめんなさい。やっぱり、オレンジ・ジュースにしてもいい？」

「ああ、いいよ」

火を止め、グラスに氷を入れた時。

彼は言いようのない不安を感じた。

修子の前にそれを置くと、彼女は黙ってグラスに触れる。それから、意を決したように口を開く。

「大事な話があるの」

「だと思った」彼は頷いた。「隣に座っても構わない？」

「どうぞ」

煙草を消したのち、やや距離を開けてスツールに座る。

彼女は俯いて、慎重に言葉を選んでいるようだった。

「…何から話していいのか判らないけど」

「うん」

「大学…やっぱり、通うの無理みたいで」

「そうか」

「ごめんなさい。せっかく入れて貰ったのに」

「仕方ないよ」

「それと…」

「うん」

「今、本多さんと一緒にいるの」

「知ってる」彼は極力、自分の言葉が冷たく聞こえないように務めた。「全米ツアーの真っ最中だろう？」

「そう…」

そこまで話すと、修子は再び黙ってしまう。その間、銘は思いつく限りの可能性を考えた。いい可能性と、悪い可能性の殆どを。

4曲目の”Welcome To A Prayer”が始まったあたりで。

修子はようやく、言葉を続けた。

「…それで」

「うん」

「わたし、多分…」

「うん」

「―― 結婚、すると思う。本多さんと」

今度は、銘が沈黙する番だった。

予想はしていたものの、実際に修子の口からその言葉を耳にした時。彼はやはり、ショックを隠しきれなかった。

これでついに、彼女を失うのだ。

もう取り戻すチャンスはないのだ。

そう思った途端、これまでの記憶がありありと蘇る。残酷なまでに鮮烈な記憶が。

ようやく、心の整理がついたあたりで。

彼は頷き、微笑むことが出来た。

「そうか」

「……」

「大事にして貰ってるんだね」

「うん。勿体ないくらい……」

修子のそんな言葉を聞きながら。

安心したとも、おめでとうとも言いたくない自分がいる。

これは一体どういうことだろうと、彼は考えるけれど。

答えなど、出る筈もない。

「…修」

「うん？」

「何か俺に、出来ることはある？」

「え？」

「その…お祝いとか」

「あ、ううん。何も要らない」

「……」

「今、一番忙しい時期だから。式挙げるとしても、パリへ戻ってからになるし……」

「なるほど」

「先に、馨さんのところへ報告に行ったの」

「びっくりしてただろう？」

「ううん。予想通りだって。わたしが行く前に、本多さんから電話来てたみたいだから」

「そうか」

「馨さんもお祝いしたいって言うてくれたんだけど。丁重にお断りしたから」

「……」

「だから、銘さんも気を遣わないで」

「……」

二本目の煙草を取り出しかけて、彼は何故か吸う気になれず、溜息と共に、それをカウンターの上に置く。

（何やってんだ、俺は…まるでガキだな）

そう自嘲しながらも。

彼はどうしても、二人のことを素直に祝う気分にはなれなかった。そしてこの時初めて、修子に未練を残していることに気付いていた。だから、喜んで送り出してやる気になれないのだと。その胸中を察したかのように、彼女は訊いてくる。

「ねえ…」

「うん」

「喜んでくれないの？」

しばらく迷ってから、彼は答える。
それが真実かどうか、何度も確認しながら。

「半分はね。ほっとしてる部分もある。本多さんはああ見えて、潔い人だから」

「……」

「ようやく身を固める気になったんだな、とか」

「……」

「修の憧れの人で。離れてからもずっと、好きだった人なんだから」

「……」

「修にとっても、夢だった筈だし。それはほんと、良かったと思ってる」

「うん……」

「ただ……」彼はその煙草を咥え、火を点ける。「半分は……素直に喜べない」

「……どうして？」

「俺のせいで、こんなことになったから」

「……」

「結果オーライって見方もあるだろうけど。やっぱり遺恨はあるよ」

「……」

「俺から言い出したのにね。勝手な言い草に聞こえても仕方ないって思ってる」

「ううん。そんなことない」

「でも…別れてまだ、半年も経ってないのに…」

その言葉に、修子は俯いてしまう。

やはり、打ち明けるべきなのだろうか。

彼にまだ、気持ちがあるうちに。

そう思いながらも、なかなか決心はつかない。

ふと視線を外した時。

視界の端に、見覚えのない大きな絵が映った。
刹那。

甦ったのは、以前パリで出会った槇村の言葉。

（彼は元気でいますよ。どういう訳か、僕の家内の絵をやけに気に入ってくれたみたいでね）

絶望と共に、彼女は目を閉じる。

例え打ち明けたとしても、彼が戻ってくる確証はない。

そう直感したからだ。

「―― 修？」

銘の声に、彼女ははっとして目を開けた。

「どうした？ 顔色が悪いな」

覗きこむような彼の視線に、修子は無意識に反応してしまう。

今しか、言うチャンスはないと。

「…銘さん」

「うん？」

「わたし…わたしね…」

その時。

突然、背後のドアが開く。

聞こえてきたのは、無邪気な彩の声。

「——ごめんなさい。すっかり遅くなっちゃった！」

第四十五話

修子が振り返る前に。

彩は、軽やかに駆けてくる。

原色のドレスに、黒いコートを羽織った姿で。

「ごめんね、遅くなって。途中で電話入れようと思ったんだけど…」

そこまで言いかけて。

彩はようやく、カウンターにいる人物に気付いたようだった。

「あ、ひょっとして！ 修子さんでしょう？」

多少酔っているのか。

彩は上機嫌な声を上げる。

二人の緊張を察することもなく。

半ば呆気にとられながらも。

修子は辛うじて微笑みを浮かべ、挨拶する。

「あ、はい。彩さんですか？」

「そうなの！ 主人からいろいろお話は聞いてたけど。まだパリにいらっしやるの？」

「いえ。本多さんのツアーに同行して、アメリカへ…」

主人という言葉に鋭く反応している自分に、腹立たしさを感じる一方で。

彼はつい思ってしまう。

あまりにもタイミングが悪過ぎると。

（よりによって、こんな時に…）

内心、そう思いながらも。

その苛立ちが、果たして彩に向けられたものなのか、それとも修子に向けられたものなのか。

銘には、判断のしようすらない。

彼のそんな葛藤には、まるで気付かずに。

彩はますます、明るい声で言い放つ。

「じゃあ、せつかくだから乾杯しましょう！」

「えっ？」

修子が思わず、目を見開くと。

彩はにつこり笑って、銘に向き直る。

「この前買ったシャトー・マルゴーがあるでしょう？ あれ開けてくれる？」

溜息をつきたい気持ちを押し殺して。

彼は言われた通り、ワインを出す。

そんなことよりも。

彼はずっと、気になって仕方がなかった。

修子がさっき言いかけた言葉の続きが。

しかし。

彼の思いとは裏腹に。

彩はいつになくはしゃいでいる。

それを見かねてか。

修子は遠慮がちに、こう答えた。

「彩さん、せっかくですけど。わたし未成年なので、まだお酒は…」

「そうなの？　じゃあ、他に何かない？」

「あ、結構です。そろそろ帰るので…」

「え、どうして？」

「今日は、結婚の報告をしに来ただけですから」

「結婚って？　本多さん？」

「はい」

「まあ、ほんとに？」

「ええ。お陰さまで…」

「主人も言ってたのよ。前々から、お似合いのカップルだと思ってたつて。おめでとぅー！」

「あ、はい。ありがとうございます」

「何かお祝いしなくっちゃ。何がいいかな？」

「いえ。皆さんそう言って下さるんですけど。お気持ちだけで…」

「そうはいかないわよ。ね、今度パリへ戻ったら、一緒にパサージュへ行きましょう!」

まるで昔からの知り合いであるかのように。

彩は修子に、そんな話をする。

これは一体どういうことなんだろう、と、銘は考えた。

ただ単に気立てが良く、親切なだけなんだろうか。

或いは、現在の恋人として、自分の立場をひけらかしたいだけなのか。

それとも…

「——銘さん?」

修子に呼ばれ、彼ははっとする。

その表情は、来た時と同じように、他人行儀なものだった。

「ごめんね。もう行かないといけないから」

「あ、そうか」

「これからもう一度、馨さんの家に顔出して。それからホテルに戻るね」

「送っていくよ」

反射的に、彼がそう言つと。

彩も笑顔で頷いた。

「そうね。もう遅いし。そうした方がいいわ」

「あ、いえ。タクシーで行くから大丈夫です」

軽やかにスツールから降りると。

彼女は財布を出し、ジューズ代をカウンターの上に置く。

「値上がりしてなきゃ、丁度だと思うけど」

「いいよそんなの」

「良くない。ちゃんと払わせて」

そう言いつつ、修子は踵を返し。

さよならもおやすみも言わずに、階段を上がっていく。

銘は咄嗟にその小銭を掴み、彩をその場に残してあとを追う。

修子がそれを受け取らないと知っていながら。

路上には、冷たい雨が舞っていた。

手際良くタクシーを止めると、修子はさっさと後部座席に乗る。

「青物横丁までお願いします」

「はい」

重い音と共に、ドアが閉められたその瞬間。

銘は運転席側の窓を叩き、話しかける。

「すみません。ちょっと待ってくださいますか？」

「はい？」

「すぐ済みますから」

「あ、はあ…」

若い運転手が、ギアをパーキングに入れるのを確認してから。彼はそつとドアを開ける。

振り仰いだ彼女の顔は、微かに青ざめて。

大きな瞳は、真っ直ぐに彼を見返してくる。

そこで彼は確信した。

何か重大なことを、彼女が隠しているのだと。

しばらく躊躇ってから。

修子はやつとの思いで口を開いた。

「…どうしたの？」

「さっきの話だけど。続きをまだ聞いてなかったから」

「え？」

「何か大事な話があるって言ってただろう？」

「もう言ったでしょう？」

「結婚の話じゃなくて。他にも何か、話したいことが…」

「いいの、もう！」

遮るように発せられた、彼女の言葉に。

思い掛けないその剣幕に。

銘ははっとして、口を閉ざす。

「判ったから。銘さんが今どついう立場にあるのか。嫌って言うほど」

「……」

「もう決めたから。こつちのことは気にしないで」

「……」

「彩さん、悪い人じゃなさそうだし。会えて良かった」

「そんな話してるんじゃない。なあ修、向こうに帰る前に、もう一度……」

「ごめんね銘さん。もう一度はないの」

「……」

「あたしこれで、最後にするつもりだったから。銘さんと会ったの」

「そんな……」

「最後だから、ちゃんと受け取って。今までも銘さん、あたしからは絶対にお金取らなかったから。ね？」

銘が言葉を失うと。

修子はようやく微笑んで、彼の手を離させる。
それから。

怪訝な顔をしている運転手に、優しく促した。

「すみません。出して下さい」

その言葉と共に。

ドアは、堅く閉ざされてしまった。

降りしきる雨の中に佇んで。

走り去るタクシーのテール・ランプを見詰めながら。

彼はようやく悟った。

自分が、取り返しのつかないことをしてしまったことを。
それによって、何もかも失ってしまったことを。

第四十六話

「—— ねえ、起きて」

声と共に、容赦なくカーテンが引かれた時。差し込む日差しに、彼は目を細めた。

「悪いけど、急いでくれる？ もう駅に着いたってさっき電話があったのよ」

いつの間にシャワーを浴びたのか。

由香里は全裸のまま、バスタオルをターバンのように頭に巻きつけていた。

背中には、長い髪が幾筋が纏わりついており。その先端から、透明な水滴が滴り落ちている。

葵はベッドから身を起こし、その背中に口付けしてみたが。彼女は顔を顰めて、さも嫌そうに舌打ちをする。

「もう、やめてよ、そういうの！」

彼女と付き合い始めて、もう二年。

横暴な態度にも、我儘にも、いい加減慣れてはいたものの。

こういう時はやはり、溜息をつきたくなる。

諦めてベッドから降り、服を着ている間に。

彼女は手早くシーツを引き剥がす。

まるで、悪いことでもしていたかのように。

シャツのボタンを留めている最中に。

由香里は慌しく着替えを済ませ、ドレッサーに向かって化粧を始める。

こちらを振り向きもしないで。

「忘れ物ないか、もう一度確認して」

「さっきしたよ」

「もう一度してって言ったでしょう？」

仕方なく、彼は自分の持ち物を調べる。

財布や携帯、小さな革製のディ・パックに至るまで全て。

「確認したよ。忘れたとしても、大したものじゃないから」

「判ってないわね。大したものじゃなくても、置いてかれたら困るのよ。バレたら洒落にならないでしょう？」

慣れた手付きで口紅を引きながら、彼女は答える。

葵は黙したまま、その言葉の続きを待ったけれど。

由香里はそれ以上、何も言わなかった。
だから。

ハンガーからジャケットを取り、ドアノブに手をかける。

「じゃあ、あとでまた」

「リハは五時だから。間違えないで」

「判った」

「それと、コロン変えた？」

「あ、うん」

「好きじゃないわ、それ」

「そう？」

「趣味悪いわね。前のにして」

「…判ったよ。戻しておく」

振り向きもしない背中に向かって、そう告げてから。

ドアを閉め、玄関へ向かう。

胸中は、激しく波立っていたけれど。

仕方がないと、彼は思っていた。

好きになった方が負けなのだと。

地下鉄で青山へ出てからも。

葵の気は晴れなかった。

大学構内のトイレに立ち寄った際。

ふと思いついて、ポケットの小瓶を取り出し、ごみ箱に放り込む。

一昨日、銀座で一緒に買い物をした際に。

由香里が好きだと言ったコロンで。

今日は、嫌いだと言われたものだ。

自分が言ったことも、した約束も。

由香里は悉く忘れてしまう。

それが、彼女が今抱えている病のせいだと知らなければ。彼も恐らく、すぐに手を切っただろう。

他の男達と同じように。

通い慣れた部室へ向かう途中。

気が変わり、彼は踵を返す。

こんな気分で、まともな演奏なんか出来る筈がない。そう思ったからだ。

「珍しいね。こんな時間に」

「すみません。ご無沙汰して」

「今日は何？ 仕事？」

「あ、はい。夕方から”スペース・アルファ”で営業があるんです」

「なるほど。じゃ、軽く食っていくかい？」

「はい」

Riotは、相変わらず空いていた。

昼過ぎだというのに、ピアノの傍のテーブルにカップルが一組いるだけで。

綺麗に片付けられたカウンターは、それ以外に客が来ていないことを如実に伝えている。

それでも。

いつもと変わらないダンガリーのシャツに、黒いエプロン。久し振りに目にした銘の笑顔に癒される。

三年前に上京し、銘と直接話せる空間を得て以来。

華々しい経歴とは裏腹に、謙虚で控え目な人柄に惹かれ。

音楽に対する姿勢や考え方に影響される一方で。

今もなお多くのファンに愛されている稀代の名ベーシストを、葵は心から尊敬し。

彼のようになりたいと、いつも願っていた。

それが、どうしてこういうことになるのか。

学生バンドに所属する傍ら、都内のあちこちで演奏活動をするようになり。

たまたまトラで引き受けた仕事で、橋元由香里と会って。

彼女に認められ、レギュラー・メンバーとして起用されたのはいいけれど。

二十も年上の人妻に、何故ここまで惹かれてしまったのか。どうしてこんなに溺れてしまったのか。

彼自身にも、よく判らなかった。

第一。

今の彼女は、出会った頃とはまるで別人で。

突然激昂したり、泣き出したりするだけならまだしも。

クライアントとも、トラブルを起こしてばかり。

あいつはもう終わったよと陰口を叩きながら、他のメンバーが離れていつてからも。

何故か、彼女を見捨てられない自分がいる。

（葵君が来てくれたから、わたし、本当に自分のやりたいことが出

来るようになったのよ)

(石田幸一? 神野勇次? 冗談でしょう? 葵君以外のベースな
んで、今更考えられないわ)

そんな言葉が、彼女の優しさが、どうしても忘れられなくて。
誰が何と言おうと、一番近くにしようと思ったのに。

些細なことで、心はどうしようもなく揺れてしまう。

どれほど好きでも、一生連れ添える訳じゃあるまいし。

彼女が倒れても、看病すらしてやれない。

万が一のことがあった時、死に際を看取ってやることも出来なくて。
それどころか、葬式にも出向けない。

愛人と呼ばれる立場である以上、出来ることは限られている。
だとしたら。

自分に出来ることは、一体何なのだろう。

こんな中途半端な関係で。

何か、彼女の役に立てているのだろうか…

「はい。お待たせ」

銘の声に。

彼はようやく、我に返った。

それを知ってか知らずか。

銘は、微笑みかけてくる。

「どうした? ぼーっとして」

「すみません。ちょっと、考え事を…」

慌ててフォークを取り、湯気の立つパスタに先端を潜らせると。
銘はくすくす笑った。

それから啜え煙草をし、フライパンを洗い始める。

「卒業後の進路、決まったのかい？」

「あ、いえ。それが…」

「仙台のご両親は、帰って来いって言わない？」

「言いますね。それでいつも喧嘩です」葵は、溜息をつく。「兄貴に跡を継がせるって話だったのに」

「あれ？ 兄弟いるんだ」

「言いませんでしたっけ？ 双子なんですよ」

「へえ。こんなイケメンが、この世に二人もいるんだ」

「やだなあ。銘さんまで。揶揄わないで下さいよ」

「葵見ると、いつも思うよ。天は二物も三物も与えるもんなんだなって」

「そんなことないですって。てか、人のこと言えなくないですか？」

「何言ってたんだ。俺ももうじき三十になるし、もう終わりだよ。年金の心配でもするさ」

「全く。そんなことないでしょう？」

「ほんとそうだって。バンドマンなんてろくなもんじゃない。親の言う通り、医者になってれば良かったよ」

「そんな、勿体ない。銘さんがいなかったら俺、ベースなんかやってませんからね？」

「お、言ったな？」彼は、くすくす笑った。「じゃ、あとで聴かせて貰おうか」

カップルが帰ってから。

銘はステージの照明を点け、葵を手招きする。

「アンプ使うか？」

「いえ、いいです。生音で充分」

スツールに腰を下ろし、自分の楽器に触れると。

いつも以上の緊張感が襲ってくる。

憧れの人が、すぐそこにいて。

こちらに気を遣い、店の掃除をしながらも。

自分の演奏をきちんと聴いてくれると判っているから。

目を閉じたまま、全身でビートを確かめながら。

思い出すのは、昨日のこと。

久し振りの逢瀬と、彼女の漏らす吐息。

真つ暗な部屋の中で、何度となく抱き合つて。

共鳴し、響き合い、溶け合つていく喜び。

それをいつまで、続けていられるのか。

年若い自分が、支えていけるのか。

そもそも。

由香里が自分を、頼りにしてくれているかどうかとも判らないのに。
こんなことで、やっていけるのか――

指慣らししてから、さらに二時間ほど弾き込んで。

ステージを降りる頃には、心地良い疲れと興奮を感じていた。

楽器をケースに戻し、カウンターに戻ると、ちゃんと珈琲が出されている。

「…どうでした？」

恐る恐るそう訊くと。

銘は、微笑みながら頷いた。

「ソロのフレーズが凄く良くなったよ。さては、勉強してるな？」

「邪道だつて言われるかもしれませんが、アドリブ・コピーするようになったんです」

「ブライアン・ブロンバーグだろう？」

「あはは！ やっぱバレますか？」

「そりゃあもう。あいつは化け物だ」

くすくす笑いながら、銘は煙草に火を点ける。
それから彼は、思い掛けない言葉を口にした。

「ところで…」

「はい」

「大丈夫か？ 由香里ちゃん」

「えっ？」

「この前珍しく、電話来てたんだ。葵に迷惑ばかりかけてるって、
凄く落ち込んでたよ」

「……」

「去年あたりから劇的に痩せたから、気になってたけど。そういう
ことだったのか…」

「……」

葵が目を伏せたので。

銘は、それ以上は言わなかった。

彼女のデビュー・アルバムに、ゲストとして参加したのがきっかけ。
で。

仕事以外でも、いろいろと連絡を取り合う仲ではあるのだが。

全幅の信頼を置く銘にさえ、由香里も葵も、お互いのことは決して
口外しなかった。

去年の暮れ。

異常な腹痛を訴えて、彼女が病院へ担ぎ込まれるまでは。

「…銘さん」

「うん？」

「ステージ4って…末期ってことですよね」

そう問われて。

銘は反射的に、口をつぐんだが。

それが結果として、答えになってしまった。

「由香里さん、治療はしないって。どうせ無駄だからって。そう言い張ってるんです」

「……」

「誰が言っても駄目で。旦那さんの言うことも、医者言うことも全然聞かないんです」

「……」

「俺も調べられるだけ調べて、諦めない方がいいって説得したんですが。もう、どうしていいのか…」

端正な顔を曇らせ、長い睫を伏せながら。

葵が漏らす様々な言葉を。

銘は、黙って聞いていた。

聞きながら、思っていた。

周囲が考えているよりずっと、葵は真面目な性格で。それだけに、抱えている苦しみも大きかっただろうと。けれど。

彼には、何も言えなかった。

何も言ってやれなかった。

銘自身もまた、同じような悩みを抱えていて。同じ過ちを犯している。

だから。

心苦しさを押し殺しつつ、口を開いた。

慎重に言葉を選びながら。

「…冷たい言い方かもしれないけど。こういう場合は、本人の意志を尊重してやるしかないだろうね」

「そうでしょうか…」

「あとは、考えつく限り、出来るだけのことをしてやればいい。悔いが残らないように」

「……」

「音楽やってる以上、葵が一番近くにいる訳だから。由香里ちゃんも、何だかんだ言って頼りにしてるんだ」

訥々とした銘の言葉に触れながら。

葵は、迷いが吹っ切れていくのを感じていた。

誰に何を言われようと関係ない。

銘の言う通り。

出来るだけのことを、やっていくしかないのだ。

第四十七話

葵が帰ってしまったと、店はがらんと静まり返った。いつもと同じように。

軽い頭痛を覚えた銘は、スツールに腰を下ろしたのだが、さすがに、煙草に手を出す気にもなれない。

（――俺は一体、何をやってるんだろう？）

葵との会話を思い出しながら、彼は溜息をつく。

若者らしい真剣さに胸打たれる一方で、そんなことは長くは続かないぞと揶揄する自分。

そのシニカルさが、我ながら嫌になる。

槇村英が帰国して以来、彩はすっかり変わってしまった。

滅多に繋がらない電話と、辻褄の合わない話。

彼女に愛していると言われるたびに、彼は苛立って。

ニュースでその姿を見るたびに、うんざりさせられる。

今はもう、何もかも知っていた。

貞淑な妻の振りをして、複数の男と通じていることも。

そういうことをして平気な女であることも。

周囲が噂していた通り。

騙されたとは思わなかった。

彼は彼で、あの時確かに彩を愛し。

彼女もまた、その思いに応えてくれたのだから、けれど。

銘はもう、疲れ果てていた。

見えない相手からの営業妨害や、世間の冷たい目。

妾の子と陰口を叩かれ、肩身の狭い思いをしていた自分がまさか、その父と同じことをするとは。

一時の恋情に絆され、道を踏み外す羽目に陥るとは。

彼は、夢にも思っていなかったのだ。

久し振りに、ブライアン・ブロンバーグのCDをかけ。

葵がコピーしていたのと同じフリースを口ずさみつつ。

彼は一人、店内を見回した。

地上から続く階段の下に、入り口のドアがあり。

入ってすぐ正面に、彼のいるカウンターがある。

その左手に、三十名ほどが座れる客席。

店の一番奥にステージがあり、左側手前にYAMAHAのG3。

本多が以前、自宅で使っていたものだ。

このビル自体が、馨の持ち物ではあるけれど。

家賃収入0という訳にはいかない。

これ以上売り上げが落ちるようなら、やり方を考えなければならないだろう。

そう思いながらも。

いいアイデアなど、湧いてくる筈がない。

馨が自ら店を切り盛りしていた頃。

毎週のギグには、入りきらないほどの客が押し寄せて。

階段からその上まで、ぎっしりと人が並んでいたものだ。

伝統あるこの店を、任せると言われた時。

銘はさすがに驚いて、必死に固辞したのだが。

オーナーであり、友人でもある彼は、頑として聞き入れなかった。

例えツアーに出られなくても、ベースが弾けなくなっても、プロであろうと、アマチュアであろうと。

音楽を愛する以上、何処までもそれと関わっていくべきだと。それが、彼の自論でもあり。

同時に激励でもあった。

病のために翼を折られ、飛ぶ術を失った銘に対する。

この店を、俺が潰すことになるのか。

そう思うと、切なかった。

ようやく煙草に火を点け、深々と紫煙を吸い込みながら。

しんとした空間に、ブロンバーグの重厚な低音が響いている様を。

彼は、ぼんやりと聴いていた。

明や圭介、徹や葵。

年若いミュージシャン達が、健気に頑張っているのに。

週末の客足はさっぱりだった。

噂を聞きつけたファンが、辛うじて駆けつけてくれはするが。

数多くのミュージシャンを迎えていた頃が、まるで嘘のように思える。

それも、俺のせいだ。

俺が、馬鹿なことばかりやっているから――

煙草を揉み消そうとした刹那。

突然、電話のベルが鳴る。

どきつとした。

時計を見ると、七時を回ったばかり。

嫌な予感が胸を覆っていく。

けれど。

相手が誰であろうと、今更逃げる訳にはいかない。
意を決して、銘は立ち上がる。

取り上げた子機は、辛抱強く鳴っている。
液晶ディスプレイには、表示圏外の文字。
国際電話だ。

「…はい。R i o tです」

そう言っただけのもの、相手は何も言わない。
回線の状態が悪いのか、微かなグラウンドノイズが聞こえてくる。
一瞬、いつもの無言電話かと思ったのだが。
銘は黙って、相手の反応を待った。

「——銘か？」

ややエコーのかかった声。

艶のある低音。

それを、彼が聞き間違っ訳はない。

「はい」

「今、話せるか？」

「大丈夫です」

「ほんとに、話したくないんだけどな。お前となんか」

「……」

「叔父貴にうるさく言われたんでね。筋は通せって」

「筋だなんて。もう、俺とは関係のないことですから」

「そうか。それならこっちも気が楽だ」

彼らしからぬ、沈んだ声。

その向こうから、微かな溜息が聞こえた。

一人なのだろうか？

そう思っで、銘は咄嗟に耳を欹ててみたが、意に反して。

それは、彼自身が漏らした溜息だった。

「さて。何処から話すかな？」

穏やかな口調で、本多は続ける。

如何にも、気が進まないといった調子で。

「てつとり早く、主文から伝えるべきかな？」

第四十八話

久し振りに耳にする本多の声に。

銘は、緊張を隠せなかった。

それでも。

再びカウンターに移動して、高いスツールに腰を下ろし。

敬愛するピアニストからの言葉を受け止める覚悟を決めた。

法学部卒の本多の口から、主文という言葉が発せられた以上、悪い知らせであることに違いはなく。

ただ。

それが何であるかは、想像もつかなかった。

「—— 修子ちゃんに会ったか？」

「あ、はい」

「直接、話したか？」

「ええ」

「そうか」彼はまた溜め息をつく。「じゃあ、それほど驚いたりしないな」

「「ご結婚のことですよね？」」

「まあな」

「おめでとつございます」

反射的に発した言葉は、恐ろしく乾いていて。銘は一瞬、しまったと思ったのだが。

本多にはすぐに、見透かされてしまった。

「何言つてやがる。本心でもない癖に」

「そんなこと…」

「本当に嘘つきだな、お前は」

「……」

「どうしようもない奴だ」

「……」

「そこがまた、可愛くて。憎たらしいところでもある」

「……」

電話の向こうで。

からん、と氷が揺れる音がした。

目に浮かぶのは、彼がロックグラスを眺めている姿。

ライブのあと、打ち上げの席で。

周囲の喧騒に紛れつつ、自らバーボンを注ぎ。

琥珀色の液体を飽かずに眺めている癖が、本多にはあった。

彼がグラスを弄んでいる時は大抵、何かしら思い悩んでいる場合で。

重大な決断を迫られている時期であることが多かった。だから。

銘は黙したまま、彼の言葉を待つ。

「…銘」

「はい」

「俺は、決めたからな」

「……」

「いい加減、遊んでる年齢ニッじゃないし。彼女を幸せにしたいしな。今度こそ」

「……」

「出来れば、正式な形にしたかったんだが。あの通りの子だから……」

「ええ」

「俺も二度目だし。今回は内輪だけで済ませておくつもりなんだ。お前には悪いけど」

「いえ。お気遣いなく」

「いろいろ考えるよ。よりによって、娘みたいな年頃の子を嫁に貰うなんて、とかな」

「……」

「お前も知っての通り、俺は病気だから。この先、可南子と同じ思

いを、修子ちゃんにさせないとも限らん」

「……」

「右も左も判らない小娘を、パリに置きっ放しにしなきゃならないし。それに彼女が耐えられるかどうか」

「…本多さん」

「うん？」

「それは…質問なんですか？ それとも、相談ですか？」

「どっちでもない。単なる報告のつもりだ」

「……」

「聞きたくないか？ こんな話」

「いえ。そうじゃなくて…」

「何か引っ掛かるか？」

「最初に仰った、主文という言葉の意味が判らなくて」

「ああ」彼は、またからんと音を鳴らす。「それな」

「何か、良くないことでも？」

「いや、良くないことじゃないさ。むしろめでたいことじゃないか」

？ 世間的には」

ぶっきらぼうな言葉に。

銘は、何とも言えない違和感を覚えていた。結婚の報告にしては冗長過ぎるし。

本多らしからぬ迷いや、葛藤さえ感じられる。

これはどういうことだろう、と銘は考えた。

彼はまだ迷っているのか？

彼女と結婚することを。

それとも。

俺に気を遣っているだけなのか？

銘が訝しんでいると。

察してか、本多は急に話題を変えた。

それも、思い掛けない方向に。

「——ところで、槇村英の方はどうなった？」

「え？」

「いろいろ、酷い噂を聞いてるからな。お前が大変な目に遭っているって」

「いえ、そんなことは……」

「隠さなくてもいい。叔父貴の事務所にまで、匿名メールが殺到してるそうだ。お前を辞めさせると」

「……」

「あと、音楽関係の雑誌や番組、プロダクション、プロモーターにまで圧力がかけられてる」

「……」

「あいつの女房を寝取ったから、恨みを買ったのか？」

「…判りません。でも——」

「うん」

「そうされても、仕方のないことですから」

「馬鹿言つなよ。何でお前一人が、悪者にされなきゃならない？」

「……」

「詳しいことは知らんが、お前は一度は筋を通そうとしたんだろう？」

「それは、そうですねど……」

「槇村彩の公式ブログ、見たことあるのか？ 店の名前はおるか、実名まで晒されてるんだぞ？」

「えっ？」

「ひょっとして。お前、ネットやらないのか？」

「ええ。全く…」

「だからか」彼は、舌打ちする。「それなら良かった。見なくて正解だ」

「何処にあるんですか、それ？」

「見る必要なんかない。時間の無駄だ。ブログ上の発言なんて、書いてる人間の主観でしかないんだからな」

「……」

「とにかく。まだ未練はあるだろうが、いい加減目を覚ませ」

「……」

「何とかして手を切れ。お前が反論出来ないのを知ってて、ネットで陰口叩く女なんかろくなもんじゃないぞ」

「……」

彼の溜息を、耳元に聞きながら。

銘は堪え切れずに、煙草に手を伸ばす。

シヨックだった。

信じられなかった。

自分の知らないところで、彩がそんなことを言っていたなんて。真剣な思いを、笑いものにされていたなんて。だとしたら。

あれは、嘘だったのか。

愛しているという言葉も、毎日のメールも、
全て、嘘だったのか。

これまでのいきさつのみならず。

お互いの会話やメールの内容まで、断りもなく晒されていたことを
知り。

銘は、完全に打ちのめされていた。

誰とも口を聞きたくないくらいに。

無邪気な彩のこと。

恐らく悪気はなかったのだろう。

彼はそう思った。

けれど。

それは思わぬ場所で、周囲を巻き込んで。

研ぎ澄まされた刃となって戻ってきた。

それは誰のせいでもなく。

自分の責任だ。

自業自得という言葉を、何度となく思い浮かべながら。

絶望の中で、銘は思う。

馬鹿なのは自分だと。

こんな形で裏切られるとは、夢にも思わずに。

彼女を信じ、庇い続けていた自分が。

救い難い馬鹿だったのだと。

だから。

もう終わらせなければと思った。

例え悪者にされても、世間から今以上の非難を浴びても。

彩に対する気持ちは真剣だからこそ。

未練があるからこそ、潔く身を引かなければと思った。

「――銘」

「…はい」

「大丈夫か？」

「ええ」彼は、目頭を抑える。「大丈夫です」

「もしまた何か、お前の身边で嫌なことがあったら。連絡してくれ」

「……」

「俺だって、多少のコネクションはある。槇村英がこれ以上お前を苦しめるなら、俺にも考えがある」

「そんな。本多さんにそんなことして戴く義理はありません」

「義理だって？」彼は初めて笑った。「何馬鹿なこと言ってる。俺がそんなことで動く人間だと思ってるのか？」

「……」

「ニューヨークでお前と知り合って。一緒にツアーして…」

「……」

「悔しいけどな。どんな一流どころとやっても、俺は忘れられない」

んだ。あの頃のお前のベースが」

「……」

「今は無理かもしれないが。お前は、いつかはここに帰ってくるベ
き人間なんだ」

「……」

「だから、ちゃんと話しておかなきゃと思って電話したんだ」

「ええ……」銘は、やっとの思いで返事をする。「ありがとうござい
ます」

「何処まで話したつけ？ 槇村英の件と。あと、結婚の件は報告し
たよな？」

「はい」

「ああ、そうだ。赤ん坊の件はまだ話してなかったな」

「赤ん坊の件？」銘は、首を捻った。「ええ、まだ伺ってませんで
したが」

「まだ伺ってませんって……お前、修子ちゃんから聞いてたんじゃな
かったのか？」

「……何のことです？」

そう問い返すと。

本多は、本気で呆れているようだった。

その意味さえ、銘には判らない。

この言葉を聞く瞬間までは。

「―― 妊娠してるんだよ、彼女」本多は、つっけんどんに言う。
「じきに、五ヶ月になる」

第四十九話

本多が口にした、思い掛けない事実を。

その言葉の意味を、銘は一瞬捉え損なつて。

何度も、頭の中で繰り返す。

それが一体、どういう意味を持つのか。

どういふ影響を及ぼしていくのか。

彼は瞬時に認識したけれど。

理性は、頑なに理解を拒んでいる。

何故なら。

彼は、知っているからだ。

本多と同じように。

その子供の父親が、果たして誰であるのかを。

長い長い沈黙。

国際電話特有の、低いハムノイズ。

その向こうでまた、からんと音がする。

本多がグラスを揺らしているからだ。

「…驚いたか？」

本多の問いかけに。

銘は、答えられなかった。

考えれば考えるほど、頭の中は混乱して。

文字通り、真っ白になっていく。

「お前には、説明しておいたもんな。俺が可南子と離婚する時、吞

「まされた条件を」

「……」

「女つてのは、恐ろしいもんだ。さすがの俺も、まさかあんな形で復讐されるとは思わなかった」

「……」

「口には出さないが、相当恨みに思ってたみたいでね。あちこちに女作りまくってたことを」

「……」

「結婚しているうちはまだ良かったんだ。いざ離婚するとなったら、手の平返すみたいになっとな」

「……ええ」

「切らなきや離婚は承諾出来ないと。要するに、よその女と子供作られたくなかったんだろ」

「……」

「だから、ありえないんだよ。どう考えても。俺の子供である訳がない」

「……」

「判るか？ 俺の言ってる意味が」

彼の言葉を聞いている間でさえ。

銘にはまるで、実感が湧かなかった。

可能性があるとしたら、札幌で彼女と会った時で、それ以外には、考えられなかった。

「――銘？」

「あ、はい」彼は、必死に言葉を探す。「聞いてます。ただ…」

「ショックなんだろう？」

「はい…ショックというか…」

銘が言葉に詰まると。

本多は、優しい声でこう続けた。

「それにしても――皮肉なもんだな、お互い」

「……」

「何でこんなことになるかな？」

「……」

目を閉じて、彼の溜息を聞きながら。

もう、どうしていいか判らなくなっていた。

あの時修子は、その事実を打ち明けに来たのだろう。

そこへ偶然彩が現れて、話せなくなった。

何も話せず、真実を抱えたまま。

タクシーに乗った彼女は、一体どんな気持ちでいたのか。
自分一人で、何もかも抱え込んで。

これから先、どうするつもりだったのか。

「…本多さん」

「うん？」

「彼女、知ってるんですか？」

「何を？」

「あなたが、子供を作れない体であることを」

「知らないよ。言う必要もない」

「……」

「彼女が、切羽詰まって俺を頼ってきた以上。突き放す訳にいかないだろう？」

「……」

「お前と以前何があるって、今、実際に一緒にいるのは俺だからな」

「…そうですね」

「彼女にも言っただけ。好きでもない女を連れ歩くほど俺は酔狂じ

やないし」

「……」

「お前がyesと言うなら、遠慮なく先へ進ませて貰うぞ」

「……」

「その代わり。このことは死ぬまで口外するなよ。叔父貴にも。他の誰にも」

「……」

「お前と俺の間だけの話だからな」

「でも……」

「うん」

「それで、いいんですか？」

「良くはないさ」本多は、あっさり言う。「彼女だって無傷じゃない。充分苦しんでる」

「……」

「自分の子供だろうと、そうじゃなかつた。俺は気にしないし。血の繋がりがなんか端から信じちゃいないしな」

「……」

「それとも。全部正直に打ち明けて、お前が彼女を引き取るか？」

「えっ？」

「そうすれば、全部丸く収まるだろう？」

「いや、それは……」

「今更出来ないって？」

「……」

「なあ、銘。俺は、責めてる訳じゃない。大したことじゃないさ、こんなことは。少なくとも俺にとっては」

「……」

「ただ—— お前が、この事実を受け入れられるかどうかってことだな」

「……」

「長くなったが。俺の考えは今言った通りだ。万が一気が変わったら、電話してくれ」

「……」

「じっくり考えてみる。お前のために、彼女のために。腹の赤ん坊のために。どうするのが一番いいのか」

「……」

「明後日の飛行機で、彼女は戻ってくる予定だ。出来れば、それまでに返事してくれよ」

「…はい」

「じゃあな」

「はい」

本多が電話を切るのを確認してから。

彼はようやく、終話ボタンを押し。

子機を置き、両腕を組むようにして。

そのまま、カウンターの上面に突っ伏した。

修子との会話を、これまでであったことを思い出しているうちに。

またずきずきと、胸は痛み出す。

息も出来ないほどに。

考えが纏まらないまま、空は白み始め。

道路へ面した窓が、ブルーから朝焼け色にゆっくりと変化した。

その半分が、毒々しい血の色に染まっていくのを。

銘はぼんやり眺めていた。

眺めながら、思い出していた。

昨日、本多と交わした会話と。

ここ数日の出来事を。

（—— 皮肉なもんだな、お互い）

そんな本多の言葉が。

彼の潔い決断が。

いつまでも、頭から離れなかった。

第五十話

本多に言われた通り。

修子の帰国予定を逆算すると、残された時間は二日しかない。

カウンターの上に、カレンダーを広げ。

何度となく見返しながら、銘は考える。

けれど。

彼に導き出される結論は、今は一つしかない。

彩と別れること。

そして、修子を呼び戻すこと。

果たしてそれが、俺に出来るのか？

昼なお暗い店の中で、彼はひたすら思考を巡らした。
しかし。

円満に解決する方法など、思い当たる筈もなく。

彼の決断は多かれ少なかれ、誰かの思いを損なうことに通じていく。
つまり。

彩と別れることは即ち、槇村英に敗北することになり。

修子と縊りを戻すことは、本多を裏切らせることに繋がり。

同時に、彼自身も、本多を裏切ることになる。

唯一の救いは、本多が情けをかけてくれたことと。

槇村英が、それを喜ぶだろうということ。

けれど。

彩の気持ちはどうなのだろう？

槇村英と別れて、自分と一緒にになると言ってくれた。

あれはその場の思いつきだったのか？

それに。

修子の思いはどれほどのものなのだろう？

自分に連絡をくれることもなく。

周囲に嘘をついてまで、彼と一緒になる道を選んだということは。

それが彼女にとって、最良の選択だったということじゃないのか？

何度も組み立て、何度も叩き壊してみるものの。

焦りとは裏腹に、彼の思考は一向に纏まらず。

ようやく出した結論も、考えた最善の策も。

何処かに無理と綻びが生じるばかりで。

そのどれもこれもが、上手くいくとは思えなかった。

突然、背後のドアが開いて。

明が姿を現すまでは。

「—— どうしたの？」

「え？」

「顔色が悪い」明は、コーヒークップを口に運びながら言う。「何かあった？」

「いや。何でもないよ」

「嘘ばっか。ほんと、判り易いんだから」

「……」

「何でもかんでも、そうやって一人で背負い込んで……」

「別に、背負い込んでる訳じゃない」

「だから、絶対に向かないって言ったんだ。銘さんみたいな人は」

「……」

「今更、口を挟むつもりはないけどね。僕には関係のないことだし」

欠伸を噛み殺しながら。

明は、譜面の続きを書き始める。

「どうでもいいけど。不倫なんかさっさとやめて、早く僕のところへ来てよ」

「何言ってるんだ。葵がいるだろう?」

「葵はまだまだ役不足だよ。技術も経験も、情熱も。銘さんの足元にも及ばない」

「そんなことはないさ。昨日も練習に来てたけど……」

「練習?」

「そう。スタジオ入りの前に、よく寄ってくれるんだ」

「何処にそんな余裕があるんだか」明は、溜息をつく。「修羅場の

真っ最中だったのに」

「修羅場？」

明は、面倒臭そうに頷いた。

あまり話したくないという時によくやる仕草だ。

「葵が？」

「聞いてない？」

「その時は」

「じゃあ、そのあとなんだな」

「何が？」

「葵も不倫してたでしょう？」

「…ああ。そうらしいな」

「ついに旦那にバレたんだ。携帯のメールと写真が証拠になって」

「嘘だろう？」

「ほんと。昨日遅く、坂口さんと共に電話が来たって。葵と、橋元由香里と。彼女の旦那から」

「……」

「僕もたまたま打ち合わせで、赤坂のスタジオにいたんだけど。そのあと、合流して…」

「……」

「ほんと凄かった。大変だった」

「…だらうな」

「見たくないよ。友達だろうと何だろうと。大の男が半狂乱になって、人目も憚らず泣き喚く姿なんて…」

「……」

「葵ならまだしも、銘さんのそんなところは。想像したくもないな」

「泣き喚いたりはしないよ。少なくとも」

「だらうね」明は、あっさりと言う。「銘さんはそういう人だよ」

「冷たいって意味か？」

「熱し易く冷め易い。良くも悪くもね」

「……」

「後悔してるんでしょう？」

そんな台詞を。

明は、真正面からぶつけてくる。

彼は思わず、言葉に詰まったが。
それが何よりの証拠になってしまった。

「ほら見る。じゃあ、さっさと足を洗うんだね」

「足を洗うつて。そんな言い方…」

「どれだけ綺麗にラッピングしても。恋だの愛だの言い訳しても。
所詮不倫は不倫だよ」

「……」

「始めたからには、終わらせないと。この先もつと大変なことになるに決まってる」

「……」

「週刊誌、新聞、ウェブニュース。言われっ放しで我慢出来る訳？」

「…本多さんにも、同じことを言われたよ」

「えっ？」

「昨日、電話が来て。その時、今と同じことを言われた」

「へえ」

「俺自身の評判なんか、正直どうでもいいんだ。彼女が言いたければ言えればいいし、正当化したければ…」

彼が、そう言いかけた時。

からんと、ドアのベルが鳴った。

はっとして顔を上げると。

信じられないことに。

そこに、彩がいた。

純白のコートに、紫のスカートを穿いて。

満面の笑顔で、手を振ってくる。

「ごめんね！　かなりご無沙汰しちゃった！」

「あ、いや…」

銘はさすがに躊躇ったのだが。

彼女は全く気にしていないようだった。

これまでの空白のことも。

好き勝手に書き殴っているブログのことも。

そして、カウンターにいるオブザーバーの存在も。

「あら、明さん！　久し振り〜！」

「どうも」彼女は、普通に頭を下げる。「凄いね、それ」

「でしょう？　オランダからの直輸入品なんだけど。ちょっと奮発しちゃったの！」

何事もなかったかのように、挨拶を交わしたのち。

彩は元気良く、銘に歩み寄る。

大きな薔薇の花束を、左腕に抱えるようにして。

「はい、銘さん！」

「えっ？」彼は、呆氣に取られていた。「どうしたの、これ？」

「先月はし損なっちゃったけど。今回はお祝いしようと思って」

「お祝い？」

答えながら。

彼は、明に視線を流す。
けれど。

彼女は知らない顔をして、頬杖をつく。
どうやら、席を外すつもりはないらしい。

場の雰囲気気付くこともなく。

状況を察することもなく。

彩は、無邪気に言い放つ。

彼が予想もしていなかったことを。

「やだなあ、忘れちゃったの？」彼女は、くすくす笑う。「記念日
よ！ 交際四ヶ月目の！」

第五十一話

笑顔の彩を目の前にした途端。

彼は、何も言えなくなってしまった。

これまでの苛立ちも、後悔も。

彼女の無邪気さの前にはいつも、掻き消されてしまう。

愛らしい顔立ち、以前より伸びた髪。

鮮やかな手付きで脱いだコートの下には、薔薇に負けない深紅のキヤミソール。

細い首筋と、抜けるように白い肌。

無心に自分を見詰めてくる大きな瞳。

あの日、病院で出会った時と同じ。

しかし。

彼は、寸前で思いとどまった。

なし崩し的に、彩を受け入れることを。

明が言うように。

どれほど愛そうと、どれほど欲しよう。

彼女は、槇村英のもので。

自分のものにはなりえない女性だ。

そうと知りながら、彼女を求め。

彼女に溺れ続けたこの四ヶ月。

しかし。

そのたった四ヶ月の間に、事態は驚くほど変わってしまった。
取り返しのつかない方向に。

彼の予想もしていなかった方角に。

薔薇を受け取ることもなく。

彼は、静かに彩を見返した。

二人でいる時の彼女は、従順で、可愛らしくて。

ネット上での発言が嘘のようだった。

彩の言葉に、何度となく傷付けられながらも。

銘はやはり、彼女から離れられずにいた。

周囲の輦蹙を買い、槇村からの挑戦を受け。

いけないことと知りながら、その思いを貫いてきた。
けれど。

それももう、終わらせなくてはならない。

この件はすでに、多くの人を巻き込んで。

彼一人の手に負えなくなっている。

少なくとも。

例え、彩を泣かせたとしても。

修子がそれを拒否したとしても。

自分がしでかしたことの責任は取らなければならない。

その思いと、オブザーバーである明の存在が。

今にも揺れてしまいそうになる彼を、現実繋ぎとめていた。

「…彩さん」

「うん？」

「大事な話があるんだ」

出来る限り、真剣にそう言ったのに。

彩は、きょとんとしている。

いつもと同じように。

「なあに？」

「ただ、ここじゃちょっと…」

ちらりと、カウンターを見やると。

明は、肩を竦めて見せた。

「僕だつて客だからね」悪びれずに、そんなことを言う。「ステージの方なら、さほど聞こえないよ」

「あのな。頼むから…」

そう言いかけると。

彩は、にっこり笑った。

「あら、別にいいじゃない？ 明さんの言う通りよ」

「いや、でも…」

「それとも、聞かれちゃまずい話なの？」

「まずいというか…」

「何それ？」彼女は、くすくす笑う。「ひょっとして、あたしと別れたいとか？」

「実は—— そうなんだ」

そんな言葉を口にした途端。

店の空気は、瞬時に凍りつく。

彩は、真っ直ぐに彼を見上げ。

視界の端に映る明は、また譜面を書き続けている。

流れているのは、キャノンボール・アダレイの”Know What I Mean”。

偶然とはいえ、タイミングが悪過ぎる。

呆然としている彩の背を抱いて、ステージ前の席に座らせると。

彼女は大きな花束を、どさりとテーブルの上に置く。

しばしの沈黙のあと。

可憐な唇からは、予想通りの言葉が溢れ出す。

「ねえ、どういうこと？」

「……」

「冗談でしょう？」

「…いや」

「どうして突然、そんなこと言うの？」

「突然って訳じゃない。ずっと考えてた」

「……」

「最初は、何も見えてなかった。君の夫のことも。周りのことも」

「……」

「それが、次第に見えてきた。自分が今、何をしているのかを」

「何言ってるの？ そんなの、最初から承知の上だったでしょう？」

「……」

「あたしもうすぐ、フリーになれると思って。一生懸命やってきたのに」

「……」

「槇村英の妻じゃなく、画家として一人立ちするつもりだったのに」

「……」

「何度も話したでしょう？ そのことは」

「知ってるよ。だけど……」

「銘さんは、あたしをどうしたいの？」

「どうしたいって……」

「だってそうでしょう？ これからっていう時に。勝手に弱気になつて！」

「そう取られても仕方ないよ。何を言われても……」

「あたしなんか、どうなったっていいんでしょう?」

「そんなことは思ってたないよ。ただ…」

「亭主がいるから。どんな酷い別れ方しても、そっちが面倒見られるだろうって。そう思ってるんでしょう?」

「ねえ、彩さん」彼は、さすがに困惑した。「もうちょっと、冷静に話せないか?」

「冗談じゃないわよ! あたし、振ったことはあっても、振られたことなんかないんだから!」

「……」

「これまで酷い男にばかり引つ掛かって。そのたび傷付いて。でも、銘さんだけは違うって。それなのに…」

「……」

「ねえ、はっきり言ってよ。あたしの何処が気に食わないの?」

「……」

「主人がいるところ? それとも、エキセントリックなところ?」

「…そうじゃないよ」

「じゃあ何? 一体、何が不満なの?」

「……」

「言えないの？」

「…言ってもいいのかい？」

「当たり前でしょう？ 隠し事は沢山。言って頂戴！」

毒々しい色の薔薇を、ぼんやりと眺めながら。

彼は、長い間迷っていた。

本当に言ってもいいのか。
けれど。

言わなければ、彩は絶対に納得しないだろう。

微かな頭痛を覚えながら。

銘は、静かに口を開いた。

彩に伝えるために。

これまで、誰にも打ち明けず。

誰にも話していなかった事実を。

第五十二話

「じゃあ話すけど——彩さんは、知ってたかい？」

「何を？」

「二ヶ月前から、監視カメラをつけたこと」

「……」

「叔父貴に頼んで設置して貰ったんだ。ここ数ヶ月、あまりにも嫌がらせが多かったから」

「……」

彼がそう切り出すと。

途端に、彩は口を閉ざしてしまった。

組んだ指の上に、視線を落としながら。

さっきまでとは別人のように。

それを見た時。

彼は、嫌でも確信した。

ベッドの上の花弁も、店の前にぶちまけられた血や臓物も。

全て、彩が仕組んだことなのだ。

「——どうして、あんなことしたの？」

「……」

「俺だけならまだしも。出演してる連中にまで、裏から手を回したりして…」

「……」

「彩さんは知らないかもしれないけど、彼等とは昨日今日の付き合いじゃないからね」

「……」

「幾ら金を積んで口止めしたところで。そういつ話は伝わってくるものなんだ」

彩は、答えない。

黙ったまま、左手の指をいじっている。

ハリウッド女優のように、美しく磨き上げられた爪。色とりどりのカラストーン。

彩がまだ、シルクスクリーンをやっていた頃。

水洗いをするせいで、彼女の指先はいつも荒れていた。けれど。

職人らしいその手が、彼は好きだった。

彼女の才能は、確かに素晴らしかった。しかし。

槇村英と離れて、やっていけるものか。

周囲は皆、そう思っていた。

彼がいるからこそ、彩は芸術家の顔をしていられるのであり。

画廊で絵を売る身分でいられるのだと。

美術業界での陰口も酷評も。

彩は、最初から相手にしていなかった。

知り合った頃、彼女が見ていたのは、ずっと先の未来で輝かしい夢の世界だけだった。

それが今は、飾り物の妻として。

彼と二人、マスコミに顔を見せない日はない。

次第に変質していく彩の姿を、間近で見詰めながら。

彼は、嫉妬とも羨望とも違う喪失感を覚えていた。

彼女が寄ってたかつて、別人に仕立てられていくような自分の知らない人間にされてしまったような感覚を。

長い沈黙。

音楽が止まると、明はカウンターから立ち上がり。

ラックを一通り眺めたあと、新しいCDをかけた。

チャールズ・ファンブローの”The Proper Angle”。

幾分ボリュームを上げてくれたのは、彼女なりの気遣いだろう。

まだ二十一の若さとは思えないほど、大人びた発言をして。

いつもクールな明ではあるが。

見た目以上に繊細な人なのだ。

「…ごめんなさい」

かなり経ってから。

彩はようやく、言葉を発した。

けれど。

銘には、彼女を責めるつもりはなかった。

何故なら。

これからもっと、重大なことを打ち明けなければならず。嫌でも、彼女に知らしめなければならぬ。

分別のある大人の振りをしていながら

自分が如何にいい加減で、卑怯な人間であるのかを。

「いいよ。そのことは。ビデオを確認した時は、ショックだったけど…」

「……」

「俺も最初は勝手に、君の旦那がしたことだと決め付けていたし」

「……」

「水道管を破られた時も、シャッターを焼かれた時も、被害はここだけで。怪我人は出なかったしね」

「……」

「俺に対する不満も、いろいろあったんだと思って…」

「違っの」遮るように、彩が言う。「そうじゃない」

「じゃあ、何故？」

「……」

「誰かに頼まれたのか？」

「……」

「脅されてたんだろう？」

「……」

「推測で申し訳ないけれど。周囲の男共に比べ、君はあまり気乗りしてない感じだったから」

「…銘さん」

「うん？」

「それが…あたしと別れたい理由？」

「全部じゃないよ。そのうちの一つではあるけれど」

「じゃあ、残りは何？」

彼は、目を閉じる。

煙草が吸いたかったが、そのためには、カウンターまで戻らなければならぬし。

こんな場面で吸うのは、何だか似つかわしくない気がしたから。

彼は諦めて、頭の中で言葉を繋ぎ直す。

出来る限り、正確な表現で。

正確に、事実を伝えるために。

「…多分。この話をしたら、君は俺を軽蔑すると思うよ」

「うっん。そんなことない」彼女は、首を振る。「絶対に」

「気持ちはいがたいけれど。それは無理だと思う」

「どうして？」

「……」

「ねえ。見損なわないで。あたし、芸術家なのよ？ その辺の女と一緒にしないで欲しいな」

「……」

「銘さんがあたしを捨てることはあっても、あたしが銘さんを嫌いになるなんてありえないもの」

「…そうかな？」

「約束する」明るい声で、彼女は話しかけてくる。「何でも話してあたし、絶対受け止められるから」

俯く彼の顔を、彩は覗き込んで。

懸命に、言葉をかけてくれる。

その優しさが、一途さが嬉しかったけれど。

銘は少しも樂觀してはいなかった。
だから。

いつも以上に慎重に、言葉を繋いだ。
なるべく、感情を表さないようにして。

「——
縊^よりを戻すつもりなんだ。修子と」

第五十三話

再び訪れた、冷やかな沈黙。

こんな緊張感は、生まれて初めてだ。

そう思った次の瞬間。

左頬に、鋭い衝撃が走った。

何が起こっているのかを把握する暇もなく。

反射的に腕を上げ、庇おうとしたのだが。

再び何かが、容赦なく頭上に振り下ろされる。

目を閉じる寸前、視界に飛び込んだきたのは。

薔薇の花束を振り翳している彩の姿。

制止する隙さえ与えずに。

彼女は無言で、それを振り下ろし続ける。

丸テーブルが引っ繰り返り、椅子が倒れても。

彩は一向に手加減しなかった。

その殺気に。

その豹変振りに。

腹立ちよりもむしろ、底知れない恐怖を感じた。

あの夜。

夥しい量の鮮血に平然と手を浸し。

怖がるどころか、綺麗な色だと陶然としていた彩。

その時と同じように。

何度となく鞭打たれながら。

彼は、殆ど抵抗しなかった。

両腕や顔の皮膚が破れ、血が滲み出してからも。

必死に、その仕打ちに耐えていた。

自分に非がある以上。

何をされても仕方がないと思っていた。

例え、不倫と呼ばれる関係であつたとしても。

彩の激昂は、憎しみは、当然のことだった。

だから。

それを、拒絶してはならないと。

真っ向から受け止めなければならなかった。

激しく、執拗な暴力。

彩の怒りを、憤りを、甘んじて受けながら。

次第に麻痺し始めた頭の中で。

霞む視界の向こうの風景を。

彼は何故か、美しいと思い始めていた。

怒りに頬を染める彩のことを。

千切れた花弁が宙を舞い、床に散乱していく様を

――

その時。

店内に、不協和音が響き渡った。

体に伝わる鈍い振動。

それと。

重いガラスが倒れ、砕け散る音。

突然の出来事に。

彩は、我に返つたようだった。

手を止め、銘を見下ろした状態で。

呆然と虚空を見詰め、立ち尽くしている。
息を切らせたまま。

激しい動悸と、胸の痛みを覚えながら。
銘は、額の血を拭いつつ起き上がり。

そこでようやく、状況を把握し。
事態を認識した。

一面に散乱している、ブルーのガラス。

粉々に砕け散ったそれが、彩の絵であることと。

彼女から貰った”melodia blue”であること。
そして。

分厚いガラスの作品を壁から引き剥がし、床に叩き付けたのは。
他でもない、明であることを。

「——いい加減にしてくれないかな？」

ガラス片を踏み締めながら、明は歩み寄ってくる。
その声には、苛立ちの色がありありと見えた。

「いいトシこいた大人が。みつともないと思わない？」

それにはさすがに、一言も返せずに。

彩は俯いて、花束を取り落とす。

とはいえ。

大輪の花は全て散り終えて、残っているのは茎だけで。
ぼろぼろに千切れたそれはまるで、何かの骨のように見えた。

「前にも言ったけど、僕はどっちの味方でもない。でも、さすがに
見てられないよ」

彼女が足を進めるたびに、かしやりとガラスが軋む。

それに文句を言うこともなく。

彩は、力なく椅子に腰を下ろす。

その肩に手をかけながら。

明は再び、言葉を継いだ。

「彩さん——」

「うん……」

「銘さんってね。僕からみても、ほんと、どうしようもない人なんだ」

「……」

「僕があなたの立場でも、多分もの凄く腹が立ったと思うよ。けど

……」

明は優しく、彩の両手を取る。

薔薇の棘に傷付けられたのか。

その手もすでに、血まみれだった。

「もう、いいでしょう?」

「……」

「もう、許してあげて」

「……」

「僕から言うことじゃないかもしれないけど。彼、じきに父親になるみたいで——」

その言葉に。

銘はぎよつとして、明を見る。
けれど。

明はにこりともせずに、話し続けた。

「だから——許してやってくれないかな？」

明がそつと手をさすると。

その上に、大粒の涙がこぼれた。

彩の細い体を抱擁しながら、明はその髪を撫で。

大丈夫、と何度も言い聞かせる。

丁度、自分の母親にいつもしているように。

そんな姿を見ているうちに。

銘は、死んでしまいたい気分に襲われていた。

馬鹿じゃないのか？

明の言う通りだろう？

二十九にもなって、責任の一つも取れないで。

一体何をやってるんだ、お前は？

自分を責める言葉しか思い浮かばない状態で。

それでも、彼は何とか立ち上がる。

痛みは全身に広がって、弱りかけた心臓は今にも止まりそうだ。

激しい眩暈と苦しさに耐えながら、椅子に腰を下ろすと。

タイミング悪く、電話が鳴り出した。

うつろな視線を明へ向けると。
察しのいい彼女は、ゆっくりと抱擁を解き。
電話の方へ向かって走っていく。
粉々になった絵を蹴散らしながら。

「—— はい、”R i o t”です。ただいま取り込み中…えっ？」

軽快な声が、突然低くなる。

泣きじゃくる彩の傍に椅子を寄せ、肩を抱きながら。

彼は、カウンターの方を眺めていた。

悪い知らせか？

いや。

これ以上悪いことなんて、起こりようがない。

そんなことを思いながら。

「あ、はい。今見てみます」送話口を塞ぎながら、明が言う。「銘さん、テレビ点けていい？」

「誰？」

「本多さん」

「えっ？」

「テレビ点けてみるって。今すぐ」

「それはいいけど、どうして——」

明がリモコンを向けると。

カウンターの上に備え付けてある液晶テレビが、息を吹き返す。流れてきたのは、ニュース映像。特別番組らしいのだが、銘の場所からは遠過ぎてよく見えない。

「今、点けてみたけど…あ、はい。どのチャンネルも同じみたい…」

「明、どうした？」

「…ちょっと待って」

子機を耳に当てたまま。

明は、画面を注視している。やけに、真剣な顔をして。

「俺にだろう？ 電話、代わってくれないか？」

「だから、ちょっと待ってって！」

一喝されて、銘は反射的に口を閉ざす。

その様子はただごとではない。

ポリウムを上げると、ようやく音声が聞き取れたけれど、内容まではよく判らない。

やや苛立ちながらも。

銘は、もう一度声をかけてみる。

今、世間で何が起こっているのか。

本多が何を知らせようとしているのか。

まるで見当がつかなかったからだ。

「明。教えてくれないか？」

「……」

「一体、何があった？」

「——逮捕されたって」彼女は、搾り出すような声で言う。「
槇村英が」

第五十四話

「――何だつて？」

銘がそう問い返すと。

明は、ちらつと彩を見やり。

それから、あらためて口を開く。

「贈収賄。彼、二科展や芸術賞の審査委員をやつてたでしょう？」

「ああ、そうだろうね。有名な人だから」

「それと、盗作疑惑。あとは、名画の贋作を作つてたこと。かなり大掛かりに。しかも、組織的にね」

「盗作だつて？」

「そう」

「まさか。何かの間違いだろう？ あれだけの才能を持つ人間が、どうしてそんなことをする必要が…」

そう言い掛けて。

彼は、はっと口を閉ざした。

いつの間にか、彩は泣き止んで。

しっかりと、明を見返していたからだ。

「…やっぱり、こういうことになったのね」

彩は、他人事のように呟いた。

何もかも承知していたかのように。

明がCDを止め、テレビのボリュームを上げると。

美術評論家やコメンテーターの、冷ややかな声が聞こえてくる。

「いや、わたしもね。最初からおかしいと思っていたんですよ。彼の手法はあまりにもこころ変わり過ぎる」

「荒川さんもお気づきでしたか。それにしても、日本を代表する洋画家が、盗作するとは…」

「彼はこれまで調子に乗り過ぎてましたよ。その割には、あまりにもお粗末な結末ですね」

手の平を返したような放談に、微かな腹立ちを感じながら。

銘は彼女を支えて立ち上がり、カウンターへ向かう。

それからあらためて、子機を受け取った。

本多と話すために。

「凄い騒ぎになってるみたいだな」

彼もまた、他人事のような言い方をする。

けれど。

銘にはすでに判っていた。

このことを、このタイミングでリークしたのが誰であるか。

「…本多さん」

「うん？」

「どうして、こんなことを？」

「話せば長いんだが。実は、俺と槇村は縁戚だね」

「えっ？」

「向こうもこっちも離婚再婚の多い家系なんで、ちょっと複雑なんだが」

「ええ」

「パリに移住した時も、あいつがいろいろと口利きをしてくれたんだ」

「はい」

「でも、俺は全く信用してなかった。あいつは昔から変わり者で、隠れて卑怯なことをするタイプだったし」

「……」

「講師時代も、学生の作品を流用したり。気に食わない奴を潰したり。随分と汚い真似をしててな」

「……」

「これまで売ってきた絵だって、あいつ本人が仕上げたものなんか一枚もない」

「何ですって？」

「昔はどうか判らんが。結婚してからはずっと、女房に描かせていた筈だ。そこにいる、槇村彩に」

信じられずに、彼女を見ると。

聞こえていたのか、彩ははっきりと頷いた。

「おかしい話だよ。盗作どころじゃない。あいつの富と名声そのものが、架空の存在だったんだからな」

「まさか。そんなことがあるんですか？」

「業界では有名な話さ。一般には知られてないだけで。何かと便利な奴だったから。暗黙の了解みたいなものだ」

「……」

「ことが大きくなったのも、別に俺のせいじゃない。誰もがあいつを引きずり下ろしたがってたからな」

「……」

「調子に乗ったあいつは、お前が妾腹であることまで書かせようとしたんだ。週刊誌の記者を買収して」

「……」

「それをまた自慢げに、俺に報告してきたもんだから。俺とお前の繋がりや、相当甘く見てたんだろっな」

「……」

「これは、誰のせいでもない。自業自得つてもんだ。俺はただきつかけをくれてやっただけで」

「…ええ」

「すつきりしたか？　少しは」

「複雑ですね」銘は、正直にそう答えた。「これから、一体どうなるのか…」

「それは、お前が心配することじゃない。あいつの問題だ。お前がやらなきゃならないことは他にあるだろう？」

「……」

「まずは、話し合って手を切ることだ。盗作や贋作製作に加担していた以上、彼女だってただでは済むまいさ」

「……」

「そこに、いるんだろう？」

「…はい」

「知らない仲じゃないからな。ちよつと話させてくれ」

銘が電話を渡すと、彩は素直に受け取って。長い間、相槌を打ち続けていた。

その横顔を眺めている間に、明が珈琲を淹れてくれる。カップを受け取り、スツールに座り直してからも。

彼には、状況がよく把握出来ていなかった。

別れ話と、突然の逮捕劇と。

マスコミの空騒ぎと、その当事者の妻。

彼の思考は、パズルのピースのようにばらばらで。

散乱した薔薇や絵と同様に、上手く噛み合いそうにない。

何もかもが終わったのだという安堵感と。

結局、自分では何も出来なかったのだという自己嫌悪。

彩の隣にいて、明と向かい合いながら。

その二つが、繰り返し襲ってくる。

それでも。

盟友である明が、そこにいてくれることと。

長い電話を切ったあと、彩が、以前の表情を取り戻してくれたこと。

それだけが、唯一の救いのように思えた。

「…知ってたの？ 何もかも」

「全部って訳じゃないけど」彩は、落ち着いた声で言う。「殆どは」

「それなのに、どうして…」

「愛してたの。彼のことを——」

「……」

「ううん。今もそう。彼なしでは、生きていけないって……」

「……」

「だから、戻らないと。やらなきゃいけないこと、沢山あるし……」

「…そうか」

「ごめんね、迷惑かけて」

「いいよ。最初からはつきり言わなかった俺が悪いんだ」

「…ねえ、銘さん」

「うん？」

「幸せになつてね。修子さんと」

「……」

「あたしも…幸せになるから。きっと」

そんな言葉に。

銘は、どう答えていいか判らなかった。

これからの彩の運命を思うと、胸はどうしようもなく痛んだが。彼にはもう、してやれることなど何もない。

だから。

余計なことは口にせず、ただ頷いた。

謝罪も、奇麗ごとも抜きで。

立ち去る背中を、そつと見送った。

もう関わるべきではないと、彼女が提案したから。その意思を尊重したのだ。

「――　ようやくエンディングかな」

店に、再び静寂が訪れた頃。

クールな声で、明が言う。

その問いに対して、銘は首を振る。

本多が言うように、やるべきことはまだ残されているのだ。

「電話、してみるよ。修子に」

「もし駄目だったら？」

「その可能性も勿論考えてる」

「へえ」

「本多さんと一緒になった方が、幸せには違いないさ。俺なんかよ
り」

「またそういう言い方する」呆れたように、明が言う。「いい加減
何とかしなよ。その卑屈っぷり」

「本音だよ。何ていうか…今回の件に限らず。本多さんに比べたら
俺はまだまだ未熟だし」

「ほんと未熟だよ。でも、少なくとも、銘さんは学べる人だから」

「……」

「じゃ、僕はこれで」明は、バッグを手にしち上がる。「後始末は自分でしておいてよ」

「判ってる」

「気が向いたら電話して。愚痴ぐらい聞いてやるから」

「気が向かなくても電話する。心配なんだろう?」

銘がそう言つと、彼女はするりとスツールから降り。肩を竦めて微笑んでみせる。

そんな姿も、昔と変わらない。

青と一緒にこの店へ来た時から。

不揃いな髪を靡かせて、明がドアから出て行つたあと。銘は、ようやく一人になった。

電話帳を開き、ホテルの番号を調べている間も。

思つのは、修子のことばかり。

結果がどうであれ、これは自分に課せられた義務で。

果たすべき責任だと。

何度も、そう言い聞かせながら。

メモとペンを用意したのち。

彼はあらためて子機を取る。

足元には、砕け散つた青いガラスの海。

左手の甲には、深々と残された傷。

その赤が、何故か目に染みた。

俺にはもう、音楽なんか出来なくて。

奏でるべき旋律なんかないのかもしれない。

ふと、そんなことを思ったけれど。

彼は首を振り、その考えを打ち消した。

進まなくては。

ここにいては、何も始まらない。

とにかく、進まなくては。

そう思いながら、発信ボタンを押し。

躊躇うことなく、ダイヤルする。

修子のいる場所へ。

一度は失いかけた半身を、再び取り戻すために。

くエピソードく

久しぶりのステージは、超満員で。

客席はおるか、階段下まで人で埋まっている。

カウンターにいる彼も、臨時で雇った学生も大忙しで。

ひっきりなしに飛んでくる注文を捌くのがやっとだった。

一度目の休憩のあと。

ようやく、仕事も一段落したあたりに。

彼はカウンター内の戸棚に凭^{もた}れ、安堵の溜息をつく。

（——こんな状態を、しばらく忘れていたな）

そう思いながら、煙草に手を伸ばすと。

明に、ぴしりと叩かれた。

「こら。禁煙中！」

「あ、すまない」彼は、慌てて手を引っ込める。「つい、習慣で…」

「僕だって我慢してるんだから。銘さんが我慢しなくてどうすんのか」

そう言いながら、ビールを呷る横顔を。

彼は、穏やかな気持ちで眺めていた。

あれから一ヶ月。

傷心の葵は、大学を休学し、アメリカへ行くことになり。

お調子者の徹は、大手レベルからデビューすることが決まった。売れっ子の圭介は、公私共に忙しく。

何処へ行っても、女性ファンに囲まれている。

明は黙々と、殺人的なスケジュールをこなしており。

連日のように、スタジオとライブハウスを往復する状態が続いている。

それでも。

時間のある時にはこうして、店に顔を出してくれている。そして。

葵がいない間という条件で、銘も音楽界への復帰を決め。少なくとも、月に二度はステージに立つことになった。

今日は、葵の留学記念セッションで。

狭い店内は、大いに盛り上がり。

彼の後輩や先輩で、ごった返している。

「いいぞ、岡村！」

「脱げ！ 脱げ！」

「いつそ背中で弾け！」

そんな学生達の掛け声を聞きながら。

彼はまた、溜息をつく。

またこうして、音楽を楽しめる日が来るなんて。

仲間達と、この店で騒げる日が来るなんて。

あの頃の彼には、想像もつかなかった。

「―― 銘さん。大丈夫？」

背後からそつと袖を引かれて。

彼は、振り返る。

伸びた髪を後ろで纏めた修子が、そこにいて。
大きな瞳を彼に向けている。

「大丈夫だよ。うるさくないかい？」

「ううん。でも、忙しくないかなと思つて。何か出来ることある？」

「何もないよ。手のかからない連中だから」

「でも、何だか落ち着かないな」

「いいから、横になつて。どうしても駄目なら声かけるから」

彼がそう言つと。

修子はようやく頷いた。

そんなやり取りも、久し振りだった。

あのあと。

銘の再三の謝罪に、彼女は答えようとしなかったけれど。
アメリカへ帰国した修子を追つて、彼が渡米した時には。
本多の説得もあつて、ようやく首を縦に振つたのだ。
とはいえ。

例の一件で受けた傷は、まだ癒えておらず。

醜聞や噂も、完全に消えた訳ではなかった。
それでも。

自分のしでかしたことを、それに対する批判を、彼は真摯に受け止めて。

もう二度と、繰り返さないと誓った。

後日、彩と交わした最後の会話の中で。

彼女にも、そう言われたからだ。

修子の姿が、店の奥へ消えてしまうと。

明は空のグラスを手に立ち上がり、自からサーバーの前に立つ。
それも、いつものこと。

「…銘さん」

「うん？」

「何か、言うことないの？」

「ああ」彼は、ステージから目を離さずに言う。「ありがとう。その節は」

「全然、心籠もってないんだもんなあ」

「そんなことないよ。照れてるだけだ」

「まあ、いいけどね」グラスに口をつけながら、明が言う。「誰にも話せないのが残念だけど」

「……」

「例の修羅場なんか。ファンの人が聞いたらどう思うだろう？」

「あのなあ。脅してるのか？」

「そんなつもりはないよ。今は、ちょっとした優越感もあるし」

「優越感？」

「うん」

「どういう意味？」

「この数ヶ月間で、銘さんの弱点、随分と見ちゃったから」

「……」

「ずっと、完璧な人だと思ってたけど。そうでもないんだなって」

「全然完璧じゃないさ」彼は、溜息をつく。「がっかりしただろう？」

「がっかりなんてことはないよ。今更ね」

「……」

「あと、もう一つだけ。判ったことがある」

「何が？」

「銘さんに対する、自分の気持ち」

思い掛けない言葉に、はっとしたけれど。

明は、平然とビールを飲んでいる。

彼と同じように、戸棚に凭れたまま。

ステージから目を離すこともなく。

「誤解しないで。銘さんが誰と寝ようと、誰と結婚しようと。そんなことはどうでもいいんだ」

「……」

「少なくとも。ステージ上であなたを独占出来るのは、僕だけだから」

「……」

「—— でしょ？」

「ま、まあ…そうだな」

「言っておくけど、手加減しないからね。こと音楽に関しては」

「……」

「銘さんが過去どれだけのビッグ・ネームだったとしても。関係ないから」

「ああ。その方が助かるよ」

「本気で言ってる?」

「本気だよ、勿論」彼は、腕組みした。「しかし恐ろしい奴。人前で口説くかね?」

「馬鹿みたいに鈍い人だからな」彼女は、溜息をつく。「ここまで言わせるか、普通?」

「光栄だよ、世界の飯田明に惚れられるなんて」

「惚れちゃいないね」明はぴしりと言う。「僕が惚れてるのは、圭介だ」

「はっ?」

「音楽的にね」彼女は、につこりする。「自惚うぬぼれは良くないな。銘さんの代わりは幾らでもいる」

「えっ、ちょっと待て。この前と話が――」

引き止めようと腕を伸ばすと。

逆に、その手を掴まれた。

「行こう。そろそろ出番だよ」

そう言つと。

明は彼を従えて、するりとカウンターを抜け出した。いつの間にか、ミュージシャンの顔に戻って。

「では、そろそろトリに登場して貰いましょう…って、まだ早いですよ！」

司会の学生が、慌てているにも関わらず。

明は、人を掻き分けながらステージへと向かう。その上にはすでに、テナーを構えた圭介がいて、ドラムに陣取った徹の姿も見える。

ピアニストは、そそくさとその場を離れ。

葵はベースを手にしたまま、銘に笑顔を向け。その左腕は、大きく開かれている。抱擁を待ちかねているように。

「おっ！ 真打ち登場か？」

「待つてました！」

「銘さん！」

眩いスポット・ライトに包まれ、割れんばかりの拍手と歓声を浴びながら。

二人は一步一步、迷うことなく足を進めていく。銘にとって。

また、彼女にとって。

一番似つかわしく、一番相応^{ふさわ}しい場所へ。

-
完
-

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4936h/>

青の旋律

2010年10月12日01時48分発行